

天才ゲーマーも異世界
から来るそうですよ？

alnas

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仮面ライダークロニクルはラスボスであるゲムデウスを倒すことによりクリアされ、未曾有のパンデミックも食い止めた宝生永夢とその仲間たち。

本編終了後とも、トウルーエンディング後とも異なる結末を迎えた世界で手に入れたそれぞれの日常、平和の中。永夢の元に送り主不明の一通の手紙が届く。

それは、新たなゲームの始まりだった。

目次

クロスエンディング	
restartする男たち	1
認識外のhigh speed world	14
調査開始のbrothers	24
箱庭の世界	34
New game起動?	48
箱庭の世界のtutorial	
I, ma 仮面ライダー!	60
新チームのstart	73
白夜のchallenger	92
問われるPreparedness	104
二人のGamer	116
下されたResult	128
固まるDecide	139
MのためのParadox	150
Godの介入	164
Hello 天才ゲーマーM	178
苦勞人Rider	191
最初のPartner	201
逆転のCard	213
適材適所のplayers	227
人命救助のTeam	240

F o u n d	天才ゲーマー	324
P u r s u i t	コンビ	313
鬼ごっこ	――	301
I n t e n s i f i c a t i o n !		
292	T o a p p r o a c h	大人組
t i o n	――	282
お約束な	F a l s e	r e c o g n i
l o g i n	超問題児	――
261	T r i b u l a t i o n	監察医
251	G a m e c l e a r	を待つ君たちへ

クロスエンディング

restartする男たち

その日、久々に雨が降った。

ここ最近はずれ模様が続いており、街には多くの人たちの笑顔があふれていた。

けれど今日に限っては外に人の気配はなく、ひどくなる雨の音だけが、迫ってくるようにやけに大きく聞こえた。

いまにして思えば、この雨音こそが、俺たちを水晶のような存在である彼に引き合わせたのかもしれない……。

事務所の雨漏りの修繕をしていなかったせいか、急遽用意したバケツに落ちる雫の音が止む気配はない。

「だあ、クソツ！」

リズム感のない不規則な音が聞こえ続けることに苛立ったのか、それとも止まない雨に嫌気がさしたのか。一人の男性が椅子から立ち上がり、窓の外の風景を眺め出す。

その男性とは離れた位置にあるソファに座る女性はまたか、と言わんばかりに肩をすくめ、その隣に座る少年は男性のことを見ようともしない。手に持つ一冊の本を一心不乱に読み込んでいるらしい。

「なんで今日みたいな雨の日に限って迷子の犬の搜索依頼が多いんだか……だが、受けた依頼はやり通すのが俺だ。この街の平和は俺が守る」

一人外を見つめる男性は壁に掛けられていたソフト帽をかぶり、身を白いスーツに包んでいた。

いまは右手を拳銃の形にして窓の外に向け、撃つ真似をしている。

「あれ? どうしたの翔太郎くん。もしかしてこの雨の中出かけるつもり?」

男性——翔太郎と呼ばれた白スーツの男は、女性の声に反応すると、

「天気なんて関係あるかよ。依頼があつたら動くのが探偵さ」

帽子を深くかぶり込み、人差し指を突き出した形の・手を上に掲げた。

おそらくだが、その格好を彼——翔太郎はクールでカッコイイものだと思ひ込んでいるに違いない。

「はあ、相変わらず……」

その先は言葉にしなかったが、彼女の隣にいる少年には伝わったのか、小さな笑い声が事務所の中に響く。

「フィリップ、おまえいま笑ったろ？ さては亜樹子の言葉の続きを想像しやがったな！」

「……いいや、そんなわけないだろう、翔太郎」

「いや、笑ったね」

互いに正面から向き合う翔太郎と、フィリップと呼ばれた少年。

普段は相棒と呼び合う彼らだが、小さな衝突——じゃれあいも多いのだ。

「まあ落ち着きたまえよ。それよりも翔太郎。これ、なんだかわかるかい？」

「あん？」

問い詰めている最中にフィリップが取り出した、緑と黒のカラーリングがされたゲームのガシャット。

つい最近販売の開始したゲームであり、販売開始当初からかなり人気があるという話をこの前聞いたばかりだ。

「こいつがなんだってんだよ。あ、さてはおまえ、話を逸らそうとしてるだろ！」

「もちろんさ。でもね翔太郎。それだけじゃないんだ」

「ああん？ そのゲームがなんだってんだよ」

言葉にしていけないのだからこれ以上怒るのは理不尽かと思ひ直した翔太郎は、フィリップの話に付き合うかと彼の前に座り込む。

「で、今度はゲームにでもはまったのか？」

「僕の中のブームはもうとつくの昔に過ぎている」

勝手な言い分と自分には理解できないことを既に理解しているだろうフィリップに呆れながら話を聞く翔太郎。彼は存外お人好しな面があり、殊更身内には甘いのだ。

「じゃあなんだってんだよ」

「キミはなにも思わないのかい？ このゲームのタイトルは『仮面ライダークロニクル』」

「仮面、ライダー……？」

フィリップの言葉に、翔太郎が明確な反応を示す。

やつとのこととで漕ぎ着けたフィリップは笑みを消し、表情を真面目なものへと変えた。

「そうとも。ゲームプレイヤーの話だと、どうも仮面ライダーがゲームキャラとして実際に存在しているらしい」

「なに？」

仮面ライダー。

それは彼らにとって、軽い言葉ではない。確かな意味を持つ言葉だ。

「噂ならそれでいいのだけれどね……翔太郎、なにもしないで放っておくにはあまりに

気になるのだけれど、キミは調査するべきだと思わないかい？」

「それはそうだが……」

この目で確かめるべきことではある。

なにより、もしも仮面ライダーの名が悪用されているのなら尚更だ。

だが、彼には愛する町を、そこで暮らす人々を守りたいという意志があるのだ。そう簡単にこの町を離れるわけにはいかない。

そんな相棒のことを理解しているからこそ、フィリップは告げる。

「風都の人たちにも、『仮面ライダークロニクル』をプレイする人が出てもおかしくない。わかっているのかい？ おそらくだが、このゲームにはなにかがある。動くのが遅れて傷つく人が出てからでは遅いんだ」

「フィリップ……」

力ない声が、少年の名を呼ぶ。

声に応えるように頷いてみせたフィリップを見て、翔太郎の目に力が宿った。

「行ってきたまえ、翔太郎」

そうして彼に地図を渡すフィリップ。

「ハイっはっ」

「現在『仮面ライダークロニクル』がプレイされている周辺の地図だ。いまわかったの

は、このゲームのルール程度。できればより詳しい情報が欲しい」

「おまえ、最初っから……」

「さあ、なんのことだろうね。ほら、動く気になったのなら急ぎたまえ」

「なんだか使われている感がなくもないが、やる気になった翔太郎がそんなことを考えるはずもなく。」

「話はまとまった？ それなら私はその『仮面ライダークロニクル』を実際にやってみて——」

「いや、それはやめた方がいい」

二人のやり取りを見守っていた女性——亜樹子が提案しようとするが、言い切るより早くにフィリッパが静止に入った。

「でもやればなにかわかるかもしれないじゃん！」

「使用時になにかあるかもしれない。いいかいあきちゃん、わからないものをわかろうとするのは大いに賛成だけど、危険があるかもしれないものを承知で使うのは翔太郎だけで十分だ。だから、せめてプレイヤーに話を聞くくらいに止めて欲しい」

「フィリッパくん……うん、わかった！ じゃあ翔太郎くん、調査に行くわよ」

「ちよ、おい待て亜樹子！」

酷くなる雨の中。

二人で一人の探偵の調査が始まった。

フィリップに渡された地図に従って雨の中を移動してきた翔太郎と亜樹子。

「つたく、雨の中飛び出しやがって。調査は明日からでもできたんだぞ?」

「なによ。翔太郎くんこそ、調査する気満々のくせに」

「なっ!? いいんだよ俺は! 相棒からも頼まれてるし、なにより仮面ライダーの名を悪用されてないか確かめなきゃならない義務があんだよ」

過去に「仮面ライダークロニクル」で戦闘が起きた地点に来てみるも、雨のせいかそれとももう行われないのか、この場所で例のゲームがプレイされることはなさそうだ。

「よく考えてみれば、フィリップが調べたルールと照らし合わせれば、屋外でやるゲームが雨の日に人集めてるわけないか」

「た、確かに……え? 私たち出損!?!」

「この雨の中、手がかりひとつ得れずに帰る、か……ねえな。おい亜樹子! 他も見てくぞー!」

雨音が激しくなる中、更に歩みを進める翔太郎。

それに仕方がないとため息を吐きながらも付き合う亜樹子。彼らの関係は短いもの

ではなく、翔太郎を始めとする数人はお互いの行動を読めているのだ。

「久しぶりの危険な香りがするからって、あまりはしゃがないでよね。ねえ、翔太郎くん！」

「うっせえな。わかってるよ」

言い合いを続ける二人だがその足取りは軽く、また、翔太郎は周辺の観察を怠ってはいなかった。だからこそだろうか。彼の視界に、フィリップから見せられた「仮面ライダークロニクル」と同じようなガシヤットを手に持つ白衣の青年が映り込んだ。

「あいつは……医者か？」

「え、お医者さん？ あの人がどうかしたの、翔太郎くん」

翔太郎の声につられて道の反対側を向く亜樹子。

彼らの視線の先には、確かに、白衣をまとった青年がどこかに向けて走っていく姿があった。

「翔太郎くん？」

そちらを向いたまま動かない翔太郎に声をかけるが、彼が反応する様子はない。

「ねえ、ちよつとつてば！」

「追うぞ亜樹子！」

しかし、そんな彼女の声が届くはずもなく。

なにかを確信した翔太郎はそのばから走り出す。駆ける先は、先ほど白衣の青年を追いかけるようで。

「私聞いてない！」

もちろん突然の行動を察していない亜樹子は、翔太郎の勝手な行動に口癖を叫びながら後を追いかけて行つた。

しばらく走ると、翔太郎は突然走るのをやめ物陰に潜む。

後を追ってきた亜樹子も文句を言いながら彼の隣で静かにしている。

なぜなら、彼らのすぐ近くでは追いかけていた青年と、見たこともない紫色の戦士が向かい合っていた。

「ねえ、翔太郎くん。あの人、危ないんじゃない？」

「いいや、そうは見えねえ。俺はあいつがフィリップに見せられたものと同じようなものを持つているところを見た。よく見てろ、きつとあいつも関係者に違いねえ」

「で、でもそうだったとしてもあの紫の、やけに強そうだよ！」

「つても、ゲームキャラなんだろう？ 本当に危険になったら止めてやるさ。まずはどんなもんか見せてもらわねえとな。しっかし、あいつは一体……」

そんな会話が聞こえているはずもなく。

二人がゲームの様子を観察しようとしている先でガシャットを取り出した白衣の青

年も戸惑っていた。

「なんだ、こいつ……見たこともないバグスター!」

本来なら彼——宝生永夢はいまここで戦う予定ではなかった。

始まってしまった「仮面ライダークロニクル」を終わらせるため、永夢とその仲間たちには倒すべき敵がいるからだ。仲間を取り戻し、想定外の存在が復活してしまったアクシデントはあったが、それでも協力体制は作れた。

だが、あとはターゲットである3対の敵を倒す予定だったときに限って、突如として現れた伝説の戦士クロノスの妨害を受けたばかりのときだ。

新たな敵の出現に敏感になっていたせいか、こうして見たこともない相手についてきてしまったことになる。

「おまえはいつたい、なんだ?」

なのに、この紫の戦士に誘われてここまで来てしまった。

いつたい、なんだというのだろうか。

「語るべきことではない。さあ、俺と戦え!」

「ちよつと待ってください! バグスター? それとも仮面ライダー? いったい誰なんですか!」

少しでも情報を求める永夢だが、それに答える様子のない戦士。

仕方ないとガシヤットを起動させようとするが、

「ほう。加賀美の話は聞いていたが、本当にいたとはな」

そこに歩きながら近づいてくる声。

「邪魔だ」

横槍を入れられたための苛立ちか、近づいてくる和傘をさした男性に紫の戦士が襲いかかる。

「危ない！」

「避ける！」

咄嗟に動けなかった永夢と翔太郎が一拍遅れで叫ぶが和傘の男は片手に傘、もう片方の手に豆腐の入ったボールを抱えていた。そして、一切取り乱すこともなくただ静かに歩を進める。

「だが、少しでも期待したのが間違いだっただか」

紫の戦士から繰り出される拳を最小限の動きで回避し、和傘を宙に放って、回し蹴りを叩き込む。

「ぐっ……人間の分際で！」

「やはりな」

空から舞ってくる和傘を手の中に収め再びさした男性は、鋭い視線を紫の戦士へと向

けた。

「二度死んだ男が蘇る……そんなことは有りはしない。第一、貴様の言葉は、拳は、あの男と比べ軽すぎた」

「貴方は、いったい……」

一連の光景を見ていた永夢は、和傘の男に話かけた。

「俺は天の道を往き、総てを司る男。天道——総司」

ポカンとしている永夢にボールと和傘を渡した天道は、改めて紫の戦士と向き合う。もちろん豆腐の入ったボールはしっかり持つていろと伝えるだけの余裕を持ちながら。

「おばあちゃんが言っていた。真の男は、一度見せられた輝きは二度と忘れないとな。貴様の輝きはあまりに弱く小さい。剣とは比べるまでもなくな。さあ、正体を見せてもらおうか。その姿を使った代償はでかいぞ」

どこからともなく、カブトムシの姿に類似したカブトゼクターが天道の元へとやってくる。

突如として現れた男——天道は、飛来してきたカブトゼクターを掴むと、この場に集まった全員が聞きなれた言葉を発した。

「——変身」

いまここに、ゲームのあらすじは全く別のルートへと移行した。

認識外のhigh speed world

突如として永夢の前に現れた天道総司と名乗った男は、たったいま姿を変え、重装甲形態をとる銀色の仮面の戦士としてその場に立っていた。

「貴様……」

紫の戦士が一步後ずさり、銀色の戦士は一步前に進む。

天道が変身した仮面の戦士——仮面ライダーカブトは自身のベルトに装着されたカブトゼクターに手を伸ばす。

「キャストオフ」

静かな声音と共に、ゼクターにある二段変身用のスイッチを操作し、

『Cast Off』

電子音声が発生されるにともなって重装甲形態を形作っていたマスクドアーマーに亀裂が生じ、四方へと弾け飛ぶ。

まるで昆虫の脱皮のように行われたキャストオフによって、銀色の戦士は本来の基本形態であるライダーフォームへと変身を遂げる。

『Change Beetle』

「どうした、かかってこい」

カブトムシを思わせる赤い仮面の戦士へと変わったカブトは、紫の戦士に一切の感情を抱かずに距離を縮めていく。

「おいおいおい、なんだってんだあいつは……」

「あんな仮面ライダーがいたなんて、私聞いてない!」

一連の流れを眺めていた翔太郎と亜樹子は驚愕しながらも永夢の近くに寄っていく。彼の安全の確保もあるが、なにより話を聞けそうな奴に聞いておこうといったところである。

「レベルアップ!? いや、なにかが違った……これは?」

しかし、そんな彼、宝生永夢も天道の変身した仮面ライダーカブトに驚くばかりだ。なまじ、自分たちの変身する仮面ライダーと似た節があつたせいか理解が追いつかなくなっている。というよりも、むしろ彼はレベルアップと言ってくれた方が永夢としては気が楽になるのだが……どうも、カブトゼクターを使用している時点でその希望はなさそうだ。

「おい、あんた。仮面ライダークロニクルについて、いろいろ知ってそうだな」

「え? あ……ここは危険です! 早く逃げてください」

永夢に話しかけた翔太郎は、しかし。

警告を受け、他でもない永夢の手によって逃がされようとされてしまう。

「いや、逃げるわけにはいかない。あそこで戦っている奴からも話を聞く必要ができたからな」

その手を払い、冷静に事の成り行きを眺め出す。

もちろん、片手にはいつでも乱入していけるよう、メモリらしきなにかを握りながら。「どうして……」

「んなもん決まってるだろ。俺たちは探偵で、そして仮面ライダーだからだ」

過去、一人になって止まらなかつた——否、最初から一人での理想郷を目指した男との戦いにおいても、翔太郎は戦う道を選んだ。いままでずっとそうしてきた。ただそれだけのこと。

人を助け続けることが、世界を救うことが、彼らのあり方なのだとしたら。

その心そのものが、彼らを仮面ライダーたらしめ、奮い立たせているのだ。

「あなたたちは、もしかして……」

「……」

永夢の疑問に無言のまま、翔太郎はカブトの動きを目で追う。

駆け出すようなことはせず、ただゆっくりと敵に歩みを進めるカブトは、まるで敵のことを脅威とは思っていないかのようで。自分こそが最強だと示しているかのようで

もあつた。

当のカブトは、紫の戦士との距離を詰めると、相手が握る刀型の変身ツール、サソーダイヤバーを武器として振り出した。

「所詮は紛い物。くすんだ輝きでは俺には届かない」

幾度となく斬りつけ、穿とうとしようと、一太刀たりともカブトへは届かない。

「クソツ、どういうことだ!」

「おまえよりもキレのある本物が目に焼き付いている。ただそれだけのことだ」

「そんなはずはない! 蘇った私こそが、真の存在! おまえのような相手に遅れを取るはずがないのだ、カブトオオオオオオツツ!!」

叫び声を上げながら大振りの一撃を放ち、大きく後退する紫の戦士。

「底が見えたな。クロックアップ」

『Clock Up』

カブトがベルトの両脇にあるスイッチに触れ、超高速の世界へと踏み入る。

「舐めるな! クロックアップ!」

続いて紫の戦士がカブトと同じように行動に移す。

瞬間、彼らの見える世界は一変し、自分たち以外の時間がほとんど止まって映る。

降り注いでいた雨は空中に漂う水滴となり、ひとつひとつがゆっくりと、ゆっくりと

落下を続けている様子がよくわかる。その中を移動するカブトたちの場所だけ水滴が弾け飛び、彼らの移動の軌跡を描いていく。

「おまえにそれを持つ資格はない。まして、変身することは許さん」

力のこもった声音と共に、とうとうカブトが攻撃に移る。

手刀により紫の戦士の持つサソードヤイバーを落とし、敵の胴体へと鋭い拳を放つ。

「ぐっ……おおっ！」

刀を失ってもカブトへと殴りかかるものの、既に動きは見切ったと紫の戦士の拳を、蹴りのことごとくを捌き、カウンターを決めていくカブト。

「終わりだ」

そう宣言したカブトの元に、時空を超えてもうひとつのゼクターが姿を現す。

カブトムシ型昆虫コア。ハイパーゼクター。

自らの意思で飛んできたハイパーゼクターはカブトの手に収まると、素早くライダーベルトの左側に装着される。

「ハイパーキャストオフ」

カブトムシの角に相当するゼクターホーンを押し倒し、

『Change Hyper Beetle』

電子音声と共に、カブトはさらに第3形態——ハイパーフォームへと最後の変身を遂

げる。

体のところどころに、これまでになかったパーツが新たに発生しているのが見受けられた。

「……潮時か」

ハイパーゼクターが現れてから、幾分か冷静になった紫の戦士は、どういうわけかこれまででの好戦的な姿勢からいまにも逃げ出しそうな様子に変わる。

「逃がしはしない。ハイパークロックアップ」

『Hyper Clock Up』

だが、やすやすと逃すことは許されない。

クロックアップにより通常の時間の流れよりも早い時間の中で動いてきたカブトたちだが、カブトのみ、クロックアップの数十倍の速度での活動を可能にする。

余裕など必要ない。

動きが完全に止まったかのように見える紫の戦士がこの時の速さの世界に入門してくることはなく。

相手から向かってくるのを待つことはしない。

確実に、倒す。

カブトは走り出し、高くへと跳躍。

ハイパーゼクターのゼクターホーンを押し倒し、力を右足に集中させる。

「おまえの遊びは終わりだ。ライダーキック」

一切の躊躇も慈悲もなく放たれた必殺の一撃が紫の戦士へと撃ち込まれる。

『Hyper Clock Over』

紫の戦士が吹き飛ばされると同時に、加速していた時間の流れも元の流れへと戻っていく。

「え!? あ、ああ!!」

「なにい!? どうなってるってんだ!」

「私聞いてない!」

その光景を見て、なにが起きたのかさっぱりわからない永夢たち3人が騒ぎ出す。

当然のことではあるが、彼らはカブトたちがクロックアップしてからの世界を認識できてはいない。

つまるところ、一瞬後にはなぜか戦いが終わっている状況にいたことになる。これでは戸惑うと言う方が無理であろう。

「さあ、姿を見せてもらおうぞ」

騒ぐ外野などなのその。

自身の都合を優先させたカブトは、倒しただろう紫の戦士が飛んで行った方向へと顔

を向ける。

そこには、変身するために必要なゼクターが己の判断で離れていく姿がみえた。

見限られたこともあるだろうが、一番の要因はカブトによるダメージによるもののはず。

「元々あれは剣を認めていた。どうやら、おまえは見放されたようだな」

変身の解けた相手は、最初こそメガネをかけたスーツをまとった人間の姿をしていたが、瞬時に左腕に巨大な鉤爪、右腕に円形の爪を備え、両肩に触手を生やした、イナゴのような怪人へと姿を変えた。

「その姿は……」

「おのれ、一度ならず二度までも！ クソツ、まだクリアされるわけにはいかない……カブトオツ！ 貴様は必ず、必ずこの手で消す」

消耗が激しいのか、息も絶え絶えな中カブトに怨嗟にも似た叫びを残し、気づけば怪人は姿を消していた。

「逃げたか。まあいい。当初の目的である剣かどうかの確認は終えた。二兎を追うものは一兎も得ずだ。奴の搜索は次にするとしよう」

戦いが終わったことを確認し変身を解除するとゼクターは揃って帰っていく。

「俺も帰るとするか。奴の存在を加賀美にも伝えないといけないからな」

なにより、託された世界だ。

頼まれたのだ。

「よく持っていた。それを渡してもらおうか」

それはそうと、豆腐はなにがなんでも持って帰らなければならない天道は永夢より豆腐の入ったボールと和傘を受け取る。

唾然とする3人を置いて帰ろうと踵を返したところで、永夢に肩を掴まれた。

「ま、待つてくださいい！」

「おい、急な振動を与えるな。豆腐に傷がつく。この豆腐は職人の手により丹精を込めて作られた逸品だ。まさに俺の求めていたもの」

「豆腐の話はいいですから、少し僕の話聞いてください」

「断る。俺には俺の道がある」

言い合いを始めた永夢と天道。

2人の様子を面倒そうに眺めていた翔太郎と亜樹子だったが、話が一向に進まないことを危惧し、2人へと介入していった。

ある屋敷の一室にて、スーツをまとう男性と、その男性を兄さんと呼ぶ少年の2人が

あるゲームについて話し合っていた。

「そうか。やはりおまえの学校でも被害者が……」

「うん。やっぱり、このゲームにはなにか秘密がある。いま力を持つのは僕たちだけなんだ。だから兄さん——」

「わかつている。俺も対処しなければならぬとは考えていた一件だ。呉島の人間として、あの男から託された未来のためにも、行動を開始する。手伝ってくれるか？」

「もちろんだよ、兄さん。この世界は紘汰さんが守ってくれたんだ。だからその未来は、僕が守る」

それからしばらくしたある日の昼下り。

偶然にも、永夢が2人で1人な探偵と、天を司る男と出会った日。

この2人も行動を開始していた。

調査開始のbrothers

人が行動を起こすには理由が必要だ。

たったひとつの行動に命を懸けるには、使命が必要だ。

そして、絶望を希望に変えるには、魔法が必要だ。

耳に入ってきたとある情報。

というのも、久々に帰ってきた街で仲間たちから聞かされたゲームについてなのだが、どうにも仲間たちの力だけで真相を解明するのは難しいらしい。

また、どういうわけかゲームで人が死ぬときた。いよいよもって怪しさと、そして危険さが垣間見える。

「凜子ちゃんたちだけに任せておくわけにもいかないか」

国安0課の力を持ってしてもすべての情報を揃えるには至らなかつた今回の一件。

畑違いなのか、それとも一件に関わっている者達が相当の手練れ集団なのかは定かではないが、かなりの権限を有している彼らの手が及ばないということ自体が異例だ。

一人の男は、プレインシュガードーナツを頬張りながら少し前の出来事を思い出す。引っかかるのは、ゲームという単語。

あのときと同じか、それ以上のことが起きようとしている。

「もう一度集結する必要があるだろう……わかつていることがあるとすれば、原因らしきものと、それに立ち向かう存在程度」

男は呟いたものの、多くの当てがあるわけではなかった。

前回の事件の際に協力したエグゼイドはおそらく動き出している。そちらは黙っていても解決に乗り出すだろうから頑張っていてもらえばいい。

こちらはこちらでやれることをやればいいのだから。と思考を切り替えていく。

共に戦った男は地球を離れ、遠い地で戦い続けていると聞く。彼を呼び出すことなどそう簡単にできるはずもなく、次元を渡り歩く男を都合よく捕まえられる可能性は低い。

プレインシユガードーナツをもう一口齧りながら、更に考える。

日本各地でゲームを展開しているのだ。彼一人が行動しただけでは食い破れないのは目に見えている。だからこそ、希望を集める必要があると繋げたまでは良かったのだが。

「——いや、あったー！」

なんだかんだと交流のある仮面ライダー鎧武からは、困ったときに頼れる仲間がいるとこの前聞かされていた。

同時に、「なにかあったら話くらいなら聞いてくれると思うぜ」とも。

「あいつが言うなら間違いない」

男は笑みを浮かべると、寄りかかっていたバイクへ颯爽と乗り込む。

「さあ、世界の希望を探しに行こうか」

目指すは沢芽市。

指輪の魔法使いはある兄弟に封書を投函するため、共に戦った男が暮らしていた地へと駆け出した。

誰もが、自分にできること以上のことはできないことなどわかっている。けれど、自分の意志によって動き出した点が集まればきつと。

いまはまず、状況を整える。

誰に悟られることもなく、彼は最善と思う行動を続ける。

魔法使いが表舞台に出るにはまだ早い。

沢芽市を出て行く男性と少年の二人組み。

そんな彼らはいま、聖都大学付属病院という病院の近くまで足を運んでいた。

いまはビルの中で軽い昼食を取っているが、それが終われば病院に行く予定になって

いる。出かけるには生憎の雨だったが、それでも二人はここまで来ていた。

まるで、天気には作用されている余裕はないと言いたければかりに。

「それにしても、兄さんがあんな怪しい手紙を信じるなんて思わなかったよ」

「俺もだ。いままでの俺なら、あんなものは破って捨てていただろうな」

兄——呉島貴虎の言葉に苦笑しながら、それはどうだろうか？ と疑問を浮かべる少

年——・呉島光実。兄のことをよく見てきた光実としては、どうも思い当たる節があるようだ。

もちろん、それを口にするような真似はしないのだが。

「夢を見た」

「夢？」

貴虎の話が始まったので、思い出していた過去のことを頭から追いやり、彼の言葉等待つ光実。

「夢の中で久々に葛葉紘汰に出会ってな」

「紘汰さんに!?!」

「ああ。あいつと夢で会おうとどうにも胸騒ぎがするんだ。あの戦いの後も、あいつの声で戻ってこれたと言っても過言ではなかったからな。だからこそ、今回も俺の夢に出てきたのは理由があると思っただんだ」

どこか遠くを見る目で、窓の外に映る雨空を眺める貴虎。

(前にも、ふと空を見上げたときにはあいつが落ちてきたな) もちろん、今日もそうであるわけがなく。

これといって・大きな事件が起こることはなく、自分たちやこの世界を脅かしたものが根強くこちらを害することもない。

メガヘクスの侵略以来、彼らは確かな平穩を保っていた。

「だからこそ、この手紙は見過ぐせない」

貴虎が懐から取り出した一枚の便箋。

宛先は書かれておらず、されど投函されていたものだ。送り主不明の大層怪しい手紙だが、だからこそ貴虎と光実の意識を掴んで離さないのもまた事実。

「ゲームによって消える人々と、既にいはいはすの仮面ライダーや怪人の出現……もしこれが本当なら、なにがあっても止めないといけない。現に、僕の学校でも噂は流れている」

光実が握る、ひとつのゲームガシャット。

『仮面ライダークロニクル』か。この手紙と共に届けられたゲーム。手紙には絶対に使用するなど書かれていたが、やはりそれが元凶なのだろうな」

「だと思おうよ。でも、ゲームひとつで人の命を奪えるものなのかな？」

「……………俺たちちのしてきたことと、そう変わらないのかもしれない。ゲームが人の命を奪うのではなく、ゲームの開発者やプレイヤー。そうしたなにかを形作る人間の意識の一部。つまり、悪意を持った者達の介入で傷つくこともあるということだ。かつてのロックシードを用いたときのようにな」

以前、沢芽市では特殊な錠前であるロックシードを用いた対戦競技が流行っていた。その競技はインベスゲームと呼ばれ、怪人同士を戦わせるものであったのだが、中には人間の制御を外れたインベスが暴走したケースがいくつもある。

「人間の悪意は簡単に他者を傷つける」

「うん、よくわかってるよ、兄さん……………だから僕は、戦わないといけないんだ」

「——そうか」

互いに思うところはあある。

一度は本気で倒そうと、殺そうとした兄弟仲でもあった。それでも、間違い、争って、抗い、傷つきながら出した答えがいまなのだ。

仮に過去にながあつたとしても、彼らが二度目の争いを始めることはありえない。それでは彼に、仲間である彼らになにも言えないから。やつとできた繋がりを裏切るようなことはもうできない。

だからこそ、目を背けたくなるような過去が話題に上がろうともそれでも前を向いて

いられる。

「話を戻そう。俺たちがやらなければならぬのは事態の確認。『仮面ライダークロニクル』によって引き起こされている人間の消滅と、それを食い止めようとしている者達への接触、もしくは協力態勢を築くことだ。異論は？」

「ないよ。行こう、兄さん」

「よし。まずは手紙の内容にあった通り、聖都大学付属病院までだ」

食事を終え、店を後にする兄弟。

雨の中を歩き進んでいると、どこかかともなく奇妙な音が響く。

二人は目を合わせると、すぐさま歩む速度を上げ、しまいには駆け出したのだ。

「こつちだー！」

「うんー！」

貴虎先導のもとたどり着いたのは、遊具の少ない、広場寄りの公園だった。

そこにはところどころ戦闘が行われたのだろうと思わしき余波でできた跡が残っており、中心には白衣を着た青年と、ボールを抱えながら和傘をさすいかにも変な男が会話をしており、なにやら揉めている彼らを止めようとしている一組の男女の姿があった。

「なにがあつたんだ？」

「わからない……でも、あの人たちが関係ありそうなのは確かだよ」
「そのようだな」

特に、白衣の男性だ。

『仮面ライダークロニクル』とよく似たゲームガシャットを手に持つ彼は、どう考えても関係者だろう。

問題なのは、彼がどちら側かということなのだが。

「ひとまず、話を聞ける場を作る他あるまい」

静止をかける前に騒動の輪へと向かう貴虎。

その後ろに続く光実は、面倒なことになったと思いつつも、やはり言い合いを収めるために口を開くのだった。

「失礼。白衣の彼に話を聞きたいのだが」

比較的温厚そうに見えた白いスーツを着込んだ男性に話かける。

「あん？ つと、あんたは？」

「呉島貴虎だ。諸事情で彼とゆつくり話をしたい。連れて行ってもいいだろうか？」

「ちよつと待ってくれ。俺たちもあいつに用があるんだ」

「なに？」

話かけたスーツの男性も自分と同じように青年に接触したいことを知ると、途端に怪

訝な表情を見せる。

「あの、貴方は？」

そんな貴虎より先に光実が男性に話しかけると、被っていたソフト帽を一度深く被り直すと、帽子に片手を当てたまま、もう片方の腕を顔の位置まで掲げた。

「俺は左翔太郎。探偵さ」

短い名乗りをあげるためだけにかっこうをつけた翔太郎は、内心で決まっただと思いつつ、自分に話かけてきた少年に目を向ける。

向けられるのは憧れの視線か、はたまたかっこいいと思われてしまったか。そんな淡い期待が浮かぶ。

「それでは翔太郎さん」

しかし、光実は普段とまるで様子を変えることなく、翔太郎へと話かけた。

「プツ……あ、ごめんね翔太郎くん！」

「亜樹子てめえ！」

「だからごめんってば！」

翔太郎の傍らにいた亜樹子が笑い声を漏らすと、言い合いをしている二人の周りを走り鬼ごっこに発展してしまった。

もちろん、言い合いを続ける二人がそれを歯牙にかけるはずもなく。

無意味な時間が流れていく中、貴虎は天を仰いだ。

一拍。

「なんなんだこいつらは！」

全員が動きを止めるには十分なほどの叫びが、その場にこだました。

箱庭の世界

New game 起動？

世間を騒がせたとあるゲームがクリアされてからひと月。

未曾有のパンデミックも収まりを見せ、いまでは死闘を繰り広げたドクターたちの生活も、平和な日常そのものへと戻っていた。

「なあ、永夢。おまえ宛に手紙が届いてたぜ」

「本当に？ いや、でもCRに個人宛の手紙が届くのっておかしいような……」

いま、電腦救命センター——通称CR——でパンデミックの再発防止策や、パンデミックの被害にあつた人々の術後経過を確認して回っていた宝生永夢は、自分の元へとやってきた青年が手に持つ手紙を受け取るが、その顔はどうにも怪しんでいるように見える。

しかし、封書には自分の名前がしっかりと刻まれていた。

「特に嫌な感じはしなかったぞ？」

「手紙から嫌な感じを感じ取れたなら苦労はしないって。中に入っているのはただの手紙だとは思うけど、黎斗さんからだったら絶対に面倒事だしなあ……」

永夢が思い浮かべるのは、自分と共にとあるゲームをクリアし、パンデミックに対しての抗体を作り上げた男なのだが、いかんせん日頃の言動に振り回された経験しかないため、彼からの厄介事の押し付けではないかと疑っているのだ。

そもそも、手紙を持ってきた相手が相手なだけに、余計に黎斗との関連を思い描いてしまう。

「パラド、念のために聞きたいんだけど、これは誰から？」

自分に手紙を持ってきた青年——パラドに問いかけると、彼はため息をひとつ吐きつつも口を開く。

「つまらないこと聞くなよ、永夢。それに、俺は誰からの手紙かなんて知らないぜ？ なにせ、ゲームをしていて気がついたら机の上に置かれていたからな」

だが、パラドは衝撃的な事実を話始めた。

「ゲームに集中し過ぎていたとかじゃなくて？」

「さすがの俺でも人が近づけばわかる。第一、CRは全員出払ってて俺しか残っていなかったじゃないか」

「それはそうだけど……」

数時間前、CRに集まった永夢の仲間たちは全員、衛生省からの指示もあつてか外に出ている。一応誰かいないとということでパラドが残ってくれていたのだが、それでは

手紙が届いていることと辻褃が合わない。

「ポッピーが手紙を置いてすぐに出かけたとかは？」

「それこそ、俺が気づかないわけないだろ。ポッピーが来ていたのなら、同じ存在である俺が把握していないはずがない」

「となると、同時に黎斗さんもないか。他の人たちなら、手紙なんて書かずに連絡してくるだろうし」

パラドから受け取った手紙。

手に持つ限り、中身は薄い。便箋が一枚、畳まれて入ってあればいい方だ。

しかし、困ったことに永夢の仲間の中にわざわざ手紙を書いて自分に出すような人はいないのだ。というよりも、お互いに回りくどいことをするよりも口で言った方が理解し合えるため、そうしたことを今更するような間柄ではない。

「ますますわからないな……」

「だったら開けてみればいいじゃないか。どうせ永夢宛の手紙なんだ。おまえが中身を確認するぶんには、なにも問題ないだろ？」

確かにそれは間違っていない。

この手紙は、まさに自分に届けられたもの。

「そうだね、開けようか。どうか、黎斗さんの新しい連絡手段や面倒事じゃありませんよ

うに」

過去、あらゆる手段を使ってきた彼の嫌がらせや手助けを思い出しながら、手紙の封を解く。

興味が湧いたのか、最初から持っていたのかは定かではないが、パラドも横から覗き込むようにして内容を確認しようとしていた。

「永夢、早く早く」

「僕宛なんだけど……まあいいか。じゃあ開けるよ」

自分のところに手紙を届けにきたパラドのことだ。ここで見せないよう努力しても、その後に内容を話すまで聞いてくるだろう。というところまで考えた永夢は、諦めて中身を取り出す。

「今後の僕らの予定ってわけでもないな。なんだろう、この文」

「もったいぶるなよ。なにになに？」

二人して内容に目を向けると、そこに書かれていた言葉に、永夢は首を傾げ、パラドは薄く笑みを浮かべた。

『悩み多し異才を持つ少年少女少女に向ける。』

その才能を試すことを望むのならば、

己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、

我らの“箱庭”に来られたし』

だが、読み終えた瞬間、永夢の体が光・の中へと消えていく。

「永夢!？」

パラドが瞬時に手を伸ばし、永夢の手へと触れる。

直後、パラドの姿が粒子のように掻き消え、そして、永夢も光の中へと姿を消した。

自分の身に起きた出来事が理解できないまま、永夢は更なる窮地に立たされていた。

「な、なにこれ!？」

いきなり光の中に吸い込まれたかと思えば、空中に投げ出される形になるとは誰が予想したのだろうか？ それも、目測でだが上空数千メートルと来た。

「これはいくらなんでも——他にも人が!」

自分が落下中なのはわかったが、辺りを見渡すと、他にも三人、自分よりも若い少年少女が落ちていくのが見える。

これまでも戦いの中でステージを変えてきたことはあるが、原理が同じとは思えない。ここがゲームエリアなはずがないのだから。

「前みたいにゲームの世界に呼ばれたのか？ ああ、もう！ とりあえずは……」

眼下に広がる世界は、広大だ。

木々が生い茂る森や滝。崖のような場所もある。けれど、このまま落下を続けたときの自分たちの落下地点は幸いにして湖だった。

この高さからの落下となると、衝撃はすさまじいものになるだろう。ならば幸いとは言い難いのだが。

それでも、信じているものもある。ひとつのゲームを通してわかりあった、通じ合った心があることを。

(僕たちを守るための膜が張られているなんて言われたら、信じるしかないじゃないか) 　　そして、もうひとつ。

「開始早々にゲームオーバーになるような世界があつてたまるか!」

忘れていたが、宝生永夢は生粋のゲーマーなのだ。

一部思考も、ゲームが基準になる程度には。

もしものことを想定し、あるものを握りしめていたが、ついぞ持っていた物を使うこととはなく。

一緒に空中落下を果たした四人は、一切の衝撃を受けずにもれなく湖へと落ちていった。

「なんなんだこの仕打ちは。死ぬかと思ったぞ」

結論から言えば、無事だった。

永夢は陸地よりも遠い地点に落とされたため、陸地に上がる頃には、空中で見かけた三人はすでに服をかわかしたりと行動を開始しており、それぞれが罵詈雑言を吐き捨てていた。

「し、信じられないわ！ まさか問答無用で引き摺り込んだ挙句、空に放り出すなんて！」

「右に同じだクソツタレ。場合によっちゃその場でゲームオーバーだぜコレ。石の中に呼び出された方がまだ親切だ」

「……………いえ、石の中に呼び出されては動けないでしょう?」

「俺は問題ない。他の奴らが同じとも思っていないけど、俺は平気だ」

「ふうん……………貴方、かなり身勝手な人なわけね」

なにやら黒髪ロングの少女とヘッドホンの少年が言い合いを始めたので、陸地に上がったばかりの永夢は仲裁に入ろうと間に立つ。

「まあまあ。いまは僕たちがどうしてこんな状況に陥っているのかを先に話し合うべきで——」

「必要ない。あんたは引つ込んでな」

「あら、これは私たちの話よ。関係ない人は出てこないでくれるかしら」

割り込んだものの、すぐさま二人に押し返され、思ってもみない行動に踏ん張りが増えず、数歩後ずさったのち、間抜けな声を上げながら、またも湖へと足を滑らせてしまった。

「なっ、あ——ッ!？」

「運のない……」

もう一人。

猫を抱いている少女の眩きを最後に、永夢は再び水の中へと沈んでいった。

「さて、俺たちがいがみ合う意味もないし、建設的な話をするか」

「そうね」

そんな彼の姿を見ていた少年たちはここまでの遣り取りがなかったかのように向き合い、自然と話し合いを始めた。

「まず間違いないだろうけど、一応確認しておくぞ。もしかしてお前達にも変な手紙が？」

「そうだけど、まずは“オマエ”って呼び方を訂正して。——私は久遠飛鳥よ。以後は気を付けて。それで、その猫を抱きかかえている貴方は？」

「……………春日部耀。以下同文」

「そう。よろしく春日部さん。それで、野蛮で凶暴そうなのこの貴方は？」

「高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蛮で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快楽主義と三拍子そろった駄目人間なので、用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれお嬢様」

「そう。取扱説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君」

「ハハ、マジかよ。今度作つとくから覚悟しとけ、お嬢様」

三人が自己紹介を終え、後ろを振り返る。

そこには二度湖に投げ出された永夢が疲れた顔をして立っていた。

「最後に、白衣を着た貴方は？」

「おいおい、お嬢様。白衣を着ているんだから答えなんて決まってるだろ？ こいつは

科学者だよ」

「科学者にしてはちよつと……………抜けてると思う」

散々な扱いであるが、このくらいなら。そう、このくらいならまだマシかもしれないと思ひ留まる永夢。

「僕は宝生永夢。聖都大学附属病院に勤務している研修医だよ。よろしくね」

「なんだ、やっぱり医者か。よろしく頼むぜ、お医者さん」

集まった面々を見て心からケラケラ笑う逆廻十六夜。

傲慢そうに背を向ける久遠飛鳥。

我関せず無関心を装う春日部耀。

医者として三人の検診をしようかと動き出す宝生永夢。

そんな彼らを物陰から見ている黒ウサギと呼ばれるウサ耳の少女は、四人を紹介した人物であり、迎えに来た人物でもある。あるのだが……。

(うわあ……なんか問題児ばかりみたいですねえ……唯一の希望はあの白衣の方でしようか)

召喚しておいてアレだが、彼らが協力する姿は客観的には想像できそうにない。無理に協力させれば被害を被るだろう。

黒ウサギは陰鬱そうに重くため息を吐くのだった。

「で、呼び出されたはいいいけどなんで誰もいねえんだよ。この状況だと、招待状に書かれていた箱庭とかいうものの説明をする人間が現れるもんじゃねえのか？」

「そうね。なんの説明もないままでは動きようがないもの」

「……………この状況に対して落ち着き過ぎているのもどうかと思うけど」
「それより、みんな痛いところや気になる箇所はないよね？ 平気？」

（全くです。というか白衣の方はみなさんの心配が先なのですか……）

黒ウサギはこつそりツツコミを入れた。

もつとパニツクになってくれれば飛び出しやすいのだが、場が落ち着き過ぎているの
で出るタイミングを計れないのだ。

「——仕方がねえな。こうなったら、そこに隠れている奴にでも話を聞くか？」

「なんだ、貴方も気づいていたの？」

「当然。かくれんぼじゃ負けなしだぜ？ そっちの猫抱いてる奴も、お医者さんも気づ
いてるんだろ？」

「風上に立たれたら嫌でもわかる」

「うん、まあ。僕の場合は気づいたのが僕とは言い難いけど」

「……………へえ？ 面白いなお前達。特にお医者さんはな」

軽薄そうに笑う十六夜の目は笑っていない。永夢以外の三人は理不尽な招集を受け
た腹いせに殺気の籠もった冷ややかな視線を黒ウサギに向ける。黒ウサギはやや怯ん
だ。

「や、やだなあ御三人様。そんな狼みたいに怖い顔で見られると黒ウサギは死んじやいますよ? ええ、ええ、古来より孤独と狼はウサギの天敵でございます。そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じてここは一つ、白衣の方のように穏便に御話を聞いていただけたら嬉しいでございますヨ?」

「断る」

「却下」

「お断りします」

「知っていることを全部話してくれるのなら、僕は構いませんよ」

「え、本当にございますか!? でしたらさっそく——」

「でも、僕は医者としてメンタルケアも必要と考えているので、十六夜くんたちの気が済んだらでお願いします」

「……あつは、取りつくシマもないでございますよ!?!」

バンザーイ、と降参のポーズをとる黒ウサギ。

しかしその眼は冷静に四人を値踏みしていた。

黒ウサギはおどけつつも、四人にどう接するべきか冷静に考えを張り巡らせている——と、春日部耀が不思議そうに黒ウサギの隣に立ち、黒いウサ耳を根っこから鷲掴み、

「えい」

「フギヤー！」

力いっぱい引つ張った。

「ちよ、ちよっとお待ちを！ 触るまでなら黙って受け入れますが、まさか初対面で遠慮

無用に黒ウサギの素敵耳を引き抜きに掛かるとは、どういう見ですか!？」

「好奇心の為せる技」

「自由にも程があります！」

「へえ？ このウサ耳って本物なのか？」

今度は十六夜が右から掴んで引つ張る。

「……………じゃあ私も」

「ちよ、ちよっと待——！」

今度は飛鳥が左から。

永夢はそんな四人の光景を楽しそうに眺めていた。

(この世界、やっぱり何か変だ。あのウサ耳……………いいや、僕の知っているゲームに一致するキャラはいない。ということとは新しいバグスター？ 決めつけるのは早いな。まずは話を聞いてみないことにはどうしようもないか)

今後の身の振り方を決めかねる中、自分の中にいるもう一人と話し合いを続けなが

ら、三人の気が済むのを待つことにした永夢だった。
新たなゲームは、いまだ始まってすらいない。

箱庭の世界の tutorial

正体不明のウサギ耳の少女が現れてから小一時間。

それまでの時間を自分たちが落ちてきた周辺の探索に当てていた永夢は、戻ってくる
と知り合った三人から解放されたウサ耳の少女と、満足そうにしている三人と合流し
た。

「よお、お医者さんはどちらまで？」

遊ぶものがなくなり、黒ウサギの復活を待つ十六夜が話しかけてくる。

「ちよつとそのあたりをね。特に収穫はなかったけど」

「そうか。どうする？ お医者さんもこいつの耳弄つとくか？ それなりにいい毛並み
だぜ」

「いや、遠慮しておくよ。それよりも、僕はそろそろ彼女の話を知りたいかな。調べない
といけないこともあるからね」

「へえ……」

答えを聞いたとき、十六夜の目が細められたことに永夢は気づいた。あまり余計なこ
とを言うべきではないのかもしれないと、それ以降は無難な会話を続けながら、黒ウサ

ギの復活を待つことにした。

待つこと更に数十分。

やつとのことで起き上がった黒ウサギは、しかし。

「——あ、あり得ない。あり得ないですよ。まさか話しを聞いてもらうために一時間以上も消費してしまうとは。学級崩壊とはきつとこのような状況を言うに違いないです」

「いからさっさと進めろ。四割くらいはてめえが倒れてた時間だろうが」

「理不尽!」

半ば本気の涙を瞳に浮かばせながらも、黒ウサギは話を聞いてもらえる状況を作ることに成功した。三人は黒ウサギの前に座り込み、彼女の話『聞くだけ聞こう』という程度には耳を傾けている。

永夢はこうした突然の事態にはそれなりの耐性もあるので、まずは情報収集だと、この場の誰よりも真剣な表情をしていた。

「それではいいですか、御四人様。定例文で言いますよ？ 言いますよ？ さあ、言います！ ようこそ”箱庭の世界”へ！ 我々は御四人様にギフトを与えられた者達だけが参加できる『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼントさせていただこうかと召喚い

たしました!」

「ギフトゲーム?」

「そうです! 既に気づいていらつしやるでしょうが、御四人様は皆、普通の人間ではございません! その特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でございます。『ギフトゲーム』はその”恩恵”を用いて競いあう為のゲーム。そしてこの箱庭の世界は強大な力を持つギフト保持者がオモシロオカシク生活できる為に造られたステージなのでございますよ!」

両手を広げて箱庭をアピールする黒ウサギ。飛鳥は質問するために挙手した。

「まず初歩的な質問からしていい? 貴方の言う”我々”とは貴方を含めた誰かなの?」

「YES! 異世界から呼び出されたギフト保持者は箱庭で生活するにあたって、数多とある”コミュニティ”に必ず属していただきますよ!」

「嫌だね」

「ごめんね、いまはちよつと遊んでいられないんだ。僕はやらないといけないこともあるし。ゲームならまた今度参加させてもらうってことでいいかな?」

十六夜と永夢が即座に否定する。永夢に至っては参加すら拒否している。

だが、それは当然のことで、彼はCRのドクターであり、いまま本来ならば仕事の最

中であつたはずなのだ。こんなところで遊んでいたと知られば自分を医者として鍛えてくれた人たちに怒られるのは明白。なにより、自分の医者としての自覚が許さない。

「属していただきます！　そして参加してください!!」

そんな想いは知らず、黒ウサギは話を続け、

「ちよつと、僕の話も——」

「き・き・ま・せ・ん!!」

それでも食いつく永夢に、黒ウサギは一音一音言い聞かせるようにして黙らせ、今度こそ話を続け出した。

「そして『ギフトゲーム』の勝者はゲームの”主催者”が提示した賞品をゲットできるといふとつてもシンプルな構造となっております」

「……………」　主催者”って誰?」

「様々ですね。暇を持て余した修羅神仏が人を試すための——」

これから数分黒ウサギと女子二人の会話が続いた。

「——さて。皆さんの召喚を依頼した黒ウサギには、箱庭の世界における全ての質問に答える義務がございます。が、それら全てを語るには少々お時間がかかるでしょう。新たな同士候補である皆さんを何時までも野外に出しておくのは忍びない。ここから先

は我らのコミュニティでお話させていただきたいのですが……よろしいですか？」
「待てよ。まだ俺が質問してないだろ」

清聴していた十六夜が威圧的な声を上げて立つ。

「……………どういった質問です？ ルールですか？ ゲームそのものですか？」

「そんなものはどうでもいい。腹の底からどうでもいいぜ、黒ウサギ。ここでオマエに向かつてルールを問いただしたところで何かが変わるわけじゃねえんだ、世界のルールを変えようとするのは革命家の仕事であって、プレイヤーの仕事じゃねえ。俺が聞きたいのは……………たった一つ、手紙に書いてあったことだけだ」

十六夜は視線を黒ウサギから外し、他の三人を見まわし、巨大な天幕によって覆われた都市に向ける。

彼は何もかもを見下すような視線で一言、

「この世界は……………面白いか？」

「――」

他の二人も無言で返事を待つ。永夢はしかたなく聞かしくないと腕を組み答えを待つ。

彼らと呼んだ手紙にはこう書かれていた。

『家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨てて箱庭に來い』と。

それに見合うだけの催し物があるのかどうかこそ、十六夜たち三人にとって一番重要な事だった。

「――YES。『ギフトゲーム』は人を超えた者たちだけが参加できる神魔の遊戯。箱庭の世界は外界より格段に面白いと、黒ウサギは保証いたします♪」

ひとまず移動するということで話はまとまり、その間も永夢は考え続けていた。

(ここは僕らの暮らす世界じゃない……ゲームという言葉通り、なにかしらクリア条件を満たさない限り帰れないってことかな)

一人で考えても仕方ないと、自分の中にいる彼へと話を振る。

(どう思う、パラド?)

彼――パラドは永夢が異世界に飛ばされる間際に彼の体に宿り、この世界に共にやってきていた。これにはある過去や二人のやりとりが関係しているのだが、いまはいいだろう。

(あのウサ耳、違うな。俺やポップピーとは存在の仕方がまるで異なっている。少なくとも、俺たちを閉じ込めている元凶じゃないな。だが妙だ。ゲームの世界という気配がない……俺たちの暮らす現実世界とやら変わらないぞ?)

(そんな！ でも、ここはどう考えても……)

(あいつも言ってたな。ここは“箱庭の世界”と。もう少し散策や話が聞ければ謎が解けるかもしれないが……久々に心が躍るな、永夢！)

(他にもいくつか、ヒントになりそうな言葉があったね)

なんとも楽しそうなパラド。

最近にしては珍しく、新しい玩具を与えられたこどものようなはしゃぎようだ。

(つまり、すぐには帰れないってこと?)

(多分な。だいたい、わざわざ連れ込むような奴が頼んで返してくれるとも思えない。最悪、すぐにラスボス戦になるかもな。おまえの仲間なら話せばわかってくれるさ。こ

こはひとつ、慎重に行こうぜ)

(僕の仲間なら、おまえの仲間でもあるんだからな。しょうがない、このゲームもクリアして、現実世界に帰ろう)

(ああ！ 俺たちが組めば誰にも負けない！)

冷静に話し合いを繰り返し、いまずぐの帰還を諦め、今後の動きを決めていく永夢とパラド。

そんな彼ら——傍目から見れば彼なのだが——にある話を持ちかける少年が一人。

「ジン坊っちゃーン！ 新しい方を連れてきましたよー！」

外門前の街道から黒ウサギたちが歩いてくる。

「お帰り、黒ウサギ。そちらの二人が？」

「はいな、ことらの御四人様が——」

クルリ、と振り返る黒ウサギ。

カチン、と固まる黒ウサギ。

「……………え、あれ？ もう二人いませんでしたっけ？ ちょっと目つきが悪くて、かなり口が悪くて、全身から俺問題児！ ってオーラを放っている殿方と、白衣を着た明るく優しそうな殿方が」

「ああ、十六夜君と永夢さんのこと？ 彼らなら”ちょっと世界の果てを見てくるぜ！”と言って駆け出して行っただわ。あっちの方に」

街道の真ん中で呆然となった黒ウサギは、ウサ耳を逆立てて三人に問いただす。

「な、なんで止めてくれなかつたんですか！」

”止めてくれるなよ”と言われたもの

「ならどうして教えてくれなかつたのですか!?!」

”黒ウサギには言うなよ”と言われたから

「嘘です、絶対嘘です！ 実が面倒くさかっただけでしょう御二人さん！」

「うん」

ガクリ、と前のめりに倒れる。まさか召喚した人材がこんな問題児ばかりだなんて嫌がらせにも程がある。

「なら、どうして永夢さんまで行ってしまったのですか！」

この質問に対し、耀と飛鳥は目を合わせた。

「最初についてはいく気なさそうにしてただけど、いきなり黙り込んだと思ったら次の瞬間には『やっぱり僕も行くよ！』って言って」

「十六夜君が『お医者さんは鈍臭そうだからな。転けられても面倒だし、俺が走っていくから掴まってろ』って一方的に彼の白衣を掴んで走り去って行つたわ」

倒れているのでそれ以上の反応は黒ウサギからあがらなかつた。

見事な関係プレイだった。彼らの行動力といい、彼女らの声真似を含めた遣り取りといい、問題児同士はすでに息が合っているらしい。

改めて言うが、嫌がらせにもほどがある。

十六夜が何を思つて彼を連れて行つたのかは不明だが、どうにも永夢は帰りたがつている節があつた印象から、下手なことをしないかと黒ウサギは不安を募らせている。

(だいたいどうぶでしようか？ 片や問題児。片やどう見ても人の良さそうな好青年……不安しかないのですよ！)

「た、大変です！ ”世界の果て”にはギフトゲームのために野放しにされている幻獣が」

ジンが慌てた様子で口を挟む。

「幻獣？」

「は、はい。ギフトを持った獣を指す言葉で、特に”世界の果て”付近には強力なギフトを持ったものがいます。出くわせば最後、とても人間では太刀打ち出来ません！」

「あら、それは残念。もう彼らはゲームオーバー？」

「ゲーム参加前にゲームオーバー？ ……斬新？ チュートリアル中にバットエンドも斬新かも」

「冗談を言っている場合じゃありません！」

ジンは必死に事の重大さを訴えるが、二人は叱られても肩を竦めるだけである。黒ウサギはため息を吐きつつ立ち上がった。

「はあ………ジン坊ちゃん。申し訳ありませんが、御二人様のご案内をお願いしてもよろしいでしょうか？」

「わかった。黒ウサギはどうする？」

「問題児を捕まえに参ります。事のついでに——」箱庭の貴族」と謳われるこのウサギを馬鹿にしたこと、骨の髄まで後悔させてやります」

悲しみから立ち直った黒ウサギは怒りのオーラを全身から噴出させ、艶のある黒い髪を淡い緋色に染めていく。

外門めがけて空中高く跳び上がった黒ウサギは外門の脇にあつた彫像を次々と駆け上がり、外門の柱に水平に張り付くと、

「一刻程で戻ります！ 皆さんはゆっくりと箱庭ライフを御堪能くださいませ！」

黒ウサギは、淡い緋色の髪を戦慄かせ踏みしめた門柱に亀裂を入れる。全力で跳躍した黒ウサギは弾丸のように飛び去り、あつという間に三人の視界から消え去つていった。

巻き上がる風から髪の毛を庇う様に押さえていた飛鳥が呟く。

「……………」。箱庭のウサギは随分速く跳べるのね。素直に感心するわ」

「ウサギ達は箱庭の創始者の眷属。力もそうですが、様々なギフトの他に特殊な権限も持ち合わせた貴種です。彼女なら余程の幻獣と出くわさない限り大丈夫だと思うのですが……………」

そう、と飛鳥は空返事をする。飛鳥は心配そうにしているジンに向き直り、

「黒ウサギも堪能してくださいと言っていたし、御言葉に甘えて先に箱庭に入るとしま

しょう。エスコートは貴方がしてくださいるのかしら？」

「え、あ、はい。コミュニティのリーダーをしているジン・ラッセルです。齢十一になつたばかりの若輩ですがよろしくお願いします。二人の名前は？」

「久遠飛鳥よ。そこで猫を抱えているのが」

「春日部耀」

ジンが礼儀正しく自己紹介する。飛鳥と耀はそれに倣つて一礼した。

「さ、それじゃあ箱庭に入りましょう。まずはそうね。軽い食事でもしながら話を聞かせてくれると嬉しいわ」

飛鳥はジンの手を取ると、胸を躍らせるような笑顔で箱庭の外門をくぐる。

その後にくよくように、耀がついていった。

I, m a 仮面ライダー!

全員で移動していた最中、考がまとまってきたところで十六夜に話かけられた永夢。

「なあ、お医者さん。これからちよつくら世界の果てまで行こうと思うんだが、一緒に来るか?」

「世界の果て?」

「おう。落ちてくるときに見えた景色をこの目に焼き付けに行くのさ。どうだ?」

「でも、他のみんなのこともあるしな……」

正直なところ、このまま黒ウサギについていけば更に詳しい説明を受けることも可能だろう。本来ならそれが正解だ。できることなら、目の前でワクワク感を隠せていない十六夜も連れていくのが好ましい。

が、これまでの遣り取りからもわかるように彼は話して納得しない限りは止まらないだろう。

(永夢、これはチャンスだ! この世界のことをもつと見て回ってみるのもいいじゃないか)

(それはそうだけど……)

(なんだよ、もう少し散策するって話に落ち着いてたじゃないか。それに、あいつ一人で訳のわからない場所を歩かせる方が危険なんじゃないか?)

パラドの指摘にハツとする永夢。

確かにここは自分たちも知らない世界だ。なにが出てくるのか、なにが敵なのかすら定かではないのに十六夜を一人にするのはあまりにも危険だ。

「あとでみんなとは合流する気はあるんだよね?」

「ん? ああ、もちろん。もつとも、あいつ次第でもあるんだが、それはまあいい。景色だけ見たら帰ってくるさ」

「わかった。なら、やっぱり僕も行くよ」

本来であれば永夢とパラドが一人ずつつくのがいいのだろうが、なんの説明もないままにパラドと分離するところを見せてしまえば怖がらせてしまうだろうという懸念が、永夢を、そしてパラドを縛っている。

(黒ウサギが一緒にいるのなら、彼女たちは安全なはず……敵意はなかったし、だいじょうぶかな)

厳密には値踏するような視線は向けられていたが、好意的なものであった。

「なら行くか。つてわけで俺たちは散歩に行くがおまえらはどうする?」

十六夜が残りの二人——飛鳥と耀に問うと、

「私は黒ウサギについていくわ」

「右に同じ」

彼女たちはこのまま先に進むようだ。

「そうか。なら、黒ウサギにはあとで伝えておいてくれ」

「いいわよ。任せておきなさい」

「なら頼むわ。さて、お医者さんは鈍臭そうだからな。転けられても面倒だし、俺が走つていくから掴まってろ」

言うが早いか永夢の白衣を掴み、走り出す十六夜。

「ちよ、ちよつと待って！ うわっ、危ないって!? というか走るの速くない!」

永夢の叫び声が彼女たちから遠のいていき、やがて二人は視界から消えた。

「掴まってろって言いながら持つて行ったわね……」

「南無」

二人の少女から同情された永夢は、その後なんとか生き残ったとか。

永夢と十六夜が抜け出してからしばらく。

「にしても、この辺りはなんの生物もないんだな」

「鳥なんかはいるみたいだけど？」

「いや、そういつた普通の生きもんじゃなくてさ。こう、神とか魔王みたいな強そうな奴だよ」

「こんな序盤で神や魔王がいたらゲームとしては負けイベントだよ」

十六夜による吹っ飛ばした速度での移動はやめ、二人してのんびりと歩いていたときだった。

「ところで医者さんは帰りたいみたいだったが、なんか向こうの世界でやり忘れたことでもあったのか？」

突然振られた話に、永夢は歩みを止めた。

「十六夜くんは、仮面ライダークロニクルって知ってる？」

「仮面……？ いや、聞いたこともないな」

「え？ ほ、本当に……？ そっか、知らない人もいたのか……でも、それじゃあいったいどこまで浸透していたんだ？」

「おーい、お医者さん？ 戻ってこいって」

一人でぶつぶつと呟き始めた永夢の肩を叩くことで、彼の意識を再びこちらへと戻す。

「ごめんごめん。内容までは言えないけど、僕にはやらなきゃいけないことがある。残

してきた仲間もいる。だから、なんとしてでもこのゲームをクリアして、僕は元の世界に戻るよ」

「そうか。そういう奴もいるんだな」

「十六夜くん、いまなにか言った？」

「いいや、なんでもねえよ。それより、とつとと行こうぜ。たぶん、もう少しのはずだからよ」

永夢には十六夜が小さな声で吐き出した言葉は拾えなかつたようで、特に気にするこ
となく二人は進んで行く。

すると森を抜け、大河の岸边に出た。

「うわあ、広いな。にしても、やっぱり森林ステージときたら河か。変なギミックがない
といいけど」

「お医者さんはなんでさつきからここがゲームのステージみたいな思考してんだよ」

「え？ それは——」

『試練を選べ』

永夢が口を開いた瞬間、大河の流れが割れ、声が響く。

「なんだ!?!」

「試練とか言ってたな、おい。なんだなんだ、俺たちを試そうってことか？」

それぞれの反応を見せると、川面にうつすらと白くて長いなにかが浮かんでくる。その巨体が鎌首をもたげると全貌が明らかになり、巨軀の大蛇が姿を表す。

「蛇だな」

「蛇だねって、落ち着いている場合じゃないでしょ!」

危険を感じた永夢は十六夜を連れて逃げようと彼の手を取るが、十六夜はその手を払い、蛇へと視線を固定する。

『ここに近づくとはおろかな人間だ。どれ、少し見てくれよう。試練を選べ』

「ハッ、試練を選べだ? 随分と上から目線でものを言ってくれるじゃねえか。いいぜいいぜ、いいなおい! だったらおまえが俺を試せるかどうか、試させてもらおうじゃねえか!」

「ちよつと、十六夜くん!」

蛇にそのかさされたのか、元からの気質故か。

十六夜が素直に静止の声を聞き入れるはずもなく、蛇の話聞いた直後には前に駆け出していた。

「バグスター? にしてはなんか違うけど……とりあえず、倒してから考えた方がいいかな」

ここに来るまでに十六夜の超人的な身体機能を目にしてきたが、相手が相手だ。いく

ら楽しそうに走り出したとは言え、相手にしていい生物ではない。

と、白衣のポケットに手をつ込んだときだ。

『ぐっ……ッ!?!』

「おらおら、どうした？ 防戦一方とかつまらねえことしてんじゃねえよつと！」

自分より圧倒的なまでに巨大な相手を殴りつける十六夜が、永夢の視界に入った。

「ええ……?」

困惑のあまり動きをとめてしまうが、仕方のないことだ。永夢の常識では、ただの間があんな化け物に立ち向かうのはおろか、圧倒などできるわけがないのだから。

「つまらねえな。おまえ、もういいぜ」

直後、ため息を吐いた十六夜が蛇の胴を蹴り上げると、うめき声をあげた蛇は、そのまま高くに打ち上がり、そして重力に引かれるようにして河の底へと沈んでいった。

落下の衝撃で森全体に地響きが広がり、更に蛇の落下地点では巨大な水しぶきが上がる。

「どうやら尋常ではない力で打ち上げられたようだ。」

「人がこんなことをできるなんて……」

「ヤハハ、思いの外弱かつたぜ？ 蹴り一発であんなに苦しそうにするとは思わなかつた」

「十六夜くん、キミはいったい——」

何者なんだ、という疑問は、最後まで言葉にすることはなかった。
なぜなら、

「み、見つけたのですよ!」

飛鳥と耀と共に行動しているはずの黒ウサギがこちらに駆け寄ってきたからだ。

「あれ、おまえ黒ウサギか? どうしたんだその髪の色」

「もしかしてそっちはIPキャラかなにか?」

二人の興味は突如現れた黒ウサギへと移り、同時に疑問を投げかける。

だが、それもそのはず。黒ウサギの髪色は出会った頃とは打って変わり、淡い緋色へと変貌していたのだ。

「もう、どこまで来てるんですか! 勝手にも程があります!!」

しかし二人の質問に答えることはなく、彼女は至極まっとうな怒りを二人へと向けた。

散々振り回された黒ウサギの胸中にはもう限界だった。次から次へと怒りが湧き上がり困るくらいには。

そんな怒りも笑って受け流す十六夜は、笑顔を浮かべながら質問に答える。

「世界の果てまで来てるんですよ。っと、そう怒るなよ。お医者さんも一緒なんだし、万

が一怪我してもだいじょうぶだろ」

「二応、まだ研修医なんだけどね」

永夢のやんわりとした指摘も流し、話を続ける十六夜。

「それはそれだ。知識も経験もあることに変わりはねえ。しかしいい脚だな。途中から歩いてきたとはいえ、こんな短時間で俺たちに追いつくとは思わなかった」

「むっ、当然です。黒ウサギは“箱庭の貴族”と謳われる優秀な貴種です。その黒ウサギが——」

アレ? と黒ウサギは耳を傾げる。

(……半刻以上もの時間、追いつけなかった……? それも、途中から歩いていたのに?)

思い返せばおかしな話だ。

彼女の駆ける姿は疾風よりも速く、その力は生半可な修羅神仏では手が出せない程。その彼女が追いつけなかったとなると、人間とは思えない身体能力を有していることになる。

「ま、まあ、それはともかく! 十六夜さんと永夢さんが無事でよかったデス。水神のゲームに挑んだと聞いて肝を冷やしましたよ」

「水神? 聞いたかよお医者さん。アレ、水神らしいぜ? どうやらここは、最初から負

けイベントが起きるはずの世界だったみたいだな」

「うそ?! アレ神様?! ちよつと……僕の知り合いの神様と比べてまるで違うなあ。しかも十六夜くん、負けイベントとか思っていないでしょ」

「当たり前だろ。にしても、アレが神様ねえ」

「あ、あのお二人とも? いったいなんの話をしているのですか? 黒ウサギ、凄く不安になってきたのですが……」

十六夜の指した川面に徐々に浮かんでくる白い物体。もう嫌な予感しかしない。

『まだ……まだ試練は終わっていないぞ、小僧共オ!!』

「やっぱりー!! どうして、どうしてこんなに怒らせているのですかお二人とも!」

身の丈三〇尺強はある巨軀の大蛇。それが何者かなど今更である。間違いなく、この一帯を仕切る水神の眷属だ。

「なんか偉そうに『試練を選べ』とかなんとか、素敵なことを言われたんでな。俺を試せるかどうか試させてもらったんだよ。結果はまあ、残念な奴だったが」

『貴様ら……付け上がるな人間風情が! 我がこの程度のことです倒れるか!』

蛇神の怒りに呼応するように、蛇神の丈よりも遥かに高く巻き上がった水柱が計三本。

「まずい、十六夜さんたちは下がって!」

黒ウサギが二人を庇おうとするも、十六夜の鋭い視線がそれを阻む。

「なにを言ってるやがる。下がるのはテメエだろうが黒ウサギ。これは俺たちが売って、奴が買った喧嘩だ。手を出していいのはお医者さんだけだぜ？」

「どうして僕までプレイヤーに選ばれているのかから聞き出したいところだけど……」
「いいじゃねえか。せつかくだ、楽しんでおけよ」

ケラケラと笑う十六夜に、彼ならこのまま相手をさせても平気だろうと思いはじめ、夢。自分たちの常識が通じない相手に会うのはこれが初めてじゃない。

同時に、自分たちが知る力だけがすべてじゃないことも。

「黒ウサギ、確かに下がるのはキミの方だ」

「え、永夢さんまで！」

「人がプレイしているゲームに無理やり割り込んで参加することほど、プレイヤーを怒らせることはないからね」

手を出すことを諦めた黒ウサギは、歯噛みしながらも成り行きを見守る。

『心意気は買ってやる。それに免じ、この一撃を凌げば貴様らの勝利を認めてやる』

「寝言は寝て言え。決闘は勝者が決まって終わるんじゃない。敗者を決めて終わるんだよ」

『フン——その戯言が貴様らの最期だ！』

蛇神の雄叫びに応えて竜巻のように渦を巻いていた水柱が生き物のように唸り、蛇のように襲いかかり出す。

その対象は十六夜だけでなく、後ろに控えている永夢にも向かって来る。

「お医者さん、俺はあいつを倒してくるから、それまでしっかり生き延びとけよ！」

十六夜はそう残して、残った蛇神との距離を殺しにかかった。

「ああもう、どうして僕まで勝手にプレイヤーにするかな！」

（いいじゃないか。こっちの世界のレベルもわかるつてもんだ）

「パラドまで勝手なことばかり！　しょうがない！」

懐からゲームドライバーを取り出した永夢はそれを腰につける。

手に持つのは、ピンク色のガシヤット。

「でもまあ、ゲームなら、この俺に任せとけ！」

（久しぶりだな。しっかりいけよ、永夢！）

「ああ！」

右手に持ったガシヤットのボタンを押すと、

『MIGHTY ACTION X!!』

ガシヤットから音声が発せられた。

そして、スイッチを入れたことにより、永夢の周りには特殊な空間が展開され、所々

にブロックやメダル型のアイテムが配置されていく。

「おまえたちの運命は、俺が変える！——変身!!」

ガシャットを左に突き出し、腕を大きく回しガシャットを半回転させ左手に持ち代えると、左腕を突き上げ、ドライバーに挿入する。

『ガシャット!』

すると永夢の周りに複数のパネルが展開し、ピンク色の戦士のパネルが正面に来たとき、右手を突き出してパネルを選択した。

『レッツゲーム! メツチャゲーム! ムツチャゲーム! ワツチャゲーム! アイムア 仮面ライダー!!』

音声がりんだとき、永夢が立っていた場所には、4頭身のゆるキャラのような姿をしたなにかが鎮座していた。

新チームのstart

現れたのは、四等身の仮面の戦士——仮面ライダーエグゼイド。

「やっぱり最初はこれでしょ！ さあ、ゲームスタートだ！」

でかい凶体の戦士は、それでもまるで不自由ない動きで、むしろ俊敏な動きを見せる。

周囲に出現したブロックを足場に竜巻を回避し、そのままの勢いで蛇神へと迫っていくエグゼイド。

『なんだ貴様は！ そのふざけた形はなんだ?!』

「まさかお医者さんにそんな力があるとはな。某野菜戦士の息子たちのフュージョン失敗形みたいな姿だよな？」

『知るか！ ええい、ちよこまかと！』

本人は至つて真面目なのだが、端から見た姿はふざけているに尽きるエグゼイドを眺める蛇神が八つ当たり気味に十六夜に仕掛けるも難なくかわされ、イライラと怒りが募っていく。

もちろんそんな気を知るはずのないエグゼイドに変身した永夢は、楽しそうにブロックを飛び跳ねながら蛇神への距離を詰めていく。

「つと、やっぱりあいつ本体を無効化しないとダメか」

消えない竜巻に意識を向けたエグゼイドは、自身の専用武器であるハンマー型の武器、ガシャコンブレイカーを取り出す。

空中に出現したブロックの上を駆け抜け、さらに、そのうちのひとつを破壊すると中からメダル型のアイテムが姿を表す。

「よし、行くぜー!」

自分より巨大な相手には慣れている。

これまで何度も戦ってきた相手とそう変わらない。

出てきたメダルを使用すると、

『高速化』

音声が行くと共にエグゼイドの移動速度が目に見えて変化する。

というよりも、この場にいる十六夜や黒ウサギの目には動きが見えているのだが、常人が見れば、エグゼイドの移動速度は目で追えないものになっているだろうと高速だ。

「へえ……まるでゲーム世界だな。ブロックを壊すとアイテムが出てくるのか」

しかし、そうなると果たして自分にも効果があるのだろうかとブロックに向かう十六夜だが、途中でやめたかのように引き返した。

(どうみても俺はゲームのキャラじゃない。思えば、これらはすべてお医者さんが変な

のに姿を変えた瞬間から現れたものだ。それらを関係のない俺が使える確率は低い。おそろく、同じような奴らにしか効力はないな)

そこまで考えをまとめると、恨めしそうに永夢を睨む十六夜。

顔には俺も遊んでみたいとハッキリと書かれている。

「そりゃー！ ほっ、よつとー！」

思考に耽っている間に永夢は蛇神と戦っていたようで、速さを生かして何度も手に持つガチャコンブレイカーで・敵を叩いていく。その度に攻撃を当てた箇所に『H I T！』や『G R E A T！』の文字が浮かぶ。

このままいけば、じきに勝負はつく。

(ハッ、本格的にゲームになってきたな！ いいぜ、面白いじゃねえかお医者さんよお！

でもな)

「俺も混ぜろやゴラアツ！」

——はずだった。

突如発生した、嵐を超える暴力の渦。

腕の一振りで嵐を薙ぎ払った十六夜は、動きを止めた蛇神に肉薄する。

「嘘?!」

『バカな!?!』

「ちよ、それ俺の相手！」

驚愕と非難する三つの声。

「ま、中々だったぜ、おまえ。おかげでいいものが観れた」

胸元に飛び込んだ十六夜の蹴りは蛇神の胴体を打ち、その巨躯を空中高く舞い上がり、直後川に落下した。その衝撃で川が氾濫し、水で森が浸水する。

「またも全身を濡らした十六夜はバツが悪そうに川辺に戻った。」

「くそ、今日はよく濡れる日だ。クリーニング代ぐらいは出るんだよな黒ウサギ」

「俺はいらなげ」

隣でびしょ濡れの相手がいるのに、変身解除すれば関係ないしな。とは続けられないが。もっとも、ほとんどが十六夜のとぼちりなので言っても許されそうだが。

「にしても、人が戦ってるのを横からかっさうのはマナー違反じゃないのか？」

「いいじゃねえか。これは俺たちの協力プレーだぜ、お医者さん」

「確かにあいつ、俺たちと戦っていた風な話だったけど……まあいいか。あのまま続けてても勝敗は見えてたしな」

パラドも途中からは飽きていた。

人を守るって使命のため勝負をやめろとは言わなかったが、早々に終わらせる気ではあった。ゆえに、十六夜が終わらせてしまったとしても、一言文句を言えれば十分だ。

そう思いなおし、ゲーマドライバーに挿入していたガシヤットを取り出す。

『ガシユーン』

すると展開していたゲームエリアは消滅し、エグゼイドに変身していた永夢も、仮面の戦士から人間の姿へと戻った。

(神にしては、拍子抜けだったな)

(たぶん、そこまで強いカテゴリーの敵じゃなかったんだよ。それこそ、本当にチュートリアルだったのかもしいれない)

(ハア……ひとまずは全員無事なことを喜ぶか)

どこか退屈そうなパラドだが、それでも永夢を通して、戦うこと、遊ぶこと以上に大事なことを知った。だからこそその言葉なのだろう。

(楽しめるときはきつとそのうち来るさ)

それがわかっているからこそ、永夢もパラドに声をかける。

自分と繋がっている存在だからこそ。他の誰かにわからなくても、自分にはわかる相手だからこそ、もう道を外さないように。

彼と向き合い続ける責任があると、共に居続けると誓ったから。

「それにしても、ゲームにこだわってたのはそういうことか」

しばらく黙っていた十六夜が永夢へと話しかける。

「まあ、そんなところかな」

「見たところそのふたつで変身していたみたいだが、お医者さんの力はそれか？」

力——この世界でいうギフトのことだろうか。

（十六夜くんが興味を持つのは当然だけど、これは僕個人の力つてわけでもない……でも、その方が都合はいいか）

ないと思うが、適合者と呼ばれる資格者にならないとも限らない。

「そうだね。これは僕の力——エグゼイドとしての、僕の方だよ」

「ふうん……それさえあれば俺でもなれるのか？」

「え？ い、いやそれは無理だよ！」

「そうか、やつぱり無理か……一回くらい遊んでみたいんだがなあ。ロマンがあるし」
本当にただ気になっただけだろう。

笑って残念がる十六夜は、特に気にした様子はない。が、永夢の方は冷や汗ものだ。少し前に、自分たちと似た、けれど誰でも変身できてしまうふざけたゲームのせいで何人もの人がある病気にかかり、またはゲームの中で命を散らした。

（十六夜くんはあのことを知らない。だからこそ、できればアレはないといいんだけれど）

ひとつの可能性を考えながら、その可能性がないことを祈る永夢。

ちなみに、それを思い出していた永夢に感化されたパレードの顔は誰からも見えないのだが、ひどく青ざめていたとか。

人知れず、永夢によるアフターケアが彼の中で行われていた。

よくわからないが慌てている様子の永夢にも一言声をかけた十六夜は、まだまだ話し足りない永夢と話し込むことはせず、代わりに黒ウサギに対し笑みを消した表情で話しかける。

「なあ、黒ウサギ。オマエ、なにか決定的なことをずっと隠しているよな？」

「……なんのことですか？ 箱庭の話ならお答えすると約束しましたし、ゲームのことも」
「違うな。俺が聞いているのはオマエ達のこと——いや、核心的な聞き方をするぜ。黒ウサギ達は どうして俺達を呼び出す必要があったんだ？」

聞いてものりくらりとかわそうとしたので、自分と永夢はこのままなら黒ウサギのコミュニティには入らず他所へ行くぞと脅したところ、意図的に隠していたことを看破されたこともあり、黒ウサギは諦めるようにして、自分たちのコミュニティの現状を話し出した。

永夢もこれは聞くべきかな、と生来の人の良さが働いたのか話に耳を傾け始め、そし

てコミュニティの誇りである旗と名、さらに中核となる仲間が一人として残っていないことを知らされた。

「もう崖っぷちだな！」

「道理で、十六夜くんたちを手放せないわけだ」

「ホントですよー永夢さんですからね？」

話しながら永夢に対して逃がす気はないと暗に伝えながら、現状を再確認した黒ウサギはうなだれるように膝をついた。

「まあ、僕も帰る目処が立つまではどうかにかしなないといけないんだけど。それよりも、いったい誰が？」

「箱庭を襲う最大の天災——魔王」です。私たちはいつか、魔王から誇りと仲間を取り返したいのです。そのためには、十六夜さん達のような強大な力を持つ人の協力が不可欠なのです！　どうかその力、我々のコミュニティに貸していただけないでしょうか……?!」

「ま、魔王!？」

「神さまに魔王さまか。おいおい、お医者さんと話してたことがだんだん本当になってきてるじゃねえか」

「ゲームにしてもできすぎてるよ……」

新しい玩具を見たことのように楽しそうに、期待した笑みを浮かべる十六夜と、まさかのラスボス情報に驚くと同時に、関わった以上は倒すしかないと決意を固め出す。

「魔王から誇りと仲間をねえ。いいな、それ」

「……………は？」

「HA? じゃねえよ。協力するって言ったんだ。もつと喜べ、黒ウサギ。ついでお医者さんも協力してくれるってよ」

二人の視線が永夢へと向く。

「僕には、まだやらないといけないことがある」

「——ッ!? で、では…………」

黒ウサギの話聞きながら、やはりすぐには帰れないだろうことは自覚していた。

残してきた人たち。

これから救っていく人たち。

でも、目の前の患者から目を背けることはできない。していいことじゃない。それはドクター失格だ。

彼女は、精神的にも、身体的にも疲れ切っている。きっと、彼女の話すこともたちも……………。

「けれど、僕は医者だ。帰り方は探したいけど、キミたちを放っておくことは許されな

い。だから、僕はまず、キミたちを救うよ」

「え、えづしやん……」

自分のことを後回しにしてまで協力しようとしてくれる永夢の言葉に、黒ウサギは泣きそうになりながら感謝の言葉を述べようとする。

同時に十六夜が提案としてフォローに回るのだが。

「なら、お医者さんは黒ウサギに手を貸す。黒ウサギはお医者さんの元いた世界に帰る手助けをする。で、情報は逐一報告。代わりにお医者さんは俺たちと一緒にコミュニケーション復興まで協力すると。これで関係は対等だ」

この際誰が喚んだとかは触れない。それはそれ。来たのが悪い。喚んだ奴も悪い。両成敗でいいだろう。

「うん、僕はそれでいいよ」

元々描いていた予定よりも好転しているので、永夢としては納得できる。

帰るのは時間がかかりそうだが、果たしてどうなることやら。

「じゃあ決まりだな。黒ウサギ、さつさとあのヘビを起こしてギフトを貰ってこい。その後は川の終端にある滝と”世界の果て”を見に行くぞ」

「は、はいー」

黒ウサギは嬉しそうに跳躍し、戻ってくるころには、ウツキヤーなんて奇声をあげな

がら戻ってきた。

いいものでも手に入ったのだろう。

それを確認した十六夜は、次は自分のために行動を再開した。

十六夜の要望通りの景色を見てきた後、黒ウサギの心境の変化などもあったのだが、日が暮れた頃には別れた飛鳥たちと合流できた。したのだが、ジンたちから話を聞いた黒ウサギは怒っていた。それはもう、ウサ耳がかわいくウサウサしている余裕もないほどに。

「な、なにかあったの?」

例のごとく十六夜に担がれて帰ってきた永夢は、先ほどまでベンチで寝かされていたのだが、復活してきたばかりで状況を飲み込めていないのか、十六夜に質問する。

「お、無事だったなお医者さん。なんでも明日お嬢さまたち三人がケンカするんだとき」
さも自分たちは関係ないといった様子で、ジン、飛鳥、耀の三人のケンカだと言いつつ切った。

「聞いているのですか三人とも!」

説教はまだ続いているのだが、

「ムシヤクシヤしてやった。いまは反省しています」

「黙らっしゃい!!」

誰が言い出したのか、まるで口裏を合わせていたかのような言い訳に激怒する。ウサ耳も逆立っていた。

しかし、三人の姿勢をただ責めるだけなもの、と思いきや黒ウサギは諦めたように頷いた。「まあ仕方ないです。」フォレス・ガロ”程度なら十六夜さんか永夢さんのどちらか一人いれば楽勝でしょう」

「何言ってるんだよ。俺もお医者さんも参加しねえよ?」

「当たり前よ。貴方たちなんて参加させないわ」

フン、と鼻を鳴らす二人。

「だ、ダメですよ! 御二人はコミユニティの仲間なんですからちゃんと協力しないと」「そうだよ、チームなんだから協力はしないと! なんでもかんでも自分一人でやろうとしたら、絶対に間違える!」

「そういうことじゃねえよ。っていうか、お医者さんはわかってるだろ?」

十六夜が真剣な顔をする。

「いいか? このケンカはコイツらが売った。そして奴らが買った。なのに俺が手を出すのは無粋だって言ってるんだよ」

「あら、わかつているじゃない」

「……。ああもう、好きにしてください」

「ああ、そういうこと……。うん、それなら仕方ないかな。人のやつてるゲームに手を出すのは無粋だよね」

丸一日振り回され続けて疲弊した黒ウサギはもう言い返す気力なぞ残っていない。

その後、コミュニティへ帰る前に行くところがあるということで、ジンとは一度別れた。

なんでも、永夢たち四人のギフトの鑑定のため、“サウザンドアイズ”という超大型商業コミュニティに向かうとのこと。

道中、十六夜、飛鳥、耀の三人は興味深そうに街並みを眺めていた。

商店へ向かうペリペッド通りは石造りで整備されており、脇を埋める街路樹は桃色の花を散らしていた。

「桜の木……。ではないわよね？ 花卉の形が違うし、真夏になっても咲き続けているはずないもの」

「いや、まだ初夏になったばかりだぞ。気合いの入った桜が残っていてもおかしくない

だろ」

「……？ いまは秋だったと思う」

「もう夏も終わって秋のはずだけど」

ん？ つとまいち噛みあわない四人。黒ウサギには事情が呑み込めており、助け舟として説明役に回った。

「皆さんはそれぞれ違う世界から召喚されているのデス。元いた時間軸以外にも歴史や文化、生態系など所々違う箇所があるはずですよ」

十六夜がパラレルワールドか？ と考え、永夢は自分たちの経験や起きた騒動を三人が一切知らない可能性があるのかと表情を厳しくしていると、黒ウサギの足が止まる。

どうやら店に着いたらしい。商店の旗には、蒼い生地に互いが向かいあう二人の女神像が記されている。あれが、「サウザンドアイズ」の旗なのだろう。

日も暮れてきて、看板を下げる女性店員に、黒ウサギは滑り込みでストップを、

「まっ」

「待ったなしです御客様。うちは時間外営業はやっていません」

かける事は出来なかった。

なんて商売つ気のない店なのかしら」

「ま、全くです！ 閉店時間の五分前に客を締め出すなんて！」

「文句があるならどうぞ他所へ。あなた方は今後一切の出入りを禁じます。出禁です」
「出禁!?! これだけで出禁とか御客様舐めすぎでございますよ!?!」

アレコレと喚く黒ウサギに、店員は冷めたような眼と侮蔑を込めた声で対応する。

「なるほど、”箱庭の貴族”であるウサギの御客様を無下にするのは失礼ですね。中で入店許可を伺いますので、コミユニティの名前をよろしいでしょうか?」

喚いていた黒ウサギが言葉に詰まる。代わりに十六夜が名乗る。

「俺達は”ノーネーム”ってコミユニティなんだが」

「ほほう。ではどこの”ノーネーム”様でしょう。よかつたら旗印を確認させていただきます。いてもよろしいでしょうか?」

力のある商店であるがこそ、信用できない客を扱うリスクは冒さない。

”名”と”旗”が無い影響がこの状況でも出てきているのだ。

黒ウサギは心の底から悔しそうな顔をして、小声で呟いた。

「その……あの……私達に、旗はありません」

「いいいいやほおほおほお! 久しぶりだ黒ウサギイイイ!」

黒ウサギは店内から爆走してきた着物姿の白髪の少女に抱きつかれ、少女と共にクルクルクルクと空中四回転半ひねりして浅い水路まで吹き飛んだ。

十六夜と永夢は眼を丸くし、店員は痛そうな頭を抱えた、

「……おい店員。この店にはドツキリサービスがあるのか？　なんなら俺も別バージョ
ンで是非」

「ありません」

「なんなら有料でも」

「やりません」

「ならあんたでもいいから」

「やりたくありません」

「そこをなんとか」

「なりません」

「そ、それより二人に怪我がないか確認しないと！」

真剣な表情の十六夜に、真剣な表情でキツパリ言い切る女性店員。そして一人慌ては
ためく永夢。三人は割とマジだった。

三人が真剣に話している間、黒ウサギに強襲した白髪の少女は黒ウサギの胸に顔を埋
めてなすり付けていた。

「し、白夜叉様?! どうして貴女がこんな下層に!？」

「そろそろ黒ウサギが来る予感がしておったからに決まっておるだろに！　フフ、フホ

ホフホホ！　ほれ、ここが良いかここが良いか！」

スリスリスリスリ。

「し、白夜叉様！　ちよ、ちよつと離れてください！」

白夜叉と呼ばれた少女を無理やり剥がし、頭を掴んで店に向かって投げつける。くるくると縦回転した少女を、十六夜は足で受け止めた。

「てい」

「ゴハア！　お、おんし、飛んできた初対面の美少女を足で受け止めるとは何様だ！」

「十六夜様だけ。以後よろしく和装ロリ」

「ちよつ、十六夜くん!？」

彼の暴行に注意しようとした永夢だが、それより早く飛んできた少女が反応する。

「普通に手で受け止めんか!!　それで、その注意しようとしたおんしは誰じゃ！」

「あ、えつと宝生永夢です。それより平気なんですか!？」

「この程度で怪我はせん」

「ええ……」

一連の流れの中で呆気にとられていた飛鳥は、思い出したように白夜叉に話しかける。

「貴女はこの店の人？」

「おお、そうだとも。この“サウザンドアイズ”の幹部様で白夜叉様だよご令嬢。仕事

の依頼ならおんしのその年齢のわりに発育がいい胸をワンタッチ生揉みで引き受けるぞ」

白夜又は指をわしやわしやと動かして飛鳥に迫ろうとするが、

「オーナー。それでは売上が伸びません。ボスが怒ります」

何処までも冷静な声で女性店員に釘を刺され、動きを止めた。

「うう……………まさか私まで濡れる事になるなんて」

濡れた服やスカートを絞りながら黒ウサギが戻ってきた。

「因果応報……………かな」

「ふふん。お前達が黒ウサギの新しい同士か。異世界の人間が私の元に来たということ………遂に黒ウサギが私のペットに」

「なりません！ どういう起承転結があつてそんなことになるんですか！」

ウサ耳を逆立てて怒る黒ウサギ。

何処まで本気かわからない白夜又は笑つて店に招く。

「まあいい。話があるなら店内で聞こう」

「いいのですか？」

「よいよい。」ノーネームだとわかっていながら名を尋ねる性悪店員に対する佯びだ」

む、つと拗ねるような顔をする女性店員。彼女にしてみればルールを守っただけなのだから気を悪くするのは仕方のないことだろう。

「……………わかりました、どうぞ」

五人は、やはり女性店員に睨まれながら暖簾をくぐった。

白夜のchallenger

「生憎と店は閉めてしまったのでな。私の私室で勘弁してくれ」

五人は和室に案内され、腰を下ろしていた。

部屋には香の様な物が炊かれています、五人の鼻をくすぐる。

個室というにはやや広い和室の上座に腰を下ろした白夜又は、大きく伸びをしてから永夢たちへと向き直る。気がつけば、彼女の着物は既に乾いていた。

「もう一度自己紹介しておこうかの。私は四桁の門、三三四五外門に本拠を構えている”サウザンドアイズ” 幹部の白夜又だ。この黒ウサギとは少々縁があつてな。コミュニティが崩壊してからもちよくちよく手を貸してやっている器の大きな美少女と認識しておいてくれ」

「はいはい、お世話になっております本当に」

投げやりな態度で受け流す黒ウサギ。いつもこうなのか、水路に落とされたことが関係しているのかは定かではない。

けれど悪い仲ではないらしく。

「その外門、つてなに？」

「箱庭の階層を示す外壁にある門ですよ。数字が若いほど都市の中心部に近く、同時に強大な力を持つ者達が住んでいるのです」

黒ウサギが上空から見た箱庭の図を書いて見せてくる。

その図は、外門によって幾重もの階層に分かれている。

「……………超巨大タマネギ?」

「いえ、超巨大バームクーヘンではないかしら?」

「そうだな。どちらかといえばバームクーヘンだ」

「なら、ここは一番薄い皮の部分に該当するってことだね」

「そうなるだろうな」

うん、と頷きあう四人。

白夜又は哄笑を上げて二度三度と頷いた。

「その通りだ。更に詳しく説明するなら、東西南北の四つの区切りの東側にあたり、外門のすぐ外は“世界の果て”と向かい合う場所になる。あそこはコミュニティに所属していないものの、強力なギフトを持ったもの達が棲んでおるぞ——その水樹の持ち主などな」

白夜又は薄く笑って黒ウサギの持つ水樹の苗に視線を向ける。白夜又は指すのは、別行動していた永夢と十六夜が倒した蛇神の事だろう。

「して、一体誰が、どのようなゲームで勝ったのだ？ 知恵比べか？ 勇気を試したのか？」

「いえいえ。この水樹は十六夜さんがここに来る前に、蛇神様を素手で叩きのめしてきたのですよ」

自慢げに黒ウサギが言うと、白夜叉は声を上げて驚いた。

「なんと！ クリアではなく直接的に倒したとな!? ではその童共は神格持ちの神童か？」

「いえ、黒ウサギはそうは思えません。神格なら一目見れば分かるはずですし」

「む、それもそうか。いや、そうでもないのかもしれない……。しかし神格を倒すには同じ神格を持つか、互いの種族によほど崩れたパワーバランスがある時だけのはず。種族の力でいうなら蛇と人ではドングリの背比べだぞ」

「白夜叉様はあの蛇神様とお知り合いだったのですか？」

「知り合いも何も、アレに神格を与えたのはこの私だぞ。もう何百年も前の話だがの」
十六夜は白夜叉の発言を聞いてから、物騒に瞳を光らせていた。

「オマエはあの蛇より強いのか？」

白夜叉にそう問いたです。

「ふふん、当然だ。私は東の”階層支配者”だぞ。この東側の四桁以下にあるコミュニ

ティでは並ぶ者がいない、最強の主権者なのだから」

”最強の主権者”——その言葉に、十六夜・飛鳥・耀の三人は一斉に瞳を輝かせる。「そう………ふふ。ではつまり、貴女のゲームをクリア出来れば、私達のコミュニティは東側で最強のコミュニティという事になるのかしら？」

「無論、そうなるのう」

「そりゃ景気のいい話だ。探す手間が省けた」

三人は剥き出しの闘争心を込めて白夜叉を見る。白夜叉はそれに気づいたように高らかに笑いあげた。

「抜け目ない童達だ。依頼しておきながら、私にギフトゲームで挑むと？　しかし、お主はよいのか？」

この流れで問題児三人に続かない永夢に白夜叉は挑戦的な視線を送るが、ひとつ笑みを浮かべた永夢は告げる。

「戦つてもいいですけど、相手との差がわからない程じゃないんですよ。強い人つて、見ればわかりますから」

「あら、見た目の割に臆病なのね」

「いいの？　せっかくの機会なのに。私たちが勝っちゃうよ？」

飛鳥と耀はせっかくなら全員で挑みたいのだろう。消極的な永夢に発破をかける。

「お医者さんなら普通に戦えんだろ？　せつかく力を使える舞台にいるんだ。使わないともつたいねえぞ」

十六夜は先ほどの一戦を思い出しながら、その背景を探りたそうに誘いをかける。それでも永夢は首を横に振った。

「ダメだよ。むしろ、僕はキミたちを戦わせないようにしたいぐらいなんだから」

「はあ？　おいおい、保護者面はやめてくれよお医者さん。俺の力だつて見てただろ？」
「うん、でもダメだ」

相手との戦力差がわからないまま戦わせてはいけない。永夢の中で鳴り続ける警鐘に訴え、十六夜たちを止めようとする。

「いいわよ。貴方が戦いたくないのはわかったから、そこで見てなさい」

「私たちだけで楽しむからいい」

「そういうことだ、お医者さん。あんたは座って見物してろよ。混ざりたくなったら入ってきてくれていいぜ」

待っていると言いながら、一步前に入る三人。

「え？　ちよつと御三人様!？」

慌てる黒ウサギを右手で制す白夜叉。

「よいよ黒ウサギ。私も遊び相手には常に飢えている。一人参加しないのは残念だが

な」

「ノリがいいわね。そういうの好きよ」

「ふふ、そうか。——しかし、ゲームの前に一つ確認しておく事がある」

「なんだ？」

白夜又は着物の袖から「サウザンドアイズ」の旗印——向かい合う双女神の紋が入ったカードを取り出し、壮絶な笑みで一言。

「おんしらが望むのは”挑戦”か——もしくは、”決闘”か？」

刹那、四人の視界に爆発的な変化が起きた。

黄金色の穂波が揺れる草原。白い地平線を覗く丘。森林の湖畔。

四人が投げ出されたのは、白い雪原と凍る湖畔——そして、水平に太陽が廻る世界だった。

「……なっ……!？」

あまりの異常さに、十六夜達は同時に息を呑んだ。

薄く薄明の空にある星は只一つ。緩やかに世界を水平に廻る、白い太陽のみ。

啞然と立ち竦む四人に、今一度、白夜又は問いかける。

「今一度名乗り直し、問おうかの。私は”白き夜の魔王”——太陽と白夜の星霊・白夜又。おんしらが望むのは、試練への”挑戦”か？ それとも対等な”決闘”か？」

魔王・白夜叉。少女の笑みとは思えぬ凄みに、再度息を呑む四人。

十六夜は背中に心地いい冷や汗を感じながら、白夜叉を睨んで笑う。

「水平に廻る太陽と……そうか、白夜と夜叉。あの水平に廻る太陽やこの土地は、オマエを表現しているってことか」

「如何にも。この白夜の湖畔と雪原。永遠に世界を薄明に照らす太陽こそ、私が持つゲーム盤の一つだ」

「これだけ莫大な土地が、ただのゲーム盤……!?!」

「ゲームエリアとは違う？ 原理は似ているのかな？ 内部はあの人がいないとわからないか……」

全員が驚く中、冷静に考察を続ける永夢のつぶやきには気づかない白夜叉が答える。

「如何にも。して、おんしらの返答か？」 挑戦 であるならば、手慰み程度に遊んでやる。——だがしかし”決闘”を望むなら話は別。魔王として、命と誇りの限り闘おうではないか」

「……………っ」

三人は即答できず、返事を躊躇った。

白夜叉が如何なるギフトを持つのか定かでは無いが、勝ち目が無いことだけは一目瞭然だった。

「参った。やられたよ。降参だ、白夜叉」

「ふむ？ それは決闘ではなく、試練を受けるといふ事かの？」

「ああ。これだけのゲーム盤を用意出来るんだからな。アンタには資格がある。——
いいぜ。今回は黙って試されてやるよ、魔王様」

苦笑と共に吐き捨てるような物言いをした十六夜。

白夜叉は堪え切れず高らかと笑い飛ばした。

「く、くく……………して、他の童達も同じか？」

「……………ええ。私も、試されてあげてもいいわ」

「右に同じ」

苦虫を噛み潰したような表情で返事をする二人。

「ふむ。さて、最後にお主はどうする？」

最後の一人である永夢はというと、

「これポツピーに送って解析して貰えたりしないかな？ それだけでかなりの前進が見られると思うんだけど……………そうだ、ステージセレクトでなにかフィールドが増えていなか後で確認してみようか」

「おんしいっ！ なにを冷静にしとるか!？」

「え？ あ、はい!？」

突然耳元で叫ばれたことで尻餅をつく永夢。

「なんですか?!」

「乗るのか、乗らんのかという話だ」

「そういうばそんな話をしていたな、と思いつくと、やはり首を横に振り、拒否の意を示す。

自分が戦ってきた相手は確かに強敵だった。特殊な能力を持つ者もいた。巨大すぎる者だっていた。だが、スケールが違う。パラドでさえ警戒する相手にわざわざ喧嘩を売る必要はない。

「乗りませんよ。ただのゲームなら相手になりますけど、決闘は僕らしくもない」

「ふむ、そうか」

一連の流れをヒヤヒヤしながら見ていた黒ウサギは、ホツと胸をなでおろす。

「も、もう！ お互いにもう少し相手を選んでください！」 階層支配者 に喧嘩を売る新人と、新人に売られた喧嘩を買う 階層支配者 なんて、冗談にしても寒すぎます！ それに白夜叉様が魔王だったのは、もう何千年も前の話じゃないですか!!」

「はてはて、どうだったかな?」

ケラケラと悪戯っぽく笑う白夜叉。ガクリと肩を落とす黒ウサギと三人。

「さて、では始めるとするか」

白夜叉の声に反応するように、湖畔の向こう岸にある山脈から巨大な翼を広げた獣が空を滑空し、こちらへ駆けて来た。

「あれは……」

「グリフォン……うそ、本物!？」

驚の翼と獅子の下半身を持つ獣を見て、耀は驚愕と歓喜の籠った声を上げた。

「如何にも。あやつこそ鳥の王にして獣の王。〃力〃 〃知恵〃 〃勇気〃の全てを備えた、ギフトゲームを代表する獣だ。おんしら三人には、グリフォンと〃力〃 〃知恵〃 〃勇気〃のいずれかを比べ合い、背に跨って湖畔を舞うことができればクリア、という事にしようか」

そうして出来上がったゲームのプレイヤー名の中に永夢の名はなく、他の三名の名前だけが刻まれていた。

「えつと……」

「お主はなにやら纏う雰囲気は彼奴らと違ったのでな。すまんが一人で別のゲームに挑んでもらう」

「そう、ですか。わかりました」

白夜叉と話していると、ゲームルールが記されている羊皮紙を読み終えた三人うち、耀が挙手し、参加表明していた。

その瞳が真っ直ぐにグリフォンに向き、キラキラと輝いているとくれば、あとの二人は譲るしかない。

「OK、先手は譲ってやる。失敗するなよ」

「気をつけてね、春日部さん」

頷き、グリフォンへと駆ける耀。

「え、えーと。初めまして。春日部耀です」

近寄り話しかける耀の言葉はわかれど、永夢たちにはグリフォンの声は聞こえない。

「私を貴方の背に乗せ……………誇りを賭けて勝負をしませんか？」

『……………なに……………?』

彼女の声を聞いた瞬間、グリフォンの声と瞳に闘志が宿る。

「貴方が飛んできたあの山脈。あそこを白夜の地平から時計回りに大きく迂回してこの湖畔を終着点と定めます。貴方は空を駆け、湖畔までに私を振るい落とせば勝ち。私が背に乗っていられたら私の勝ち……………どうかな」

『娘よ。お前は私に誇りを賭けると持ちかけた。お前の述べる通り、娘一人振るい落とせないならば、私お名誉は失墜するだろう。——だがな娘。誇りの対価に、お前はなにを賭す?』

「命を賭けます」

即答だった。

彼女たちの会話の半分がわからなくても、永夢を動かすには十分な言葉でもあった。

「なにを言っているんだ……」

隣で黒ウサギと飛鳥の驚く声が上がったが、耳には入ってこない。

「耀ちゃん、軽々しく、命をかけるなんて言っただけだよね？」

「え？ うん、もちろん。だって私の夢のひとつが叶うから、簡単な気持ちで言ったりしないよ」

「……でも、やっぱり命をかけるなんて言われると、医者としては許容できない」

「なら、ちゃんと帰ってきて証明する。私はまだ、ずっと生きていたいから」

それだけ話すと、永夢との会話を切り上げて行ってしまおう。

彼女の瞳には諦めも、命を軽んじる気持ちも一切なかった。むしろ、命の尊さを知っているようでした。あつたのだ。

（あの子、過去になにかあつたのかな？）

（案外、永夢みたいな過去を持ってたりするのかな）

自分から離れていく少女の背中を見守りながら、彼女とグリフォンのゲームは始まった。

問われるPreparedness

結果から言えば、白夜叉からの試練には耀が挑戦し、翼を持った獣、グリフオンの試練に打ち勝った。永夢は耀が無事かどうかを確かめたりと一悶着あったにはあったが医者だということでも収束した。

先程までは耀のギフトである”生命の目録”に白夜叉の意思は向いていたのだが。

「それで、今日は鑑定をお願いしたかったのですけど」

黒ウサギの発言に、ゲツ、と気まずそうな顔になる白夜叉。

「よ、よりにもよってギフト鑑定か。専門外どころか無関係もいいところなのだがの」

白夜叉はゲームの賞品として依頼を引き受けるつもりだったのだろう。困ったように白髪を掻きあげ、着物の裾を引きずりながら四人の顔を両手で包んで見つめる。

「どれどれ……………ふむふむ……………うむ、四人とも素養が高いのは分かる。しかしこれではなんとも言えんな。おんしらは自分のギフトの力をどの程度把握している?」

「企業秘密」

「右に同じ」

「以下同文」

「かなり深い部分までは」

「うおおおい!? いやまあ、仮にも対戦相手だったものにギフトを教えるのが怖いのは分かるが、それじゃ話が前に進まんだろうに」

「別に鑑定なんていらねえよ。人に値段貼られるのは趣味じゃない」

ハッキリと拒絶する声音の十六夜と、同意するように頷く三人。

「僕に関してはそれなりの期間戦ってきましたし、今更鑑定なんかしてもらわなくても十分ですから」

理由は違えど、永夢も十六夜に続くように本音を漏らす。

困ったように頭を掻く白夜又だったが、突如妙案が浮かんだとばかりにニヤリと笑った。

「ふむ、何にせよ」主催者として、星霊として、試練をクリアしたおんしらには「恩恵を与えねばならん。ちよいと贅沢な代物だが、コミユニティ復興の前祝としては丁度良からう」

白夜又がパンパンと拍手を打つ。すると四人の前に光り輝く四枚のカードが現れる。

カードにはそれぞれの名前と、体に宿るギフトを表すネームが記されていた。

コバルトブルーのカードに逆廻十六夜・ギフトネーム”正体不明(コード・アンノウン)”

ワインレットのカードに久遠飛鳥・ギフトネーム”威光”

パールエメラルドのカードに春日部耀・ギフトネーム”生命の目録(ゲノム・ツリー)

”” ノーフォーマー”

オレンジとライトブルーで彩られたカードに宝生永夢・ギフトネーム”永遠の救済”

” 天才ゲーマーM”

それぞれの名とギフトが記されたカードを受け取る。

黒ウサギは驚いたような、興奮したような顔で四人のカードを覗き込んだ。

「ギフトカード!」

「お中元?」

「お歳暮?」

「お年玉?」

「カードゲーム?」

「ち、違います! というかなんで皆さんそんなに息が合ってるのです!? このギフト

カードは顕現しているギフトを収納できる超高価なカードなんですよ! 耀さんの”

生命の目録” だって収納可能で、それも好きな時に顕現できるのですよ!」

「やっぱりお医者さんはゲーム好きだな」

「うん、小さい頃からね」

「話をちゃんと聞いてください!!」

黒ウサギは大声をあげた。

「聞いてたよ。つまり素敵アイテムつてことでオツケーか？」

「だからなんで適当に聞き流すんですか！ あーもうそうです、超素敵アイテムなんですー！」

黒ウサギに叱られた四人は、そんなことはお構いなしにそれぞれのカードを物珍しそうに見ていた。

「我らの双女神の紋のように、本来はコミュニティの名と旗印も記されるのだが、おんしらは”ノーネーム”だから。少々味気ない絵になっているが、文句は黒ウサギに言うてくれ」

白夜又は自分のカードを見せながら説明する。

「ふうん……もしかして水樹って奴も収納できるのか？」

水樹にカードを向けると、光の粒子となってカードの中に吸い込まれた。

見ると十六夜のカードは溢れんほどの水を生みだす樹の絵が差し込まれ、ギフト欄の”正体不明”の下に”水樹”の名前が並んでいる。

「おお？ これは面白いな。もしかしてこのまま水を出せるのか？」

「出せるとも。試すか？」

「だ、駄目です！ 水の無駄使い反対！ その水はコミュニケーションの為に使ってください！」

チツ、とつまらなそうに舌打ちする。黒ウサギはまだ安心できないのか、ハラハラと十六夜を監視している。

白夜叉はその様子を高らかに笑いながら見つめた。

「そのギフトカードは、正式名称を”ラプラスの紙片”、即ち全知の一端だ。そこに刻まれるギフトネームとはおんしらの魂と繋がった”恩恵”の名称。鑑定は出来ずともそれを見れば大体のギフトの正体が分かるというもの」

「へえ？ 俺のはレアケースなわけだ？」

ん？ と白夜叉が十六夜のカードを覗き込む。

そこには確かに”正体不明”の文字が刻まれている。ヤハハと笑う十六夜とは対照的に、白夜叉の表情は劇的に変化した。

「……………いや、そんな馬鹿な」

パシツと白夜叉はギフトカードを取り上げる。真剣な眼差しでギフトカードを見る。白夜叉は不可解とばかりに呟く。

”正体不明”だと……………？ いいやありえん、全知である”ラプラスの紙片”がエラーを起こすはずなど」

「何にせよ、鑑定は出来なかったってことだろ。俺的にはこの方がありがたいさ」

パシツと白夜叉からギフトカードを取り上げる。だが白夜叉は納得できないように怪訝な瞳で十六夜を睨む。それほどギフトカードが「正体不明」とはありえないものなのだろう。

（そういえばこの童……………蛇神を倒したと言っていたな。強大なギフトを持っている事に間違いはないわけか。……………しかし”ラプラスの紙片”ほどのギフトが正常に機能しないとはどういう……………考えられんが、ギフトを無効化したのか……………？ いや、まさかな）

浮上した可能性を、苦笑と共に切り捨てる。

修羅神仏の集うこの箱庭において無効化のギフトなど対して珍しくもない。だが、それは単一の能力に特化した武装に限られた話。

十六夜のような強大な奇跡を身に宿す者が、奇跡を打ち消す御技を宿しては大きな矛盾が生まれる。その矛盾に比べれば”ラプラスの紙片”に問題があるという結論の方がまだ納得できた。

しかし、話はまだ終わらない。

「あの、結局僕の参加するゲームはどうなるんですか？」

永夢だ。

白夜叉からは別のゲームに参加するようにと言われていたのを思い出したのだろう。「そうじゃったな。まだお主のゲームが済んでいなかったか。といつても、すぐに終わってしまうかもしれないのう……ルールとしては簡単に。そして特にリスクはなしがいいか。どれ……」

白夜叉が双女神の紋が入ったカードを取り出すと羊皮紙が出現し、そこに何事かを記述していく。これは耀たちのゲームと同じ手順だ。

「こんなどころかのう」

提示された内容を永夢に見せると、そこには。

『ギフトネーム名 // 示される覚悟』

・プレイヤー一覧 宝生永夢

・クリア方法 白夜叉に認められる。

・敗北条件 降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

// サウザンド

アイズ”印』

「随分曖昧なルールですね」

読み終えた永夢は正直な感想を述べる。

「よいよい。お主の力も得意分野もわからんからそうしただけだ」

「白夜叉様?! 本気にございますか?」

しかし、それでも黒ウサギは否定的だ。なぜなら、どういう形であれ同士の相手をするのが白夜叉だからである。

理由を察している彼女は、自身の右腕を掲げて見せる。

「であれば、攻撃には右腕一本しか使わん。攻撃のために他を使わせたなら、それでそやつの勝ちということでもいいであろう?」

「なにをおっしゃって——」

「いいですよ、それで」

「永夢さん!」

黒ウサギの返答を待たずして答える永夢。

(腕一本とか、舐められすぎるのは癪だよな、永夢。確かにあいつは強い。けれど)
(このまま引き下がるのは、僕たちの敗北と同じだ)

パレードの意思を強く感じる。

彼の想いを引き継ぎながら、永夢は白衣のポケットに手を入れる。

厳しい戦いになることなどわかりきっている。自分の戦ってきた相手よりも更に格

上なのも。それでも、すべてを乗り越えてきた彼に——彼らに覚悟を突きつけられては逃げられない。

なによりこれは決闘ではなく、ゲームだ。ならば。

「こっちは天才ゲーマーの称号を持つてるんだ。ゲームが怖くてプレイできないようじゃ、天才ゲーマーMは名乗れないじゃないか」

(乗ってきたな、永夢。相手は超がいくつも付くほどの強敵。心が躍る！)

止まらないと判断した黒ウサギは、無理ならすぐにリタイアしてくださいとだけ告げ、後方へと下がる。

「もう一度お医者さんの戦いを見れるとはな。こいつは面白そうだ」

「私、あの人が強いとは思えないのだけれど」

「いい人しか見えないよね、先生は」

「先生?」

「うん、先生」

続くように下がっていく三人は永夢を眺めながらなにやら緊張感のない会話を広げている。

注目しているのかしていないのか微妙なところだ。

「これで周りに被害がいくことはないな。念のため言っておくが、いまなら戦う前に降

参することを許すぞ?」

満面の笑みを浮かべて問いかける白夜叉に、こちらも笑顔を浮かべる永夢。

「結構です。勝つのは僕ですから」

「言うではないか。では、後悔だけはしてくれるなよ」

白夜叉は距離を取り、永夢と向き合う。

(こやつ纏う雰囲気はどこか異質……悪い気はせんのかな、どうにも気になる。ひとまず戦力になり得るかだけ見極めたら適当に終わらせるかの)

どういった魂胆があるかなど知らない永夢は、ゲームドライバを装着する。

「先手は譲る。好きにかかってこい」

「どうも」

蛇神と戦ったときと同じレベルが通用するとは到底思えない。けれど、本気でない相手にあれを使うことはしない。

だが、下手に戦おうとすれば大怪我は免れないだろう。

そこまで考えた永夢は、ひとつのガシャットを取り出す。

「なんだ? さつき見た奴より厚いな」

観戦する十六夜から、そんな声が漏れる。

先の戦闘を見ていない飛鳥と耀は、なにが起きるのかとジッと眺めていた。

永夢が握るのは、マイティブラザーズXXガシヤット。

この場にいる全員からの視線を集めながら、永夢はガシヤットを起動する。

『MIGHTY BROTHERS XX』

「俺たちの覚悟を見せてやる。変身ッ！」

ガシヤットをドライバーに装填し、

『ダブルガシヤット！』

周りを取り囲むようにして展開された複数のパネルから、右斜め後方に右腕を突き出し、パネルを選択する。

『マイティ！ ブラザーズ！ 二人で一人！ マイティ！ ブラザーズ！ 二人でビク

トリーX！』

「音声が違う？ やっぱり別物なのか」

「永夢さんも謎の多い方ですね……」

十六夜と黒ウサギはそう感想を漏らすが、現れたのは先ほどと細部が異なるものの、やはり4頭身のゆるキャラのような姿だった。

「なに、あれ……」

「ちよつとかかわいいかも」

飛鳥と耀が同時に感想を述べる。若干の呆れと羨望が各々混ざっているが、飛鳥はい

かにも期待はずれと言いたそうだ。

「あまり変化がないな。そういやあんときも同じような・名前が事前に流れてたが……
マイティアアクションXなんて聞いた覚えねえぞ」

十六夜は一人考察を続けるが、知らないものをどうこうすることはできないと諦め、
これから起きることを注意深く見つめだした。

その対峙する二人は、

「姿を変えるギフトか？ お主、ギフト名は？」

「これが終わったら教えてやるよ。さあ、始めようぜ」

「まあよい。どれ、少し遊んでやるとするか」

「行くぜ、ゲームスタートだ！」

永夢が駆け出し、白夜叉に肉薄した次の瞬間。攻撃を繰り出した途端、彼は後方へと
吹き飛ばされていた――。

二人のGamer

手加減したつもりはなかった。

未知の強敵。攻略対象……一時として、気を抜いてなどいかなかった。けれど。

「うあつ、あ……ぐう……」

先手を取ったはずの永夢は、衝撃を受けると共に吹き飛ばされ、地面を転がっていた。これまでも時を止められその間に攻撃を受けることはあったが、これは違う。歴然とした差が永夢と白夜叉の間にはあるのだ。

(まさか、一撃目すら防がれるとはな……無事か、永夢)

(だいじょうぶ。派手に飛ばされたけど、威力自体は低いみたいだ。それよりも……)
(ああ、あいつを攻略するのは骨が折れるな)

パラドと会話しながらも素早く体勢を整えるが、白夜叉からの追撃はない。

「ふむ、やはり一撃では沈まんか。……どうした？ さっさとかかって来ぬか。それとも、こちらから出向いた方がよいか？」

先ほどの場所から一歩たりとも動いていない彼女は、永夢に問いかける。

観戦していた十六夜たちにも、二人の戦いの様子は把握できている。飛鳥のみ、若干速さについていけないようだったが、黒ウサギが起きた出来事を説明して納得していた。

「お医者さんでも歯が立たないか……俺も参戦していいならしてみたいんだが」

「ダメですよ!?!」

「わかってるさ。あれはお医者さんの戦いだ。俺が混ざっていい道理がねえ」

覚悟。

ゲーム名にもなっているこの言葉だけで、他の誰かが立ち入ることなど許されないとわかっているのだ。だからこそ、十六夜はゲームの行方を見守ることしかしない。

「でも、先生最初から相手になってないよ? どうにかしないと」

「それはお医者さんの問題だろ。天才ゲーマーとか名乗ってたんだ。それこそ、これはゲームなんだからどうにかするだろ」

耀は十六夜の言葉に頷きながらも、どこか心配そうに見つめている。

「安心しろ。白夜叉も本気で殺しはしないだろうし、お医者さんもそう簡単には倒れねえよ」

「べつにどうこう思ってるわけじゃない」

「……そうかよ」

構うのをやめ、視線を再び永夢たちに戻す十六夜。

黒ウサギはそんなやりとりを微笑ましく眺めながらも飛鳥に戦況の流れを説明しながら、やはり彼女も心配そうに見守るのであった。

「もう一度飛び込んでみるか」

目の前に佇む白夜叉のスピードは永夢たちの想像を軽く超えていた。

（無策で突っ込むのは得策じゃない！）

（わかってるよパラド。だから、あと一度だけ！）

言い聞かせながら、足に力を込める。

純粋な力比べでは決して届かない……理解はできているが、作戦を練るには情報が少なすぎる。

「勝つためにも、俺たちに必要なものを見定める！」

「いい心意気だ！」

その場から飛び出し、再度白夜叉へと突貫する永夢。避けようと思えば容易に避けられる攻撃を、白夜叉はあえてギリギリでかわしてみせる。

「ほれ、どうした？」

「くそっ！」

笑いながら拍手を鳴らしてあちこちを飛び回る白夜叉と、必死になって追い続ける永夢。

姿からは想像できないほどの俊敏さを見せる永夢に十六夜たちは微妙な表情をしているが、耀や黒ウサギは目を輝かせてもいる。

だが、そんなことは関係ない。

「遅くはないが、その程度では届かんぞ」

あと一步でというところで遊ばれるように逃げられては、一方的に消耗していく。

「やっぱり速さが足りないか!？」

反撃するでもなく、ただ動きを観察するようにしてるだけの相手となればなおさらだ。

基本スペックはレベルと比べて遥か上になっていても到底敵わない。

(まずは相手と同等のスピードに乗らないと勝負にすらならないか)

(このままじゃなにもできないまま終わるぞ、永夢。そろそろあいつを驚かせようぜ!)
他の誰にも聞こえないはずの声に領きつつ、辺りを見渡す。

変身するときに同時に広がったゲームエリアによって出現したブロックが目に残まる。

(これは医療じゃない……ただ俺の力を見極めようとしているだけのゲームだ。だけど

！)

ブロックのひとつを破壊すると、中からメダル型のアイテムが出現する。エナジーアイテム——対象に吸収されることで効果を発動するアイテム。そのうちの現れたひとつを使用する。

『高速化』

音声 flowed 直後、これまでとは比較にならない速度で移動し始める永夢。

「まだまだ!」

高速で走りながら、更にブロックを破壊し、次のメダルを使用する。

『透明化』

「消えた!」

「あのメダル、一種類だけじゃないのか」

飛鳥は驚きの声をあげ、十六夜は現れたメダルが違うことに疑問を持ち始める。

今度はエグゼイドの姿が消え、名前の・通り透明になって白夜叉に迫る。

「ほほう。面白い技を使うようだが……速度が追いついただけではどうにもならんぞ」

彼女が手をかざすと、一瞬あとになにかを捕まえたかのように手を握った。

「なに!」

「ほれ、見えなくなったただけなら簡単に捕まえられる」

永夢の声だけが白夜叉の近くで響く。どうにも、移動して接近していた永夢の動きを悟り、透明であろうと関係なく捕らえた白夜叉は完全に常軌を逸している。

これには完全に想定外だったのか、永夢だけでなく、彼の中にいるパラドさえも驚愕した。

「おい黒ウサギ。あれは攻撃のための右腕以外の使用には当てはまらないのか？」

「……残念ですが、その行い自体が攻撃とは認識されなかったようです」

「おいおい、次の行動で攻撃につながらなければセーフってか？ ルールの穴を突くような粋な真似するとはな！」

これがゲームの醍醐味だよな、と楽しそうに笑う十六夜と、本当に残念そうに呻く黒ウサギ。

彼らの声などお構いなしに続ける白夜叉は、

「なんじゃ、もう芸は終わりか？ ならば」

捕まえている手とは逆の右手に力が宿り出す。

「終いにしようか？」

逃れられない。

どれだけ力を加えようと、細い腕からは考えられない力で握られ解くことが叶わないのだ。

このまま腕を振るわれれば、間違いなく倒される。

彼の中で、パルドが首を縦に振った——ように彼だけが感じていた。

「まだ、終われない！ 俺たちのゲーム攻略はここからだッ!!」

ゲームドライバを一且閉じ、片手しか回せなかったが、大きく回転させる。

「だーだーだーい変身!!!」

『ダブルアップ!』

力強い掛け声と共に再びゲームドライバを開く。

『俺がお前で！ お前が俺で！ マイティ！ マイティ！ ブラザーズXX!』

白夜叉が掴んでいた腕から順に透明化が解除されると、すぐさま粒子状になり彼女の腕から逃れるように距離を取り、二箇所を集まり出す粒子。

「なんじゃこれはー」

それぞれオレンジと青緑の粒子が寄り集まり、本来ならあり得ない現象が起こる。

集まった二箇所には、それぞれオレンジを基調とした青緑を基調とした、二人のエグゼイドが存在していた。二人にはそれぞれの右肩、もしくは左肩にレベルXの顔が半分ずつだがついており、二人が肩を並べることのでひとつの顔になるようになっていた。

「超キョウリョクプレーで」

青緑を基調とした形態のエグゼイド——永夢が左手を隣にいるオレンジを基調とし

たエグゼイド——パラドに伸ばす。

互いの想いを感じ合い、意識を共有することのできる永夢とパラド。自分自身だとさえ言い合える彼らだからこそその変身。

「クリアしてやるぜ!!」

伸ばされた手と伸ばす手。

二人の手が重なり合い、ひとつ音を鳴らす。

直後、別々の方向に走り出し、それぞれが白夜叉へと向かっていく。

パラドを取り込んだの変身では、二人になったエグゼイドのうち一人は変身者がパラドになる。これは永夢のある病気とも関係があり、二人は極めて近い存在にある。

その結果が、いまの二人なのだ。

パラドは永夢の天才ゲーマーMとしての一面を持つ、言い換えれば永夢の別側面のよいうなもの。参加プレイヤーが宝生永夢のみだったとしても参加できている裏には、そうした彼らの事情が介在している。

「散々好きに遊んでくれたが、俺と永夢の力をみせてやるよ!」

「なんじゃ、いきなり二人になったと思うたら人格まで違うとは!?!」

「いいや、俺はあいつだ!」

エナジーアイテムを巧みに駆使しながら殴りかかるパラド。

その声音は我慢していたゲームをやっとプレイできたときのこどものように明るく、楽しそうなものだった。

「二人で張り切りすぎるなよ、パラド！」

そんな彼に続くように、最近保護者と化している永夢も続く。

こちらはレベルXXの専用武器であるガシヤコンキー斯拉ッシャーを取り出し、ブレードモードで斬りかかる。

ブレード、アックス、ガンの3モードを自在に切り替えられる複合型のガシヤコンウエポンであり、白夜叉がひらりとかわすや否や、躍りかかるパラドにパスし、今後はガンモードに変更しながら攻撃を繰り返すなど、互いに武器を譲り合いつつの戦法を取る。

「二人!? どういうこと黒ウサギ！」

「わ、わからないのですよ!! なにが起きたのでございますか！」

「先生が二人? でも、なんか違う」

「二人で会話してんのか? 流れてる音声と違って人の声はなかなか拾えないな……戦闘で生じる音も邪魔だ。くそ、お医者さんの秘密に迫れそうなんだがなあ」

観戦している四人がそれぞれの反応を示し、慌ただしくする者や冷静に分析する者に分かれるのだが、エグゼイドが二人になった際の驚きは変身したとき以上のものになっ

ていた。

いまもいつの間にかアックスモードになったガシャコンキースラツシャーをパラドから受け取った永夢が突貫し、横から隙を見てパラドが「高速化」と「マツスル化」を併用した速度とパワーで拳や脚を打ち込んでいく。

「おのれ、おかしな動きをしておって！」

「まだまだ上げてくぜ！」

変幻自在な様々な攻撃方法を可能とする永夢とパラドに、つつい笑みを浮かべる白夜叉。

つまらなそうにしていた彼女が、ここに来て楽しみ出そうとしてる。

纏う空気の変化に気づいたのか、勝負を決めようとする永夢。対してパラドは、

「心が滾るッ！」

こちらも楽しくて仕方がないと、興奮した際の口癖を漏らす。

「もう少し遊びたかったが、ここが攻めどきだ」

これ以上続けるとなると、元のレベルが違うだろう白夜叉が勝る。力を出すか出さないかで迷っているいまこそ、絶好の好機。

勝機を逃す手はないと、興奮した状態でも冷静な部分が告げる。

互いの意思を感じ取った永夢とパラドの二人が隣に並び合う。

「フィンニッシュは必殺技で決まりだ！」

「ああ！ 決めるぞ永夢！」

ドライバーのレバーを閉じて再度開く。

『キメワザ！』

『マイティダブルクリティカルストライク！』

二人のエグゼイドの右足にエネルギーが収束していく。

もちろん、永夢とパードはこの一撃で終わらせるつもりだ。

前に駆け出した二人が空中に飛び上がり、

「ライダーキック！」

掛け声と共に、交互に飛び蹴りを叩き込もうとする。

「決めにきたか。よかろう、この白夜叉が受けて立つ！」

右腕に込めた力を前に突き出し、飛び込んでくる二人のエグゼイドに向ける。

「はあっ!!」

激突するふたつの力。

観戦するために下がっていた十六夜たちにすら及ぶ余波をたたき出した技の重なり

は、しかし。

僅かな間の拮抗を保つとすぐさま崩れ去り、一瞬後にはエグゼイドと白夜叉の一撃が

ぶつかりあつた場所を中心に爆発が起きた。

『ガツシューーン』

「——ッ、ぐあ!?! ……そんな……ことって!」

ガシャットが取り出され、変身が解けた永夢が爆発の中から吹き飛ばされてきた。

二人いたはずのエグゼイドは永夢一人に戻っており、飛ばされてくる際に二人にわかれたときと似た粒子が永夢の中へと入り込んだのだが、それに気づいた者はこの場には誰一人としていなかった。

そして、変身の解けた生身の永夢が睨み、観戦していた四人の視線を一点に集める、爆風に包まれた中心部。

爆風が晴れると共に、そこには両手を突き出した状態の白夜叉が無傷で立っていた——

下されたResult

白夜叉とエグゼイドの勝負は最終局面に移り、二人のエグゼイドの必殺技と白夜叉の一撃が互いに繰り出された。

エグゼイド——永夢は変身が解け、白夜叉との攻防に押し負けたのだろうか、いくつも傷を作りながらも白夜叉と撃ち合った場所を睨んでいる。

対する白夜叉は、無傷のまま両手を突き出した状態で永夢を見ていた。

「これは……」

観戦していた誰かが、この光景を見てそう呟く。

当事者たる永夢は悔しそうに顔を歪めているが、しばらく両手を突き出したままにしていた白夜叉は自身の状況を見て一拍。

「やるではないか」

両手を下ろし、懐から扇子を取り出した彼女は、してやられたとばかりに笑い出した。突然のことに理解の追いつかない永夢に近寄る白夜叉は、先ほどまで彼を圧倒していたとは思えない細く白い腕を伸ばす。

そうして差し出された手を掴むと、とてもではないが生身では敵わない力で立たされ

る。

「……完敗です。いまの僕では、本気になってもたぶん勝てない」

「ほほう？　まるでいままでの戦いは本気ではなかったような言い方だが？」

「本気でしたよ。僕らは本気で挑んで、そして負けた」

「……………まあよい。そういうことにおいてやるかのお。第一、敗者が勝者の秘密を暴くなど、無粋にも程がある」

勝者？　と白夜又の言葉に永夢は首を捻るが、彼の中にいるパラドはゲームでの興奮が収まってきたのか、

（そういうえば、そういうルールだったな……勝負には負けたが試合には勝ったってことか……最初っから手加減されてた上に勝負に負けるのは気に入らないが、試合に負けなかっただけマシだ）

などと勝手な言い分を述べる。

しかしいまのパラドは若干拗ねているのだ。永夢と最高に楽しい協力プレーで遊べたのはいいが、相手を攻略しきれなかった事実があるのだから。

その感情は永夢にも伝わっており、彼の顔にも先ほどから悔しさが滲んでいる。

永夢もパラドも思い出したのだ。

『であれば、攻撃には右腕一本しか使わん。攻撃のために他を使わせたなら、それでそや

つの勝ちということでもいいであろう?』

ゲームを始める前に彼女が述べた言葉。

自分たちの勝利条件がひとつ増えた瞬間でもあった。

白夜叉の最後の格好。そしてエグゼイドと拮抗していたはずの力が一瞬にして押し勝った事実を見れば、わかることがある。白夜叉は、最後の最後で左手を使ったのだ。「いきなりおかしな格好になったかと思えば次は二人になりおつて。しかもなんじやあのメダルは! この箱庭に長くいるが、あんなものは初めて見たぞ」

「す、すいません」

軽快に話し出した白夜叉になぜか謝る永夢。

「怒ってはおらん。無論、ルール違反とも思っていない。おそらく、それらすべてをひっくるめてお主の力なのじやろう。非常に興味深いのは事実だがな」

「なら、よかったです……」

「暗い顔じゃな? 勝者ならもつと笑わんか。このわしのゲームをクリアしたのじやぞ?」

本当の意味でクリアしていたなら、確かに笑えただろう。

もちろん引きずるつもりは毛頭ないのだが、それでも久々のこの結果にはくるものがある。

「ゲームには勝ちましたけど、勝負には負けましたから」

「なんじや、思いの外負けず嫌いだったか。ならば次の機会にまた挑んでこい。納得できるまで、何度でもな。無論、ゲームごとの対価はもらうがの」

白夜叉の目が、こちらに走ってくる黒ウサギに向けられる。

まだ距離があるので視線が合うはずもないのだが、黒ウサギは視線が合ってたと後に語った。

「しかし、面白い力だ。それは先天性のものか?」

「いえ、これは後天的なもので……そもそも、ガシヤットを作った人が別にいますから」「なんと! 制作者が別に存在しているのか!? ほうほうほう、ぜひとも其奴には一度話を聞いてみたいものだ」

会ってから時間も経っていない関係だが、これまでの言動や黒ウサギからの扱いといい、白夜叉が問題児なのだろうと察している永夢は、自分と対立し、そして協力し合う存在になった一人の男を思い浮かべる。

(絶対ロクなことにならない……)

彼は自身の中で思い浮かんだ想像を振り払い、話を続ける。

「あの人は自慢気に語ってくれると思いますよ。それよりも、次は必ず僕たちが勝つてみせますからね」

「大きくでたものだ。だが、嫌いではないぞ。今回のゲームの賞品はまたおいしいの。なにか欲しいものがあれが訪ねてこい」

このとき、未知の力を持つ永夢と話すばかりで白夜又は特に注意して彼の話を聞くことはなかった。

永夢の一人称が変わっていることには、終ぞ誰も突っ込むことはなかった。

その後は十六夜たちも合流し、あの変な格好はなんだの、二人に分裂できるかだのと質問責めに合う永夢だったが、すべてを説明していると時間が足りないと言い張り、すべてを語ることはなかった。

それでも、これから共にいる仲間たちに対して、自分がゲーマドライバーとガシャットによって先ほどの戦士に変身することだけは伝えることができた。

「あら、それなら貴方からそれを借りれば私でも使えるのかしら？」

永夢が握るガシャットを指しながら訪ねる飛鳥。

「十六夜くんにも言ったけど、これはそんな簡単に使えるものじゃないよ。適正だつてあるし、僕じゃないと満足に使えないものだつてある」

「……そう。それは残念ね」

「私も先生みたいに遊んでみたかったかも」

もつとも、そんな話をするものだから、興味を持った問題児たちの期待の目を受ける

ことになるのだが、十六夜が前に同じ質問をしていたせいか、彼のときほど慌てることなく答えることができた。

「そういや、お医者さんのギフトって結局なんなんだ？」

「わしも確認していなかったな。ゲームが終わったらと約束していたろ？ うん？」

続いて第二波のように迫ってきた十六夜と白夜叉。

だが、そのくらいならと素直にギフトカードを渡すのだった。

「なにに？ “永遠の救済”に——ハッ、まじかよお医者さん！ “天才ゲーマーM

”って、ギフトにまでなってるのか！ あんた本当に最高だな！」

「どちらも聞いたことのないものじゃな……まあ、あのふざけた成りをする者はいなかったから当然か」

「“永遠の救済”って、なんかすごい曖昧だよな」

「あら、いいんじゃないからしか？ 天才ゲーマーよりは医者って感じがするわ」

「確かに。でも、少し大袈裟？」

各々覗き込んで好き勝手な感想を述べていく問題児たち。

それを言うなら十六夜のギフトネームこそを弄るべきなのだが、どうにも、少年少女からしてみれば永夢は楽しく弄れる対象だったのだ。

このままゲーマー方面の話を開始しようかと思つた矢先、白夜叉から終了の言葉をも

たらされる。

「さて、では今日はこの辺りで終いじや」

楽しいものを見させてもらったぞ、と愉快に笑うと、周りの景色はゲーム盤から元いた和室へと戻っていた。

六人と一匹は暖簾の下げられた店前に移動し、耀は一礼した。

「今日はありがとう。また遊んでくれると嬉しい」

「あら、駄目よ春日部さん。次に挑戦するときは対等の条件で挑むのだもの」

「ああ。吐いた唾を飲み込むなんて格好付かねえからな。次は渾身の舞台上で挑むぜ」

「ふふ、よかろう。楽しみにしておけ。………とここで」

白夜又は真剣な顔で黒ウサギ達を見る。

「今さらだが、一つだけ聞かせてくれ。おんしらは自分達のコミュニティがどういう状況にあるか、よく理解しているか？」

「ああ、名前とか旗の話か？ それなら聞いたぜ」

「ならそれを取り戻すために、“魔王”と戦わねばならんことも？」

「聞いてるわよ」

「……………では、おんしらは全てを承知の上で黒ウサギのコミュニティに加入するのだな？」

「そうよ。打倒魔王だなんてカッコいいじゃない」

「カッコいい」で済む話ではないのだがのう……………全く、若さゆえのものなのか。無謀というか、勇敢というか。まあ、魔王がどういうものかはコミュニティに帰ればわかるだろう。それでも魔王と戦う事を望むというならば止めんが……………その娘二人。おんしらは確実に死ぬぞ。それに仮面戦士のおんしもだ。素質は認める。だが甘さも目立つ。遊び半分でゲームに臨むのであれば、死ぬぞ」

予言するように断言する白夜叉。

耀と飛鳥は一瞬だけ言い返そうと言葉を探したが、魔王と同じく“主催者権限”をもつ白夜叉の助言は、物を言わさぬ威圧感があった。

「打倒魔王の前に様々なギフトゲームに挑んで力を付けろ。今のままでは魔王のゲームを生き残れん。嵐に巻き込まれた虫が無様に弄ばれ死ぬ様は、いつ見ても悲しいものだ」

全員にそう告げる。

「だいじょうぶですよ」

だが、忠告された永夢は、静かな声音で告げた。

「貴方とのゲームは危険ではあつても、それまででした。だから僕たちはゲームで遊ぶことができた」

「だから、それが危険じゃと——」

「人の命がかかつてるのに遊べる人なんて、ドクターじゃない。僕は人の命を救うドクターです。人の命を弄ぶような奴相手に遊び半分で挑んだりはしません」

再度、より強い口調で言い聞かせようとした白夜叉が口を閉じる。

心配ないと、この若者は既に自分のことを理解していると安心したかのように。

「おんしはどうも、なにかを切り抜けてきた過去があると安心したかのように違うのは、その過去にあるやもしれん。あいわかった。ならばいまは、その言葉を信じよう」

「はい、ありがとうございます」

戦ったからこそわかること。

彼の言葉に込められた想いは本物だと、そう思えた。

「ご忠告どうも。だがな、次はお前の本気のゲームに挑みに行くから、その時にでも改めて評価してもらおうか！」

最後に、十六夜が軽い口調で、されど本気の目をして宣言する。

それにつられるように白夜叉も笑みを浮かべ、思いついたとばかりに答える。

「ふふ、望むところだ。私は三三四五外門に本拠を構えておる。いつでも遊びに來い。………ただし、黒ウサギをチップに賭けてもらうがの」

「嫌です!」

「その条件呑んだ!」

「呑みません!!」

黒ウサギは即答で返す。対して白夜又は拗ねたように唇を尖らせる。

「つれない事を言うなよう。私のコミュニティに所属すれば生涯を遊んで暮らせると保証するぞ? 三食首輪付きの個室も用意するし」

「三食首輪付きつてソレもう明らかにペット扱いですから!」

「その手があった。これなら簡単に勝負を挑める」

「だな。じゃあ俺がいい感じの樹を切り倒してくるから、春日部は小屋の設計図と首輪の調達を頼む。お医者さんは黒ウサギのストレスがたまらないように相手をしてやってくれ」

「うん。あとは——」

「なんの話をしてるんですかこの問題児様方ああああああ!!!」

十六夜と耀、永夢は三人揃ってハリセンを叩きつけられた。

「ちよっと!? 僕はなにも言ってますんよね!」

怒る黒ウサギ。笑う白夜又には十六夜と耀。巻き込まれたことを嘆く永夢。店を出た五人と一匹は無愛想な女性店員に見送られて”サウザンドアイズ”を後にした。

帰り道では男性陣と女性陣にわかれて話が盛り上がっており、

「そういうやお医者さんは、その力を使ってなにをしてたんだ？」

「なにをつて？」

「あん？ だからよ、もとの世界ではなにをしてたのかなーつて。強力な力を持つと苦労しないか？」

ゲームの話をしていた十六夜が一転、そんなことを訊いてくる。

「え？ あー……どうだろう。力と向き合うことも必要だけど、僕たちドクターはみんな、患者や命と向き合ってきたんだ。僕はただ、医者として患者の命を救って、患者の笑顔を取り戻したい。そうやって、進んできただけだよ」

心が折れそうなとき。迷ったとき。大変なときに気づかせてくれた人たちのおかげだけだね。

と永夢は続けた。

「……そうか。少しだけお医者さんの世界に興味がわいてきた」

仲間のことや、これまでのことを思い出したのか、嬉しそうな永夢から解答を受け取った十六夜は、どこか羨ましそうな視線を彼に向けていた。

固まるDecide

白夜叉とのゲームを終えて、五人は半刻ほど歩いた後、”ノーネーム”の居住区画の門前に着いた。門を見上げると、旗が掲げてあった名残のようなものが見える。

「この中が我々のコミュニティでございます。しかし本拠の館は入口から更に歩かねばならないので御容赦ください。この近辺はまだ戦いの名残がありますので………」

「丁度いい。これから戦ってく相手がどの程度なのか見ときたいな」

「その通りよ。箱庭最悪の天災が残した傷跡、見せてもらおうかしら」

先ほどの一件から、飛鳥の機嫌は悪い。プライドの高い彼女にしてみれば、虫のように見下されたという事実が気に食わなかったのだろう。

黒ウサギは躊躇いながらも門を開ける。すると門の向こうから乾つきつた風が吹き抜ける。

砂塵が舞い、四人は顔を庇う。視界には、一面の廃墟が広がっていた。

「っ、これは………!?!」

街並みに刻まれた傷跡を見た飛鳥と耀は息を呑む。十六夜はスツと目を細め、木造の廃墟に歩み寄り囲いの残骸を手にとる。

少し握ると、木材は乾いた音と共に崩れていった。

「……………おい、黒ウサギ。魔王のギフトゲームがあつたのは——今から何百年前の話だ？」

「僅か三年前でございます」

「ハッ、そりや面白いな。いやマジで面白いぞ。この風化しきつた街並みが三年前だと？」

十六夜の言う通り”ノーネーム”のコミュニティはまるで何百年という時間経過で滅んだように崩れ去っていた。とてもではないが三年前まで人が住み賑わっていたとは思えない有様だった。

「……………断言するぜ。どんな力がぶつかつても、こんな壊れ方はない。この木造の崩れ方なんて、膨大な時間をかけて自然崩壊したようにしか見えない」

十六夜はあり得ないと結論付けながらも、目の前の廃墟に心地いい冷や汗を流している。

飛鳥と耀も廃墟を見て複雑そうに感想を述べた。

「ベランダのテーブルにティーセットがそのまま出ているわ。これじゃまるで、生活していた人間がふと消えたみたいじゃない」

「……………生き物の気配が全くない。整備されなくなった人家なのに獣がやってこないな

んて」

二人の感想は十六夜の声よりも遥かに重い。

「人の生きていた痕跡……こんなにも簡単に、人の命を奪っていいはずがない」

（これは俺たちにもできることじゃない。相当のバカがやっただらうな……命の本当の意味を理解してない奴が！）

静かに、そして激しく怒りを募らせる永夢とパラド。

こんな有様は、彼らの世界ですら見たことがない。見たことはないが、それでも確かにわかることはある。

こんなことをするのは、自分たちの世界でも好き勝手にしてくれたパンデミックをもたらしたラスボスとそう変わらない相手であろうことが。

程度の差はあれ、彼と思考回路の似通っている人物だろうと。

（永夢、わかってるよな。俺の言いたいこと）

（わかっているさ。いま僕らがどれだけ怒っても、悲しんだところで過去は変えられない。だから僕たちは、残った人たちの笑顔を守らないと）

（だいじょうぶそうだな。なら行きますか。宝生先生）

（先生だなんて。僕はまだ、自分のなるべき答えを探してる研修医だよ）

思い浮かぶのは、最終決戦の少し前。

再び集まった仲間たちの間でおこなわれた問答。

（ああ、レーザーたちに問われたあれの答えか。まだ見つからないのか？）

（大事なことからだね。あのときの問いに答えられるようになって初めて、僕は一人前のドクターになれるんだと思う）

永夢とパラドが話し合っている中、黒ウサギたちは廃墟から目を逸らし街路を進む。

「……………魔王とのゲームはそれほど未知の戦いだだったのでございます。彼らがこの土地を取り上げなかったのは魔王としての力の誇示と、一種の見せしめでしょう。彼らは力を持つ人間が現れると遊び心でゲームを挑み、二度と逆らえないよう屈服させます。僅かに残った仲間達もみんな心を折られ……………コミユニティから、箱庭から去って行きました」

黒ウサギは感情を殺した瞳で風化した街を進む。飛鳥も、耀も、複雑な表情で続く。

しかし十六夜だけは瞳を爛々と輝かせ、不敵に笑っていた。

「魔王——か。ハッ、いいぜいいぜいいなオイ。想像以上に面白そうじゃねえか……………！」

面白そう。

まるで戦うことを望み、力を振るうことを楽しいと言わんばかりの十六夜の言葉に永夢はかすかな反応を示した。

僅かに大きくなる鼓動。

永夢には十六夜の姿が危うく見えてしまうのはなぜだろうか。

言葉にも、理解もできない感情が永夢を揺さぶるが、それを無理やり押さえ込み、黒ウサギたちの後に続いた。

五人と一匹が廃墟を抜けると、徐々に外観が整った空き家が立ち並ぶ場所に出た。五人は水樹の苗を貯水池に設置するのを見に行く。そこには先客がいた。

「あ、みなさん！ 水路と貯水池の準備は調っています！」

「ご苦労様ですジン坊ちゃん♪ 皆も掃除を手伝ってましたか？」

黒ウサギへと子供達が騒ぎながら群がっていく。

近くに掃除道具があるのを見る限り、真面目に掃除をしていたのだろう。

「黒ウサのねーりゃんお帰り！」

「眠たいけど掃除手伝ったよ！」

「ねえねえ、新しい人達って誰!？」

「強い!?! カッコいい!?!」

「YES! とても強くて可愛い人達ですよ! 皆に紹介するから一列に並んでください」

いね」

一人面白い姿になる人もいますが……とは心の中でだけ付け足し、パチン、と黒ウサギが指を鳴らす。すると子供達は一糸乱れぬ動きで横一列に並ぶ。

数は二十人前後だろう。中には猫耳や狐耳の少年少女もいた。

(マジでガキばかりだな。半分は人間以外のガキか?)

(じ、実際に目の前にすると想像以上に多いわ。これで六分の一ですって?)

(………。私、子供嫌いなのに大丈夫かなあ)

(こどもばかりだね。でも、みんな元氣そうだ)

(状況は聞いていた通りだが、そこで暮らす奴らは笑顔を忘れてないわけか。いいじゃないか)

五人は各々の感想を心の中で抱く。

永夢とパラドは互いに意見を述べながら話しているのどちらかというと彼らで一人ではあるのだが。

この後、黒ウサギにより四人は紹介されたり、水樹の苗の紐を解いた際に十六夜がずぶ濡れになりかけたりした。

こどもたちの笑顔や、年相応の反応を見せる十六夜のそんな様子を、永夢は楽しそうに眺めていた。

屋敷に着いたころにはすでに夜中になっていた。

いまは風呂に入りたいという女性陣の要望の下、大浴場の掃除が終わるのを待っているところだった。

「しっかし、一目から面白いものだらけだったな」

「僕としては、生身で強いみんなが不思議で仕方ないけどね」

もちろん、元の世界にも生身で戦える人間は少なからずいた。彼らは皆仮面ライダーであったが、それでも確かに多くの怪人と生身でも戦えていた。

けれど、十六夜ほどの強さを見たのは初めてだ。あれほどの力を生身で有しているなど、永夢やパラドからは想像もできない。

出会ってきた彼らは皆、信念の強さや正義感、長い特訓を経て戦えていたはず。

であれば、十六夜たち三人の力はいったいなんなのだろう。

「あら、私からしたら姿を変えられる方が不思議だわ」

「うん、私もそう思う。先生はちよっとおかしい」

だが、飛鳥や耀からしてみれば自分たちの常識が通用しないのは永夢の方であり、まさかのおかしい認定をされてしまった。

「まあ確かに変なのはお医者さんもだよな。俺からしたらゲームで力を得るとかありえねえって。でも、だからこそ世界は面白いよな」

もちろん永夢がおかしいと思っっているのは十六夜もであり、問題児に揃って同じ認識を持たれた瞬間だった。

人として規格外なのはどう見ても十六夜たち三人なのだが、どうにも彼らの常識と永夢の常識はズレている。もつとも、互いに自分の境遇や辿ってきた過去を話してはいないのでズレが生じているこの光景こそが普通なのだが。

まだ訊きたいことがあるのか、飛鳥が口を開きかけたとき、廊下から黒ウサギの声がした。

「ゆ、湯殿の用意ができました！ 女性さま方からどうぞー！」

「ありがと。先に入らせてもらおうわよ、十六夜くん、永夢さん」

「俺は二番風呂が好きな男だから特に問題はねえよ」

「僕もだいじょうぶだよ。ごゆっくり」

女性三人を見送った永夢たちはそのまま貴賓室でくつろぐことになり。

「なあ、お医者さん」

「なに？」

「さっきの……ガシヤットだっけ？ あれ、見せてくれねえか？」

二人きりになった十六夜は、永夢に頼むと、彼は要望通りにいくつかのガシャットを取り出した。

「マイティアクションXにゲキトツロボッツ、シャカリキスポーツ。それで白夜叉のときに使ったマイティブラザーズXX……ダメだ、やっぱりひとつも知らねえな。ゲームは割とやってきた方だと思ってたんだが」

「そっか……僕たちの世界だとこの辺りは主流なんだけどね。やっぱり、十六夜くんたちの力と僕たちの扱うガシャットの力は完全に別物だと思う」

「俺もそれには同意見だ。でなきや説明がつかねえしな。あー、お医者さんの世界やっぱり一度行ってみてえな——なんてロクに話している時間もねえか。悪いなお医者さん。ちよつと散歩行ってくるわ」

見ていたガシャットを返し、永夢の返事も待たずに貴賓室から出ていく十六夜。「散歩って、この辺りのことならこれから見ればいいのに」

返されたガシャットと出ていった十六夜を交互に見ながら、散歩程度ならと十六夜を追いかけることはなかった。

（僕が持つてこれたのはこれに加えてあとふたつのガシャットだけ。これでみんなと協力しながら元の世界に帰るまでやっていけるのかな？）

（なんだよ永夢。おまえには俺もいるじゃないか）

(パラド……)

改めて確認した自分の保有ガシヤットを眺めながら考え出してしまおう。
今日の白夜叉との一戦。

手加減に手加減を重ねられた状態での敗北。

「もしあのとき、マキシマムマイティXを使つてたとして、勝てたかな」

(………俺も同時にパーフェクトノックアウトで変身していたとしても結果はわからなかつた)

永夢の言葉に、強がりも交えてパラドは答える。

自分たちの有する最強レベルで挑んでも、その勝敗は恐らく……。

「この先なにがあるかわからない。でも、勝たないと」

冷静になつて考えだせば、戦つた彼女の強さがよくわかる。あのレベルの相手と戦う

ことは滅多にないだろうが、決してないとも言切れない。

ここには頼つていい、頼つてきた仲間はいない。

「それでも、僕がみんなの笑顔を守らないと」

ある事件で共に戦つた仲間たち。心の通じ合った大切な友人たち。

彼らから教えられた。

彼らがいいたから、きつと最後まで戦い抜けた。

だからこそ——。

『変身出来るか出来ないかなんて関係ない!』

『変身出来なくても、俺は仮面ライダーダードライブだ!』

彼らの言葉が、自分を最後まで奮い立たせる。

「強さなんて、レベルなんて関係ない。僕はただ、患者と向き合っていく。ここで生きる人たちの笑顔を守り抜く。取り戻す。そのために」

きつと、この箱庭の世界に来てしまったのは偶然なんかじゃない。

伸ばされた手を、掴めるはずの・手があったから。

(だから僕はこの世界に呼ばれたんだ。僕でも掴める手があるなら、無視できない)

(俺たち、だろ?)

(ああ。これからも頼りにしてるよ、パラド)

(任せておけよ、永夢)

黒ウサギたち“ノーネーム”や自分たちの現状を改めて確認した永夢とパラドは決意を固め直し、そして心の中で、確かに拳を重ねあった。

(だいじょうぶだ、永夢。俺はおまえ。おまえは俺。もしものときは、俺がいる)

永夢にすら届かないほど静かで、そして小さな声が、彼の中で溶けて消えていった。

MのためのParadox

箱庭の世界に来てから、一日が経過した。

永夢とパラドは決意を新たにしてから女性陣と入れ替わりで風呂を済ませ、まとめるレポートや夜間の緊急通報に備えることもなく、久々にゆつくり眠ることになった。

眠る前に会った十六夜はやけに満足した顔をしていたが、楽しいことでもあったのだろうか？

なんて疑問が浮かぶ前に、永夢の意識は夢の中へと落ちていった。

「おい、起きろ永夢」

「ん……あと五分……あと五分で・クリアだから……」

「なんで一人でゲームやってるんだよ！ 夢とはいえ、やるなら俺も混ぜろ！」

そんな永夢は、現在パラドによって起こされようとしていた。

しかし、どうも寝言から推測するに、彼は夢の中でもゲームをしているらしく、一人でプレイして楽しんでるのをパラドが恨めしそうにしている。

「永夢、今日はあいつらのギフトゲームだから行かないとまずいんだろ？ さっさと起きろって」

「……ギフト、ゲーム？」

揺さぶっていると、やつのことで薄眼を開けた永夢。

次の瞬間には寝ぼけながらつぶやいた言葉を意識したのか、勢いよく上半身を起き上がらせた。

「ギフトゲーム！」

「やっとお目覚めか……」

「あれ、パラド？ どうしたの？」

額に手を当てて永夢の寝ていたベッドに座り込む様子に疑問を浮かべた永夢。当然、彼がいままで自分を起こそうとしていたことなど知るはずもなく。パラドを通して伝わって来る呆れだけがやけに痛く感じた。

「起きたのならない。それよりいいのか。あいつらが待つてるんじゃないか？」

「そ、そうだ！ 急いで行かないとってっ!? いっつう……」

起き上がってすぐに駆け出そうとするが、なにもないところで躓き転げてしまう。

「慌てて出て行く前に、白衣くらい羽織ったらどうだ」

「忘れてた……」

「しっかりしてくれよ。ここにはいつもみたいレーザーやブレイブはいないんだからな」

「……—わかっている。さあ、行こうかパラド」

どことなく頼りない永夢に珍しくため息を吐いたパラドは、それでも笑顔を向けると立ち上がった永夢の拳に自分の拳をぶつけた。

「つたく。おまえは俺が見ててやらないとな。がんばれよ、永夢」

パラドはそれだけ言い残すと、粒子となって永夢の中へと消えていった。

「ありがとう、パラド」

仲間のいない世界に来てしまったことを悔やんでも始まらない。だが、実際にいないと実感させられるとどこか心が痛む。けれど、パラドがいる。まだ彼は一人じゃないと、一人にはならないと教えてくれる。

かけてあった白衣をまとい、側に置いてあった手持ちのガシヤットとゲームドライブバーも手に取る。

どういうわけかこのふたつは永夢のギフトとして作用しているのでギフトカードにしまえないこともないのだが、長らく持ち歩いていたせいも、ギフトカードにしまっても持っていた方がしっくり来るのだ。

そうして準備を終え、彼はやつとのことで自室を後にした。

「それにしても、お医者さんが寝坊とはねえ」

「ご、ごめん。なんか気が抜けちゃって」

飛鳥と耀、それにジンがギフトゲームに挑むため、フォレス・ガロのコミュニティの居住区を訪れる道中。

やつのことで自室から出てきた永夢はいま集まっているメンバーで最後に集まったこともあり、そこを十六夜に弄られていた。

「あら、気が抜けたって、永夢さんは今日ゲームがあることを忘れていたのかしら？」
「私たちは参加するのに」

そこに飛鳥と耀も参戦してくるものだから、彼も大変である。

「自覚が足りない、と元の世界でなら呆れられながら怒られていたところだが、こちらの世界だと自分より小さな子たちにいいように扱われてしまう。」

一人ではなく三人からなのがまた苦勞するのだが。

（あ、明日からは絶対に早く起きよう）

（永夢、それたぶんフラグだぞ）

心の中ではそんなやりとりをしつつ、黒ウサギとジンから同類を見る目で見られてることも知らずに進む永夢だった。

それからしばらく歩くと、目的の居住区が見えてきた。

六人が一斉に視線を向けると、全員が微妙な反応を示す。それもそのはず。

居住区が森のように豹変していたからだ。

正面まで来て、ツタの絡む門をさすり、鬱蒼と生い茂る木々を見上げて耀がつぶやく。

「……ジャングル？」

「虎の住むコミュニティだしな。むしろ妥当だろ」

「いえ、フォレス・ガロのコミュニティの本拠は普通の居住区だったはず……それにこの木々はまさか」

ジンがそつと木々に手を伸ばす。その樹木はまるで生き物のように脈を打ち、肌を通して胎動のようなものを感じさせた。

「やっぱり、鬼化している？ いや、まさか」

「フィールドが書き換えられているってことかな。相手がゲームマスターならそれくらいのことは普通だと思うけど」

自分たちが頻繁にステージセレクトでゲームエリアを書き換えていた都合か、永夢にはこの事態を特に重く受け止めてはいない。むしろ、相手に有利なエリアで戦うことは相手がゲームマスターであるのなら普通なのではとさえ思ってしまった。もちろん、なにかしらの打開策があるだろうという前提なのだ。

「みんな、ここに契約書類が貼ってあるわよ」

飛鳥の声に、全員が門柱に貼られた羊皮紙の前に集まっていく。そこには、今回のゲームの内容が記されていた。

「なんだって？」

「ガルドの身をクリア条件に……………指定武器で打倒!？」

「これはまずいです！」

ジンと黒ウサギが悲鳴のような声を上げる。

「このゲーム、そんなに危険なの？」

飛鳥が心配そうに問う。

「いえ、ゲームそのものは単純です。問題はルールの方で……………このルールでは、飛鳥さんのギフトで彼を操ることも、耀さんのギフトで傷つけることもできないことになりました」

「……………どういふこと？」

「“恩恵”ではなく“契約”によってその身を守っているのです。これでは神格でも手が出せません！ 彼は自分の命をクリア条件に組み込む事で、御二人の力を克服したのです！」

「すいません、僕の落ち度でした。初めに“契約書類”を作った時にルールもその場で

決めておけばよかったのに………!!」

ジンはギフトゲームに参加したのは今回が初めてであり、ルールが白紙のギフトゲームに参加することが如何に愚かなことであるかわかっていなかった。

「敵は命がけで五分に持ち込んだってことか。観客にしてみれば面白くていいけどな」
「でも、危険は格段に増えたことになる……」

十六夜の軽薄な台詞と、永夢の自分たちを心配しかしていない台詞に、飛鳥と耀はやる気を出していた。

元より勝つ気である二人にとって、このくらいのハンデは相手のプライドを壊すのに好都合とさえ考えている。

「貴方たちはそこで吉報を待つてなさい」

「じゃあ、行ってきます。先生も、あんまり心配ばかりするのはよくない」

「そう、だね。わかった、信じて待つよ。三人とも、気をつけて」

永夢の言葉に頷いた参加者三人は、門を開けて突入していった。

三人が突入してしばらく経ったころ、門前で待っていた黒ウサギ、十六夜、永夢の元

に、獣の咆哮が届いた。

「なんだか面白そうなことになってるみたいじゃねえか。見に行ったらまずいのか？」

そろそろこのつまらない状況に飽きてきていた十六夜が黒ウサギに聞く。

「お金をとって観客を招くギフトゲームもありますが、最初の取り決めのない限りはダメです」

「なんだよつまらねんな。審判権限とそのお付きつてことでいいじゃねえか」

「だからダメなのですよ。ウサギの素敵耳は、どこからでも大まかな状況がわかってしまします。状況が把握できないような隔絶空間でもない限り、侵入は禁止です」

「……………貴種のウサギさん、マジ使えね」

「せめて聞こえないように言ってください！ 本気でき——」

「お医者さんはどうだ？ お嬢さまたちの様子がわかったりとかしないか？」

黒ウサギを無視し、隣にいる永夢へと話しかける。

「無理だよ。生身の状態じゃ普通のひとほとんど変わらなし、変身していたとしても様子までは探れない」

「そうか。まあいい、詳しいことは御チビに聞けばいいしな」

「話の途中で無視は酷くないですか!？」

二人して談笑する中、黒ウサギの悲痛な声が門前から響いた。

余談だが、この叫び声はギフトゲーム中の三人の耳にも届いたとか。

そうしている間にも、ゲーム終了の合図のように、木々が一齐に霧散していった。

ゲーム終了後、黒ウサギは三人の元に一目散に走り出した。彼女を追うように十六夜が追隨する。その更に後ろを、レベル1の状態のエグゼイドがなんとか付いて行つてた。

と言うのも、十六夜と黒ウサギは元の身体能力が高くそのまま走っていくのに対し、永夢は一度変身をおこなうまでの僅かなタイムラグがあつたのだ。もつとも、いくら俊敏な動きを見せていても、十六夜たちのスピードには追いつけないのだが。

「おい、そんなに急ぐ必要があるのか?」

「大ありです! 黒ウサギの聞き間違いでなければ、耀さんはかなりの重傷のはず……あつ!」

三人がジンたちの元に駆けつけると、すぐに耀が怪我を負っていることがうかがえた。右腕からの出血が酷いことから、傷跡もそれ相応のはずだ。

「ふ、ふたりとも速いって……って、耀ちゃん!」

遅れてやってきたエグゼイドは変身を解き、永夢として横たわる耀に駆け寄る。

「出血が酷い……このまま血が止まらなければ、出血性ショックの危険がある。それから呼吸不全を引き起こしたりしたら事だ」

「すぐコミュニケーションの工房に運びます。あそこなら治療器が揃ってますから！」

永夢の診断を受け、黒ウサギが大慌てで耀を抱きかかえようとする。

「待って、僕も行く」

「しかし、黒ウサギでは耀さんを抱えて永夢さんまでは連れて行けません！」

その通りだ。

彼を連れていくことによって、耀の扱いが雑になったりでもしたら意味がない。無理についていくべきではないのだ。

「だったら、僕が変身して黒ウサギの後を追えば」

「無理です！ 先ほどの永夢さんの速度では、黒ウサギには到底追いつけません」

「そんな……だ、だったら」

再びガシャットを手にした永夢は、即座にボタンを押す。

『MIGHTY ACTION X!!』

そして、スイッチを入れたことにより、永夢の周りには特殊な空間が展開され、所々にブロックやメダル型のアイテムが配置されていく。

「変身！」

ガシヤットをドライバーに挿入し、

『ガシヤット!』

ピンク色の戦士のパネルが正面に来たとき、右手を突き出してパネルを選択した。

『レッツゲーム! メツチャゲーム! ムツチャゲーム! ワツチャネーム! アイム

ア 仮面ライダー!!』

「さあ、頼むぞ!」

変身してすぐに近くのブロックを破壊し、エナジーアイテムを出現させる。

しかし。

「違う! ならこつちだ!」

お目当のメダルが出ないのでまたさらにブロックを破壊していくが……。

「これも違う! アイテムなし!? くそっ!」

いくら破壊しても望んでいるエナジーアイテムが出る気配がない。

「え、永夢さん! これ以上は待てないのですよ!」

「でも、ここで患者を見捨てることなんて俺にはできない!」

黒ウサギが耀を抱える。

自分の目の前で傷を負っている少女がいるのに、治すことも、付き添うこともすらできさない。

(それじゃダメなんだ……ッ！)

出てきたメダルに、望むものはない。このままでは間に合わない。

(おまえのやりたいことはわかった。人間を治すことは俺にはできないが、その手助けくらいは、俺がしてやる！)

彼の中で、もう一人の声が響く。

「パラド……？」

(変われ、永夢。おまえは俺が、連れていく)

意識を共有しているからこそどうするべきかを心得ているパラド。対して永夢も、その手があったかとパラドの案に乗ることを認めた。

『ガツシユーン』

変身を解き俯いた永夢の瞳が、一瞬赤く光る。

顔を上げた彼は笑みをひとつ作ると、懐から十六夜も見えていない青を基調としたガシャツトを取り出した。

ガシャツトギアデュアル。

2種類のゲームを内蔵した、大型のガシャツトである。

「世話が焼けるぜ。まあ、人間を助けるためなら、もちろん力を貸すけどな」

誰に言っているのか曖昧な発言をしながらも、ガシャツトに取り付けられたダイヤル

を回す。

『PERFECT PUZZLE!』

『What's the next stage?』

「変身」

これまでの永夢に比べて静かな声でガシャットの起動スイッチを押す。

周辺にエナジーアイテムが拡散され、永夢の前に現れたゲートが彼を通過していく。

『デュアルアップ!』

『Get the glory in the chain. PERFECT PUZZLE!』

ゲームドライバーを使用せずに変身してみせた永夢は、これまでと違い、青い仮面ライダーへと姿を変えた。

「さあ、時間もないしどんどん行くぜ」

彼が両手を掲げると、どこからともなくエナジーアイテムを出現させ、まるでパズルゲームをするように縦横にいくつもエナジーアイテムを並べると、幾度となく組み合わせを探るように移動させ始めた。

「やりたかったのは、これだよな!」

やがて組み合わせを見つけたのか、みつつのエナジーアイテムを使用する。

『高速化』『高速化』『高速化』

「よし、これで準備は整った。おい黒ウサギ、さっさと移動を始めるぞ」

「は、はい？ だいじょうぶなんですか!？」

「早くしろつて。これで間に合わなかつたら意味ないだろ」

「わ、わかりました!」

永夢の急変もさることながら突然のことに理解の追いつかない黒ウサギはそれでも耀を抱えて駆け出した。

「俺も行くか」

その後を追い抜かんとする速度で移動を始めた永夢。

(普段よりも更に速い……? いくら高速化の影響とはいえこれはなんだ?)

パラドはひとつの違和感を覚えながらも駆ける速度を緩めることなく、彼の速度は黒ウサギを追い抜き、本拠で彼女の到着を待つこととなった。

黒ウサギは泣いた。

Godの介入

暗い部屋の中。

まるで檻を模したように、電子の柵で囲われたその部屋の中では、カタカタ、カタカタと長時間に渡りキーボードのタップ音が響いていた。

「素晴らしい……」

キーボードを叩く音に混じりながら、ときたま男性の声が混じる。

「まさかこの短時間でまた新たなゲームを開発できてしまうとは……やはり私の才能は恐ろしい！ ブハハハハハハハハッ！」

真っ白なガシヤットを掲げ、狂ったように笑う男性は一転。

深く椅子に座り直し息を吐いた。

「ふう、しかしプレイヤーがいなければゲームだけでも無駄というもの。仕方ない、ここは最終調整が済み次第、永夢にでもプレイしてもらおうか。まったく、自由に動けないのも面倒なものだ」

愚痴をこぼしつつも最終調整に入り出した男性。

しかし、ひとつ奇妙な点がある。

この男、どういう理由か画面の中で動き回ったり声を発しているのだ。無論、映像作品を映しているわけではなく、ひとつの意識ある生命体として活動している。

そんな不思議な光景が流れている筐体に近づくと、アロハシャツの上に白衣を纏った男が一人。

「よう、檻の中は楽しいか？」

「……なにか用か、九条貴利矢。用がないのなら私のクリエイティブな時間の邪魔をしないでくれ」

「クリエイティブねえ。相変わらず楽しそうだな、おまえも」

「うるさいぞ九条貴利矢。用件があるのならさっさと話せ。無論、私が聞くかどうかは別問題だな」

悪党もかくやといった顔を見せながら、貴利矢と呼ばれた男に反応を見せる画面の中の男。

「いや、おまえに用とかねえから。こっちで情報の整理をしないといけなくなつたから、来たついでにおまえの様子を確認しただけだ。予想通りだったからもういいわ」

手を振り画面から離れると、少し距離をおいた先にある椅子に座り、資料を漁りだす貴利矢。

「私に対して予想通りだと？ 神であるこの私に向かってええええっ!!」

「あーはいはい、はいはい。また今度相手してやるからなー、神」

「九条貴利矢あああつっ!! 待て、待ちたまえ! せめてここに永夢を呼び出せ!」

神と名乗り、神と呼ばれた男の口から永夢の名前が出たことにより、やつとのことで彼の意識が再び画面へと戻る。

「永夢を?」

「その通りだ。彼には試してもらわなければならないゲームがある。理由がわかったのならさっさと呼ぶんだ」

「よくやるなおまえも。つてもなあ。永夢なら今日は午後になればここに来るはずだぜ?」

「んん、そうか。ならばそれまで待つとしよう」

聞き分けのいい神にひとつ頷いた貴利矢は、そうしとけ、と一言返し、視線を手元の資料へと戻した。

神もその様子を一瞥すると、騒いでいたのがウソのように作業に戻っていった。

一見すると仲のいい間柄のふざけたやり取りに見えるが、この二人に限ってはそういった間柄ではない。だが、互いに一定以上の理解を示しているのは確かであり、世間を騒がせた未曾有のパンデミックを食い止めてみせた際にそれなりの関係を保つようにはなった。

おかげで、パンデミック収束後も貴利矢はなにかとつけては神の様子を見に来ているのだ。もちろん、なにかあればすぐにでも神の身柄を衛生省へと差し出すために。

「九条貴利矢、もうとつくに昼の時間を過ぎたが、永夢はまだ来ないのか？」

そんな中、神が再度声をかける。

「そういやそうだな。昼終わりには立ち寄るかと思っただが……あいつが仕事をサボるわけないし、ゲーム病患者から連絡があったわけでもない。ちよいと妙だな」

神の指摘に、貴利矢も首をかしげる。昨日の予定では、この時間には永夢は一度戻ってきているはずなのだ。

「一度連絡を取ってみろ。時間は有限だ」

「おまえにまともな意見を出されるとなんかイラつくけど、仕方ない」

端末を操作して永夢に連絡を入れるが、

「——出ねえな。どこでなにやってんだよ永夢の奴」

一切の反応が返ってこないまま、通話が切れる。彼らの知っている宝生永夢からは信じられない状況だ。多少抜けたところはあるが、無責任な青年ではない。医療に対して、ドクターとしても確かな信念のある男だ。

「こども業務をほっぽりだして消えるとは考え難い。」

「永夢……」

「キミは永夢に甘すぎだ。一度連絡がつかなかったくらいで絶望したような顔を見せるな」

「んだと？ そんな顔してねえつつうの。心配には心配だが、永夢だつていつまでも半人前じゃない。しっかり成長してる」

そう言いつつも、立ち上がり辺りをうろろと歩き出す貴利矢にため息を吐きたくなる神。思えば、自分の攻撃からも永夢を守ったことがあったなと思いつきながら、やはり歩き回る貴利矢を見て、今度こそため息を吐くのだった。

「いまの永夢はハイパームテキも、ましてやマキシマムマイティXすら持つてないはずだ」

「だろうな。セーブ機能つけたまでは良かったが、まさかあの局面でハイパームテキが壊れるなど私ですら想定外だった。いまも修復を続けてはいるが、さすが私の最高傑作。そう簡単に直せはしないか。残りライフも少ないことで無理は効かないからな」

画面の中の神がハイパームテキと呼ばれるガシャットの半壊した状態のものを撫でる。

「制作者から言わせて貰えば、壊れるまで遊んで貰えたと言うのはとても誇らしいことだ。もつとも、これは遊びなどではなかったが」

独り言のようにつぶやく神は、ハイパームテキを専用の機器に取り付ける。

その横には、大型のガシヤットがひとつ。

「こちらの修復は完了しているが、まさか一気にふたつも貴重なガシヤットを壊すなど、まったくたいしたものだ」

もともと傷があつただろう箇所は完璧に直されており、元の形を取り戻していた。

このガシヤットは永夢が長らく使用してきたもので、神自身も痛い目を見せられた代物だ。とはいえ、いまさらなのでもちろん直した。

神にとつてはそんな些細なことよりも修復できないという不可能がある方が問題なのだ。

「ひとまず、もうしばらく待つてみるべきだろう。永夢が常に通話できる状態とは限らないのだし、気づけば向こうからかけてくるはずだ」

「そう、だな。待つてみるか」

やつとのことで貴利矢を座らせた神は、満足そうに頷く。

「それでいい。これで静かに作業ができる」

「はっ、そうかよ」

吐き捨てるように応える貴利矢だが、表情までは伴っていない。

互いに違う信念を持ち、時には命を奪い合った彼らだが、相性は決して悪くないのかもしれない。

「た、大変大変！ もうピブペパニックだよぉ!!」

静かに作業を続ける二人の元に、明るくも戸惑う女性の声が届く。

二人が目を合わせてすぐ、ピンクの髪にカラフルな衣装を身にまとった女性が駆け入ってきた。

「もう大変！ これ見て！」

貴利矢と神が見えるように女性が掲げた物は、

「これ見て！ 永夢のIDカード！」

「なに!？」

普段永夢や貴利矢が白衣の胸ポケットに付けている自分たちのIDカードとストラップだった。

「おいこれどうした!？」

「お、落ちてたの。永夢に伝え忘れたことがあったから、あとを追いかけたんだけど……そしたらこれが落ちてて、でもバグスターの報告も、ゲーム病患者の人から連絡もないの！」

「おいおいおいおい、どうなってんだよ！」

「落ち着け、九条貴利矢。ポッピー、永夢に連絡はしたのかい？」

「う、うん。でも繋がらなくて……」

突然入ってきた女性——ポツピーと貴利矢の会話に参加した神は、ふむ、と顎に手を当てて考え出す。

「黎斗、どうにかならない?」

「本来なら私のクリエイトイブな時間なのだが、ポツピーに言われては仕方がない。少しばかり神の力を見せてやろう!」

神——黎斗と呼ばれた画面の中の男は、どうしたものかと可能な限りの策を書き出していく。

「ところでポツピー、パラドはどうした?」

黎斗が書き連ねながら尋ねるが、彼女は首を横に振り、

「パラドもないの。たぶん、永夢と一緒に……」

「つてことは、あいつ一人探し出せればぜんぶ解決つてわけだ」

「永夢、どこに行っちゃったんだろ……」

「面倒事に巻き込まれてなきやいいんだけどな」

ポツピーと貴利矢。

二人とも永夢には特別強い思いがあるばかりか、時折危うい行動を取る彼のこと配でならない。

どうしてもな状況か、危険でない状況ならば自分たちも共についていくなりしていく

こともできるが、今回はそんな暇すらなく彼の行方がわからなくなってしまった。

正直に言つて、前代未聞な事件である。

「ねえ黎斗！ 永夢を探せないの!?!」

静かに目を閉じていた黎斗がポツピーの声に片目を開くが、またすぐに閉じてしまう。

「もう、黎斗!」

いままで永夢との連絡が途絶えることも、彼が自分の意思で医者としての義務を投げ出すことはなかった。だからこそ、なにかが起きたという予感がしてならない。

近くで見えてきたからこそわかるのだ。彼は患者がいれば必ず見捨てない。患者のためならばなんだつてしてきた。

「永夢、おまえいつたいなにに巻込まれたつてんだ……」

「と、とりあえずみんなに連絡しないと!」

ポツピーがCRを出て行こうとしたそのときだ。

「いや、少し待つんだ」

両目をカッ、と開いた黎斗が、大げさに両手を広げて話始めた。

「私は永夢や九条貴利矢の持つガシャットにセーブ機能を付け足したな?」

「ああ、それがなんだよ」

「セーブ機能はクロノスのリセットに対抗したもののだが、その後もガシャットを使用するたびに自動でセーブは行われる。あれは一度エナジーアイテムとして使用したが最後、いつリセットされても対抗できるようにと機能を増やしておいたのさ！」

「おま、そんな設定にしてたのかよ！」

聞かされていなかった機能の説明を受け、音量が上がる。

「だから壊れたハイパームテキも修復できてないのかよ」

「完全無欠だと思っていたからな。逐一セーブを行ってもだいじょうぶだと思いついてた。そこだけは私の誤算だったな。やはりゲームにバグはつきものか」

「つて、そんな話はどうでもいいの！ なにか思いついたんでしょ、黎斗！」

貴利矢と黎斗の話は始まると長いので強引に話を切り、本題に戻る。

「ああ。もつとも、これは永夢に依存してもいるのだが、彼が一度でもエグゼイドに変身していればその状況がセーブされる。そして、セーブされた情報は私の手元でも確認ができるというわけさ」

「えつと、つまり？」

「つまり、永夢がどこにいるのかすらも私にはわかるといふことさあ！ そしてえ！

永夢は既にエグゼイドに変身していることがわかった！ つまり永夢がいまいる場所

は——どこだ(ハハ)は!？」

「いやわからねえのかよ神！」

「わからないのではない！ こんな場所、私は知らないだけだアツ！ ハア……なんだこれは。新しい、ゲームか？」

状況の飲み込みができていない貴利矢たちのために、黎斗が見ている画面をそちらに向ける。

永夢——エグゼイドのセーブデータには、彼らもまるで知らないゲーム開始画面が現れていた。

「箱、庭……？ ねえ、黎斗。もしかしてこの中に永夢が？」

「信じられないが、この私もまるで知らない謎のゲームの中から永夢のセーブデータが送られてきている。つまり、この箱庭というゲームのゲーム世界を辿っていけば彼もいるのだろうか……」

「だったら、私が行って見て来るよ！」

「危険だ！」

ポッピーの申し出にそう返す黎斗。

彼からしてみれば、ポッピーは唯一氣遣うべき相手。個人的な意見が先に出てしまうのだろう。

このままだと言い合いになるのは必至。

「なら、自分が行って永夢に会ってくる。そうすれば解決つてわけだ」

「……よく言ってくれた、九条貴利矢。キミになら任せられる」

「ちよつと黎斗？」

ポツピーがなにか言いたそうに二人に交互に視線を向けるが軽くスルーして、準備を整えていく。

黎斗はハイパームテキの横に置かれていたガシヤットを貴利矢へと渡す。

「そつちはもう修復できている。持っていくといい。それと、これもだ」

続いて、ふたつのガシヤットを投げてよこした。

「なんだ、大判振る舞いじゃないの」

「仕方がないだろう。これから行くのは未知のゲーム。なにより、永夢は私のゲームの貴重なプレイヤーだ。ゲームマスターとして、プレイヤーを放っておくわけにはいかな
いからな」

「ふうん、そういうことにしといてやるか」

「第一、そのガシヤットのうちひとつはキミのものだ。神の恵みをありがたく受け取つていけ」

投げられたガシヤットのうちひとつをまじまじと見る貴利矢。珍しいこともあったものだ。

「中がどうなっているのかはさっぱりわからない。一応キミたちのセーブデータは逐一確認しておこう。これ以上想定外の事態が起これば私も動くことになるだろうが、ひとまずはキミに任せよう」

「……仕方ない、乗せられてやるよ」

画面の前に立った貴利矢は、受け取ったガシヤットと自らのゲーマドライバーを再度確認し、

「ちよつくら行ってくる。その間、こっちは任せませ」

「……………貴利矢、気をつけて。あと、永夢をお願いね」

「ああ、任せときな。じゃあな」

自身を粒子状に変えると、貴利矢は未知のゲームが表示されている画面の中へと消えていった。

「貴利矢、だいじょうぶかな？」

「問題ない。彼は私が認めてやらなくもない男だ。そうそうしないうちに、永夢を連れて戻って来るだろう」

「そう、かな。とりあえず、ありがとね黎斗」

ポッピーは黎斗に礼を述べると、他の仲間と連絡を取りにCRを出て行く。

そんな慌ただしい背中を見送った彼はいくつかの資料やモニターと向き合い、ハイ

パームテキの修復を始めるのだった。

「どいつもこいつも私のクリエイティブな時間を邪魔するとは……しかし、せつかく作ったゲームのプレイヤーがいけないのでは始まらない」

ついでに、彼らのセーブデータからどうにかして未知のゲームを解明しようと手を伸ばす。

「神に不可能はない……」

暗がりの中、彼の挑戦が始まる。

Hello 天才ゲーマーM

黒ウサギに追いつくために走り出した永夢は、気づけば黒ウサギを追い抜き彼女の到着を待つ程であった。

その後行われた治療行為については、実は永夢の出番はなく——というのも、工房にある治療用のギフトを使用することで治療を完了させてしまったのである。

しかも扱いが難しく、昨日ギフトの存在を知った永夢では到底扱いきれないものだった。

けれど、耀の怪我は確かに治った。

永夢やパラドからすれば、自分が手を出せないことよりも、一人の少女が助かったことこそがなによりも喜ばしい事実だったのだ。

「ところで永夢さん、先ほど話し方が変わっていた気がしたのですが……？」

治療行為を終え一息ついていた黒ウサギが、ベッドに寝る耀の寝顔を微笑ましそうに眺めていた永夢に問いかける。

戻ってくる直前、永夢の話し方はこれまでのものと違っていたのは事実だ。

「気のせいではないですよ」

永夢も、ここで隠すことはしない。

「あのときの僕は、僕であつて僕ではありません」

「どういうことでしょうか？」

「……僕は、一人ではありません。厳密には、僕の中にはもう一人の僕とも言うべき人がいるんです。さつきはその彼が力を貸してくれたからエナジーアイテムを取ることもできたんです」

その言葉を受け、永夢の中で話を聞いているパラドが笑顔を見せる。

だが、黒ウサギは対照的に心配そうに永夢を見つめていた。そして、彼の額に自分の手のひらを当てる。

「あの、黒ウサギ？」

「熱はないみたいですが……永夢さんは疲れているんでしょうか？ 医者の不養生はよくないと聞きますよ？」

「えつと……」

「まさか精神的に疲弊していただなんて。問題児さま方の相手で消耗していたのですね」

うんうん、と一人納得したように頷く黒ウサギ。

残念ながら、永夢の話は微塵も信じていない様子である。それどころか、昨日から

ずつと問題児たちの相手をしてきた黒ウサギは通じるものがあるとしても思ったのか、苦
労している永夢のためになろうと張り切りだす始末。

「ひとまず永夢さんもゆつくり休んでください。黒ウサギは十六夜さんたちの様子を確
認してきますので」

「え？ あ、ちよつと！」

止める暇もなく出かけて行ってしまうので誤解を解く暇もない。

結局、口調が変わった理由も、自分の秘密も説明できないまま話は終了することと
なった。

残された永夢は、出血が酷かったので増血の処置を施されぐつすりとする眠る耀の近くに
椅子を置き、そこに座りながらみんなが帰ってくるのを待つしかなかった。

「せつかちな奴だな、黒ウサギも」

彼女がいなくなったのを確認したのか、永夢の体から粒子が飛び出し、人の形を作っ
ていく。

「信じてもいなかったけどね」

「それもそうか。事情を知らなければ俺の存在を認めるのは難しいことだしな」

粒子は集まり、パラドへとなる。

「俺のしたこと、意味はあったのか？」

パラドは永夢の隣で寝込む耀を眺めながら独り言のように言葉を発する。

今回は、ただ黒ウサギについてきただけだ。永夢を送り届けただけだ。誰かを救えたとは言いがたい。ましてや必要あったのかと。そんな思いが、彼の中で例えようもないうねりとなる。

「パラドの力も、十分に人を救うための力になってるよ」

そんな彼に、永夢が話しかける。

思い出すのは、多くの仲間と共に戦ってきた日々。

最初は敵対していたパラド。

やっと知ることのできた彼の本当の正体。

自分たちの繋がりに。

パラドの意思。

「間違えてきたことだって、無意味なことじゃない。いまそう思っているのなら、必ず誰かを救えるさ」

「永夢……」

「第一、パラドはもう多くの人の危機を救ったじゃないか。あの二人が手を組んだことによつて起きた最悪のゲームを止めるために一緒に戦ってくれた。世界進出する直前のすべての計画を壊してくれたじゃないか」

あつてはならない二人の男の邂逅。

彼らが手を組んだことにより、永夢たちが終わらせるはずだったゲーム——「仮面ライダークロニクル」は、たった二人の男たちのせいで難易度が遥かに高まったのだ。

「エンディングに漕ぎ着けないと人間が消える。そう思っただけだ」

「思えることが大事なんだよ。パラド、人を思う気持ちがあるすべての行動を決めるときだつてある。そうして動いたときこそ、きつとおまえが自分の意思で人を守りたいと思つたときだ」

「仮面ライダークロニクル」のラスボスを抑え込むために、一時はその身をかけたパラドを、永夢はよく覚えている。

伝説の仮面ライダーとラスボスを一度に敵に回したあのととき。

CRのドクターでも、ゲームドライバーを所持しているわけでもない、けれど仮面ライダーとして人々を守ると言ってくれた人たちと共に挑んだ最終決戦。

全員で立ち向かつて、一撃の元に変身解除まで追い込まれた最中。

パラドが身を呈してなければ、きつとゲームクリアまで至れなかつただろう。

「これまでみんなと戦ってきたことも、今日のこと。意味がないなんてことは絶対にないんだ」

繋がっている二人だからこそ、互いの想いがすんなりと入ってくる。

自らの隠しようのない言葉が聞こえる。

「そうか。なら、俺はこの先も人間のためにこの力を使わないとな」

・薄い笑みを浮かばせながら自分のガシヤットを握るパラド。

「そういえば、あのとときの無茶でハイパームテキが壊れたんだよな」

声音に気力が戻り、笑いながら過去の話をしだす。

自分たちすべての仮面ライダーの中で最強戦力。その力の元が壊れたときのことを。

「あ、あのとときはそうでもしないと勝てなかったじゃないか」

「ガシヤットが出力に耐え切れずに壊れるとか過去にも未来にもあれつきりだろうぜ。しかも同時にふたつだもんな」

本来ならありえない、ガシヤットの破損。元の世界にいる檀黎斗神ですら予想できなかった出来事は、いまなら笑い話にもできるものだ。

「だったらパラドこそ！ なにが『これを使え』だよ。まさか分身化を投げてくるとは思わなかった！」

「最高だったよな、ハイパームテキが二人だけ？」

「そのあと『俺も行くぜ！』とか言って自分だけ八人になってただろ」

「十人での超キョウリョクプレーは熱かったな。心が躍ったぜ！」

二人になったエグゼイドに対して八人のパラドクス。超キョウリヨクプレーにしても度が過ぎているのだが、あのときの状況を鑑みれば過剰戦力と言うには足りないのかもしれない。

クロノスとゲムデウスマキナの共闘などという、危うい状態にあったのだから。

本当の本当に、ギリギリだったのだ。

それこそ、ガシヤットの限界を超えての力を引き出したために、決戦後にはガシヤットが同時にふたつも破損するほどには。これまでのどの戦闘であつてもありえなかつたことだからこそ、当時の最終決戦がどれほどの激戦だったのかが伺える。

「ところで永夢、おまえは十六夜たちのところに行かなくていいのか？」

いまだ耀の側で座っている彼に問いかけると、

「向こうには黒ウサギが付いている。むしろ、いまここで僕までいなくなる方がよくないと思うんだ。意識がなくなつたあとに起きてすぐで誰もいなかったら不安になるだろう？」

「そういうものなのか？」

「人によつて違うかもしれないけど、だいたいはそうだと思うよ。パラドだつて、周りに仲間がいなくなると寂しいでしょ？」

「……ああ。なら、起きるまでいてやるか」

永夢が座る位置とは反対側に自分用の椅子を持ってきたパラドは、嬉しそうにその椅子に座った。

自分にできることは小さなことでも、人のためになることの喜びを噛み締めながら。

永夢とパラドは、耀が目覚めるのを待っている間は箱庭のゲームがどんなものか、どんなゲームなら楽しそうだとか、こんなゲームは不利かもしれない、自分たちの仲間なら誰が適任かなどと多くのことを話し合っていた。

そんなときだ。

「……………は？」

眠っていた耀の意識が戻ったのは。

「耀ちゃん！」

「お、やっとお目覚めか」

ゆっくりと上半身を起こした彼女を待っていたのは、先生と呼んでいる永夢と、まったく知らない男の二人だった。

「……………だれ？」

彼女の口にした疑問はもつともなもので、視線もパラドに固定して外さない。

随分と警戒されたものだ。

「耀ちゃん、あのね」

「待てって永夢。自己紹介くらい自分でさせろよ」

やけに永夢と仲良さげに話すパラドの姿に警戒心を緩めた耀だが、次の言葉によって思考が止まる。

「初めまして、パラドだ。永夢から生まれたMとしての人格だ。よろしくな」

盛大に正体をはぐらかした自己紹介だが永夢は黙認した。

一応言っていることは真実なわけだし。とは本人の・弁。

「……………つまり先生は子持ち?」

しばらく黙り込んでいた耀が今度は永夢に視線を動かし、やつとこのことで口を開いた。

「え? 子持ち!?!」

「まあ、確かに俺は永夢から生まれたようなものだからな」

「いったいいくつで……」

「永夢がこどもの頃だったから、だいたい——」

「パラドは黙ってて!!」

バグスターのことやその他すべてを話すにはまだ早い。かと言って決して子持ちで

はないことを証明しなければならない。もともと、永夢の年齢でパラドほど大きなこともがいろいろ考えられない。

考えられないのだが、パラドの偽りのない発言がある意味でいらぬ誤解を招いている。

耀は耀で、少しばかり思考が彼方へと飛んでしまっているのも危険だ。かなり危険だ。

「パラドが決して僕の子というわけじゃなくて、どちらかというと僕自身なんだ」

「先生、自身……？」

「そう。俺はお前、お前は俺。そういう関係なんだ。だからパラドはもう一人の僕なんだよ」

「そういうこと。俺は永夢の中にある天才ゲーマーMとしての本来の人格そのものなんだからな。完全に一人の人間ってわけにはいかないが、それに近いようなものだ」

永夢とパラド。それぞれの説明は寝起きの耀には情報量が多すぎたのか、

「双子？」

曲解される形で処理されることになった。

「間違いではないような気もするけど……」

「下手に解釈されるよりはわかりやすいかもな」

この際それでもいいかと思ひ出す二人は、耀を挟んで互いに笑みを浮かべた。

真ん中に座る耀は、その光景を不思議そうに眺めていたが、いつしか彼女の中でパレードに対する警戒心はまったくなくなっていた。

「実際に見せた方が早いかもしれないけどな」

「見せる？」

パレードの言葉に耀は首をかしげるが、なにをしたいのか察した永夢は困ったような顔を見せる。確かにそれをすれば話は早く済むだろう。

幸いにも、彼らのいた世界と違つて、ここは摩訶不思議なことが罷り通る世界なのだ。同時に、目の前にいる耀自身も、そうした力を持つ少女である。覚悟を決めるように、息をひとつ吐き出す。

「耀ちゃん、僕のギフトカードに“天才ゲーマーM”ってあつたのは覚えてる？」

永夢が尋ねると、耀は首を縦に振る。

それなら、とパレードとアイコンタクトを取ると、パレードは粒子状になつて永夢の中へと入つていった。

「消え、た？」

「いや、消えてないよ。パレードは僕の中にしつかりといる。なんだろう、体内に宿つてゐるつて言えばいいのかな？」

「えっと、つまりパラドは先生のギフトってこと？」

「箱庭の世界だとそうなるのかな」

「不思議……変わってるね、先生は」

ここで初めて、永夢の前で笑みを見せた耀。

つられるようにして、永夢の顔にも笑みが浮かぶ。

「さて、これで俺のことも理解してもらえたな」

「うん、もうだいじょうぶ。よろしくね、パラド」

「ああ。そのうち楽しいゲームをしようぜ」

パラドと耀が手を握る中、永夢は微笑ましそうに二人を眺め、そのあとは耀の体調を気遣ったり経過の説明をしたりと、いまできることをするのだった。

黒ウサギたちが帰ってくるまで、三人の談笑は続いたとか。

しかし、黒ウサギたちがこの部屋を訪れる頃には、パラドは二人に「お楽しみは取っておいた方が面白いだろ？」と自分のことを話さないようと頼みながら永夢の体に戻っていた。

月明かりが照らす湖のほとり。

アロハシャツの上に白衣をまとった一人の男性が水の中から陸地へと上がってきていた。

「くそっ、神の野郎どこに落としてくれちゃってんだよ……ああ、つめてえ。まさかいきなり湖に落とされるとはねえ……中々過激なゲームじゃないの」

とはいえ、立ち止まっているわけにもいかない。

この世界には、自分の仲間がいるのだから。

「ノリノリでいっちゃうぜ」

もう一人の白衣を着た男は黄色のガシヤットを取り出すと、そのガシヤットを起動させた。

苦勞人 Rider

耀に事の顛末を伝えることと、氣遣いにきた十六夜たちが去ったあと。

やはり残された永夢は、いまだ耀の隣で彼女の容体を気にしながら座っていた。

「なんだか、外が騒がしいね」

「そういえば、さつきから変な物音が響いてるね。でもここは“ノーネーム”の本拠だし、早々変なことは起こらないと思うよ」

実際、永夢の世界ではCRにまで敵の手が伸びてくることはなかった。

ここでも同じように通じるとは思っていないが、それでも魔王がギフトゲームを仕掛けてこない限りは平気だと思っていたのだ。

そんな想いは、ジンが部屋に入ってきた時点で崩れ去った。

「すいません、失礼します！ 永夢さん、ちよつといいですか!?!」

やや慌てた様子 of 彼は、耀に一言断りを入れながら永夢を部屋の外へと引つ張っていった。

なにかあったのだろうと素直に従った永夢は、ジンに連れられて部屋を出てすぐに彼と向き合った。

「永夢さん、冷静になつて聞いて欲しいんですが」

そう一拍おいたジンは、改めて口を開く。

「先ほど“ノーネーム”に襲撃がありました。その際に、僕たちの元仲間が連れ去られてしまつて……襲撃してきたコミュニティがどこかはわかっているので、白夜叉さまに詳しい事情を聞きに行きます」

「え？ それ、本当に!？」

「はい、ですが十六夜さんは最悪その場でゲームになる可能性もあるから他の皆さんも呼んでこいと」

ついさつき、本拠では変なことは起こらないと言つたばかりである。

まさか一瞬にして撤回しなければならなくなるとはさすがに思つていなかったのか、地味にシヨックを隠せない永夢。けれど、すぐに意識をジンの話に戻す。

「二度襲撃があつたのなら、どんな理由があれ二度目が無いとは言ひ切れない。なによ、ここには患者がいる。十六夜くんには悪いけど、僕はここに残るよ」

耀がいる部屋を一度振り向いてから、ジンにそう告げる。

「い、いえ。残るのでしたら僕が。いざというとき戦力になる永夢さんは十六夜さんと一緒に行つてください」

だが、彼ももしもの事態を考えないわけではない。

いまは十六夜の言った通り、少しでも戦力を集めていくべきはず。けれど。

「僕が行かないよ」

永夢はその言葉に頷くことはなかった。

「ど、どうしてですか!？」

「治療行為のために患者を置いて戦うことは仕方ない。だって、戦わないと治せないんだから。でも、仮に傷は治っていたとしても、完治していない患者を置いていくことなんて僕にはできない。だから、ジンくんが行って来なよ。リーダーなんでしょ？ だって、十六夜くんたちについていくべきはキミのはずだよ」

目線をジンと同じ位置まで下げ、まるで言い聞かせるように話す永夢。

自分が出て行ってしまえば、本拠は無防備。

十六夜についていかなければ戦力向上は見込めない。

それでも。

「十六夜くんならだいじょうぶ。だから僕は、僕のやるべきことをしないと」

「永夢さん……」

「状況がわかつているわけじゃないけど、全員が全員、戦って勝つことだけがすべてじゃない」

戦う人はもちろん必要だ。

永夢がそうであつたように、何事にも役割というものがある。適材適所。自分たちのやれることを、互いに信頼して任せ合うことで彼らは多くの患者を、バクスターから、病から救つてきた。

「ジンくんはみんなと一緒にリーダーとして事の顛末を。僕は医者として、耀ちゃんを。そして、こどもたちを守るよ。だから、あとは頼むね」

ここでジンに代わってもらい出て行くことは簡単だ。

でも、彼がこの先立派なリーダーとして“ノーネーム”を率いていくのなら、前に出るべきだ。経験するべきだ。任せることの、託すことの重要性を知るべきだ。かつて、永夢が多くのドクターから教わつてきたように。

「……わかりました。僕はリーダーとして行つて来ます。ですから永夢さん。あとはお願いします」

「うん、わかつた」

そうしてジンを見送ろうとした永夢だが、

「あ、待つてジンくん」

走る去ろうとするジンを引き止め、ひとつの伝言を頼んだ。

かつて、すべてを自分一人で成し遂げようとした男がいた。

一人ですべてを暴き出した男は命を落とした。

たった一人の愛する人のために・壊れかけた人がいた。

尊敬する、恩ある人を救うために周りの人たちの言葉を聞かずに力を求め、仲間と共に戦うことをせず、一人で戦おうとしたバカな男がいた。

「十六夜くんに伝えておいて。頼れる仲間がいるのなら、その人たちの手を払うべきじゃないって」

永夢が経験してきたこと。

見てきたもの。

それらを思い出しながら、いずれ辿るだろう未来がそうならないことを祈りつつ、どこか、一人ですべてを成そうとしてる彼のために言葉を紡いだ。

どうかその予感が、外れであることを願いながら。

「いつてらっしやい、みんな。怪我なく帰ってきてね」

ジンが見えなくなった廊下の先をひとつ眺め、永夢は部屋へと戻って行った。

「そうか、お医者さんは不参加か。仕事熱心なこった」

永夢の元から戻ったジンが永夢のことを伝えると、そのような気の抜けた声が返って

きた。

他に集まっているのは、黒ウサギと飛鳥。どうやらこの四人で行くことになりそう
だ。

「十六夜さん、それともうひとつ伝言が」

「あん？ お医者さんからか？」

「はい。頼れる仲間がいるのなら、その人たちの手を払うべきじゃない、と」

「……よくわからねえが、まあ頭の片隅にでも留めておいてやるよ」

ジンから伝言を受け取った十六夜は、黒ウサギたちにも声をかけ、白夜叉のいるであ
ろう〃 サウザンドアイズ〃 二一〇五三八〇外門支店へと足を向けた。

つい先刻、神の手により箱庭の世界へとやってきた男は、石造りで整備された道を歩
いていた。

「桜？ にはしては花卉の形が違う。秋に咲く種類の桜かとも思ったが、そもそも見たこ
とねえ植物ばかりだったしな」

ここに来るまでに見てきた景色を思い出しつつ、通りの脇を埋める街路樹を観察しな
がら歩く。

「箱庭つてくらいだから小さなステージかと思つてたが、こりや相当広そうだな。この中で永夢を探すつてのも相当の手間だぞ。第一、人が誰もいないときた」

そのくせ、なにか仕掛けてくる気配もない。

（夜だからか？ 永夢がいればなにかゲームのルール部分に気づいたかもしれないが……これ、あいつをこのゲームの世界に送つた方が攻略進んだんじやないだろうな）

生憎と、特断ゲームが得意というわけではない。

これなら自分を送り出した男を参加させればよかったと思うばかりだ。

「とはいえ、やっと人がいそうなどころまで来たんだし、話くらいは聞きたいもんだな」まさかスタート地点から人が暮らしていそうな場所にたどり着くのにバイクを必要とするとは思つてもみなかったのだ。普通スタート地点が湖とかありえない。

誰とは言わないが一人の男からの悪意を感じる貴利矢だが、いまさら神のすることに善悪を問うのも面倒だ。

（あいつのこういつた事態への対処力だけは評価しているのも事実だしな。永夢の判断は間違つていなかったつてことにもなるわけだし）

と自分を納得させながら歩いていると、少し先に何人かの男女の姿が見える。

「歩いてみるもんだな。さて、あとは話を通じればいいが」

念のためガシヤットを握りつつも、いたつて陽気に接つしにかかる。が、

「どういうつもりなの黒ウサギ！ 本気であの男の物になっていいというの!?!」

貴利矢が話を聞きにいった集団の一人が鬼気迫る表情で叫び出す。

「私たちを焚きつけた本人である貴女がコミユニティを離れるのは、責任の放棄に他ならないわ!」

「……そんな、つもりは」

「いいえ、嘘よ! 貴女は仲間の為に自分を売り払っても構わないって思っている!

だけどそんな無駄なこと、私たちが絶対に許さないわ!」

「コミユニティにとつて仲間は大事です。何物にも勝る、コミユニティの宝でございませぬ。仲間の為の犠牲が無意味なはずがない!」

さすがの貴利矢も、さしてどうしたものかと傍観していると、

「夜中に叫ぶな喧しい」

目つきの悪い少年が言い合いを続ける女性二人の頭を掴み互いの額へと叩きつけた。

突然の衝撃に二人は口論している余裕もなくオデコを押さえながらうずくまる。

そうして、リーダーであるジンがどうか二人の言い分をまとめ、互いに理解を示し納得のいく形を作ろうという話にまとめられたところで、目つきの悪い少年——十六夜の視線が、初めて貴利矢へと向けられた。

「こつちで白衣をまとった奴に会うのは二度目だな」

「へえ……こつちのことに気づいていたのか。だったら話は早い。ここがどこだか教えてもらえるかな？」

つけていたサングラスを外し、十六夜へと近づく貴利矢。

「なに言ってるんだ、おまえ」

「あの、もしかして遠出しているコミュニティからはぐれてしまった迷子さんでしょうか？」

「あら、こどもじゃないのだし、迷子だなんて」

「す、すいません」

十六夜、黒ウサギ、飛鳥、ジンという順番でそれぞれの反応を見せる。

「こいつは神の野郎が仕組んでそうなキャラしてんな、おい！ あとコミュニティってのはなんだ？」

さらっと迷子の部分には言及せずに会話を繋げようとする貴利矢。迷子なのは事実なので言い返せなかったようだ。

十六夜たちからしてみれば・この箱庭の世界に来たばかりの自分たちに対して接触してくるなど怪しいことこのうえないのだが。

「コミュニティを知らない？ いえ、そんなはずありません。貴方がどこの誰かは存じませんが、なにが目的ですか？」

「目的？ 目的なんて、仲間を連れ戻すことくらいなただけど……っていうか、その耳つて本物？」

「ああ、本物だぜ」

「え？ うそ?! ゲームキャラってやつぱなんでもあり——」

「話をややこしくしないでください！」

黒ウサギを見てからずっと聞きたかった貴利矢の疑問に答える十六夜と、話が進まずに怒る黒ウサギ。

貴利矢は怪しまれていることを理解しているが、それでも楽しい状況ではあった。

だが、これでは確かに話が進まないのも事実。

「この年頃の相手は適任なのがいるんだけど」

本来の世界でなら、共に戦う仲間の一人かその相方が話をつけてくれそうではあるのだが。

「はてさて、どうすっかなあ……」

一向に話が進まないこの状況に、貴利矢は夜空を見上げながらため息を漏らした。

最初のPartner

神の才能により永夢の居場所を突き止め、これまた神の配慮によって永夢の存在する時間軸へと送り込まれた貴利矢は、非常に面倒な状況に巻き込まれていた。

というのも、やつとのことで自分以外の人に会うことはできたのだが、なにやら一組の男女が言い合いを始め、挙句鬼ごっこにまで発展してしまったのだ。

「やれやれ……」

これは騒ぎが収まるまで待つしかないと座り込んだところ、走り回っている十六夜と黒ウサギと共に行動していた飛鳥とジンが貴利矢へと話しかけてきた。

「それで、貴方は結局なにを聞きたいわけ？」

「コミュニケーションのことを知らないというのは本当ですか？　にわかには考え難いことなのです」

面倒な連中とひとまとめにしていたが、比較的まともそうだと判断した貴利矢は彼女たちから情報を聞き出そうとする。

「自分は少し前にプレイヤーとしてこの世界に来たんだが、右も左もわからない状態だね。だからこうして一人で彷徨ってるわけなんだが、できればこの世界の情報が欲しい」

い。それから、探したい奴がいるんだ」

いまだ素性のわからない連中に詳細までは話せない。そう判断した上で、けれども最低限の真実を語る。

今日始めてこの世界にやって来たこと。

会わなければいけない人がいること。

なにひとつとして、ウソは言っていない。

「あら、貴方もしかして、私たちと同じように呼ばれた側の人なのかしら?」

「キミと同じ?」

貴利矢の話の中に気になることがあったのか、飛鳥が問いかける。

「私も、あそこで黒ウサギと戯れている十六夜くんも、元々は日本にいて、昨日突然この世界に呼ばれたのよ」

「なに? というと、キミはゲームキャラクターじゃなくてプレイヤーなのか?」

「ゲームキャラクター? よくわからないけれど、確かに私はプレイヤー側ね。今日もゲームに参加してたわけだし」

いまいち噛み合っていないのだが、それでも培ってきた洞察力、推理力が貴利矢を支え、いくつかの仮説を作っていく。

(となると、ここは恐らくゲーム病患者と関係なく人を呑み込むゲーム世界……もしく

は参加しているプレイヤーの誰かが作り上げたものになるってわけか？ どちらにしろ、大層なものを作ってくれちゃって)

改めて箱庭の世界を見渡すが、どう考えても現実世界と変わらない。
どうにも妙だ。

そもそも、データとしてではなく生身の人間がゲームに取り込まれる。あまり考えたくないが、まるで知らない現象が起きているのかもしれない。

「つたく、こつちはただでさえ永夢を探しに来たってのに、ここに来て面倒事が増えたんじゃないだろうな……」

つい愚痴を言ってしまったが、結果的にはそれが良かった。

「永夢？ あら、もしかして」

「あの、到底有りえないことだとは思いますがそれって……」

「な、なんだ？」

ついつつかり探し人の名前をつぶやいてしまったが、すでに・遅い。

飛鳥とジンに名前を聞かれてしまった。

彼女たちは互いに顔を見合わせたあと、再度、貴利矢に視線を合わせた。

「あの、すいませんがひとつ尋ねたいことが」

ジンが飛鳥の意を汲み取った上で低い位置で手を挙げた。

「あ、ああ。なんだ？」

「もしかしたら、僕たちは貴方が探している人を知っているかもしれません」

突然の告白に、さすがの貴利矢も思考が止まる。

「というか、完全に固まっている。」

「……………つまり、なんだ？」

「ですから、永夢さんという方に心当たりがあると」

「あ、そう。そっか……………いや早すぎるだろこの展開！」

あまりに早い展開に理解が追いついたのは、ジンの言葉からしばらく経ってからだった。

ようやく動き出した頭は、冷静に彼らを観察する。

ウソをつくにはあまりに幼い瞳。

うまく人を騙そうとするには勝気な態度。

（この二人が演技だつていうなら相当なもんだな……………それに、疑っていても動かないと埒があかねえ。乗せられてみるか）

立ち止まってはいはいつまで待っても解決しないことをよく理解している彼は、短い時間でこの身の振り方を決める。

「つていうか、あんたも医者だろ？」

これまで黒ウサギと駆け回っていた十六夜が息ひとつ切らすことなく戻ってくる。
「あれ、わかっちゃった?」

「わかるもなにも、白衣を着てお医者さんを知つてるとなれば、医者以外になにがあるつてんだよ」

お医者さん。

そう呼ばれているのが誰かを当たりをつけた貴利矢は、

(永夢がお医者さんねえ。またこどもに呼ばれそうな呼ばれ方されてんなおい)

僅かな同情とおかしさを感じてしまう。

「なにはともあれ助かったぜ。こっちは永夢に会わないと色々始まらないんでなあ」

このおかしな状況にも、彼と組めばきつと対処できる。

自分の信頼している男ならば、きつと。

この際、畏であれついていくしかないのならばと永夢の名前を普通に出す。

「それなら俺たちと一緒に来ればいい」

ひとつ笑った十六夜は、一切の警戒をさせることもなく彼を誘う。

こうなればなるようになるだろうと、この世界に来て初めて出会った彼らの提案に乗る。

「助かるぜ。だったら案内よろしく頼むよ」

乗せられたつもりで集団に加わった貴利矢は、十六夜たちからこの箱庭の世界のことや永夢の話を聞きながら「ノーネーム」の本拠へと向かい出す。

その過程で、彼は悟った。

（あ、これ罠でもなんでもねえや。本当に永夢と一緒に行動してるだけの奴らだ……）

「ノーネーム」本拠では、永夢と耀が残っており、いまは耀もぐつすと眠り、永夢はその近くで窓から見える外の景色を眺めていた。

「みんな、何事もなく帰って来ればいいけど」

ここから見えるのは、無数の星々が輝く夜空と暗闇のみ。

しばらくそうしていると、不意に扉をノックされた。

「はい」

「お医者さんか？ ちょっと失礼するぜ」

扉の向こうから十六夜の声が響き、ゆっくりと扉が開く。

「春日部はどうだ、お医者さん」

「おかえり、十六夜くん。耀ちゃんならだいじょうぶだよ。あとはぐつすり寝てればすぐに動けるようになるから」

「そっか。ならいいや」

先ほども一度会いには来ているのだが、それでも心配だったのだろうか。

などと永夢が思っている中、十六夜は彼に手招きをする。

「どうかしたの？」

なぜか扉の前に立ち、部屋の中には入ってこない十六夜を疑おうともせずそちらに足を向ける永夢。

十六夜としてみれば、寝込んでいる女の子がいる中で騒ぎを大きくしたくないだけなのだが。

「ちよつといいか？」

「うん、もちろん。それと、押しかけはうまくいったの？」

「いや、そっちはちよつと揉めてるな。だから解決策を思いついたんだが——それは後にして、ついてきてもらうぜ、お医者さん」

話を中断し、永夢についてくるように言って先に進む十六夜。

彼なりの考えがあるのだろうかとうと黙ってついていくが、辿り着いたのは先ほど自分もいた貴賓室だった。

「さあ、入った入った。あんたを待つてる人をつれてきたんでね」

永夢の背中を押し、貴賓室へと押し込む。

「わっと、十六夜くん!」

つまづきかけながらも部屋に入ってみると、ソファに一人、足を組んで誰かが座っていた。

アロハシャツの上から白衣を纏う、コーヒーに砂糖をいくつも入れ続ける男。

「えっ……」

その光景を見てすぐ、永夢の中で例えようのない思いが湧き上がる。

「貴利矢さん……?」

すべての思いを飲み込んで、その男の名を呼ぶ。

何度も、何度だつて自分の危機に駆けつけてくれた相棒の名前を。

「よお、永夢。無事でなによりだ」

コーヒーと向き合っていた貴利矢が顔を上げ、永夢の名を呼ぶ。

そうしてひとつ笑みを浮かべた貴利矢は立ち上がり、彼へと近づいていく。

「どう、して……どうやってこつちに来れたんですか!」

「おいおい、待てて。俺だつて聞きたいことはいくつもあんだよ。とりあえず落ち着けて、な?」

「——は、はい」

掴みかからん勢いで迫ってきた永夢を一度遠ざけ、改めて向き合う。

「まず初めに、自分がここに来たのは檀黎斗のおかげだ。あいつがおまえの居場所を割り出し、箱庭のゲームっていう聞いたこともないゲーム世界に俺を送り込んだ。ここまではいいか？」

「黎斗さんのことについては色々聞きたいところなんですけど……」

「言うな言うな。神のすることだぞ。便利くらいのは気持ちでいろつて。それがあいつとうまく付き合っていくためのコツだ。もつとも、おまえには必要ないだろうけどな」

ゲームマスターとしての黎斗とゲームプレイヤーの永夢としての相性は決して悪くない。ゲーム開発や攻略といった・面だけであれば彼らの相性は最高なのだ。

それを知っている貴利矢としては、自分とはまた違った付き合い方を確立させている永夢はこのままでいいだろうということだ。

「つまり貴利矢さんは・僕と同じようにこの世界に来てゲームの攻略を進めるってことでいいんですか？」

「ああ、大枠はそれで間違っちゃいない。妙なのは、神がここをゲームの世界だと認識していたのに対して、十六夜くんたちの話を聞いているとどうにもゲームの世界とは思えないってことだ。その辺りも地道に探っていけないとな」

もつとも、永夢のことだ。

「それよりもだ。俺もここに案内されるまでに現状は軽く聞いている。おまえのことも、

このコミュニケーションってやつのもな」

現状を知っているながら、放っておくことなどしないだろうと理解している貴利矢は、「俺もおまえに乗ってやるよ。黒ウサギちゃんからも、ジンくんからも了承を得ている」
「ノーネーム」の本拠につくまでに、もしも貴利矢の探している人物が十六夜たちの出会っている宝生永夢だった場合、彼の意見を尊重し、自分も協力するという形で話をつけてあるのだ。

もちろん、警戒する必要がなくなったからこその判断であったのだが。

「つーわけで、自分もいまから」ノーネーム」に力貸すぜ」

「貴利矢さん！　ありがとうございます!!」

差し出された手を強く握る永夢。

なんだかんだで、彼と最も早く信頼関係を築いた仲間の参戦は、彼を精神的に力付けた。

「やっぱり、あんたたち仲間だったんだな」

二人の様子を眺めていた十六夜は、更に後方から覗いていたジンと黒ウサギ、飛鳥が頷くのを見て、貴利矢への警戒心が三人から完全に取り除かれたのを確認した。

どうにも、本拠に来るまでの会話で彼ら彼女らはそれなりに良好な関係になったように、実は既に自己紹介を終え、不何気ない会話すらしていたのだ。

となればあとは黒ウサギたちから話すこともないので、一言断りを入れて各々が貴賓室から出て行く。

「……みんないたんだ」

今更になってそのことに気づいた永夢は呆れながらも三人が退室していくのを見送った。

黒ウサギと飛鳥は言い合ったことが響いているのか、特にアクションを起こすことなくそれぞれの部屋へと向かっていく。

「あの二人、なにかあったの？」

この場でただ一人事情を知っているはずの十六夜に訊くと、彼も面倒そうにしながらも出かけた後の出来事を語り出した。

「つてなわけで、昔の仲間を取り戻したいなら黒ウサギと交換って話にされてな。それで交換に応じそうな黒ウサギにお嬢様がキレてな。しかも、“ペルセウス”はどうあつても決闘を受けそうにねえ」

大方のことを語り、いまの問題点を挙げていく十六夜。

けれど、彼は言っていた。

「十六夜くんには、解決策があるんじゃないの?」

「……まあ、な。黒ウサギはトレードなんてさせないし、つまらなそうな相手だったが、ギフトゲームはどうなるかわからない。このまま手をこまねいているのもしょうに合わないところだし、逆転の切り札を用意しようかと思っただけな」

「切り札?」

「ああ、そうさ。決闘したくないって言うのなら、決闘しなきゃいけない状況に持ち込むまでだ。なあ、お医者さんたちよ」

この場に揃う、十六夜、永夢、貴利矢。

時間は限られている。けれど、この三人ならば・時間の制限も、相手の要求も突破することができる。

「ひとつ、俺の作戦に乗って見ないか?」

いまここに、問題児とドクターたちの最初の協力プレーが始まろうとしていた。

逆転のCard

穏やかな海を眺めながら、二人の男が笑みを浮かべて横に並んでいた。

「いやはや、中々知能派じゃないの、十六夜くん」

「そうですね。態度や口の悪いところはありますけど、仲間想いのところもありますし」「ハハッ、でもありや危なっかしいけどな」

陽気に笑う男性が、サングラスを取り外す。

「でも、今回は僕たちにも協力するように声をかけてくれましたし、時間が解決することもあると思いますよ」

もう一人の青年は、白衣のポケットへと手を突っ込む。

「お、ちつとは成長したな。ならひとまず彼のことは置いておいて、俺たちもやるべきことをするでしょうか」

「はい。十六夜くんの作戦に乗ったからには、時間との勝負ですからね。行きましょう、貴利矢さん」

永夢と貴利矢が同時に前を向き、ガシヤットを取り出す。

すると、これまで穏やかだった海の一角で渦を巻き始め、その中心から大ダコが顔を

覗かせた。

「あれが今回のターゲットってわけか」

それに怯むことなく、貴利矢が笑みを浮かべる。

なんといつても、彼らは姿を現した大ダコに会うためにそれなりに長い距離を走つて来たのだ。しかも、会うだけでは終わらない。

出会ってからが重要なのだ。

ここに来るまでに使った時間、帰るための残り時間。

永夢と・貴利矢はすべてを計算しながら、大ダコへと話を持ちかけた。

「さあ、クラーケン。俺たちとの“ギフトゲーム”を受けてもらうぜー」

十六夜の話聞き夜のうちから“ノーネーム”本拠を飛び出していた二人としては、無事に見つけ出すことができて一安心といったところか。

『時間がないにはないんだが、お医者さんたちなら多分どうにかしてくるだろ。俺たちで、逆転の切り札を揃えるんだ』

楽しいと言わんばかりの笑顔で十六夜からそう持ちかけられては、根が良いドクターたちである彼らが断れるわけがない。

そうして切り札を揃えるべく必要なギフトを取りに来たのだ。

「それにしても、ギフトゲームを受ける気のないコミュニケーションなのにこういったゲーム

は開催してんのな」

「様式の整ったゲームなのかもしれませんね。本来なら、僕たちのしているような攻略方法が正しいギフトゲームの挑み方なのかもしれない」

「へえ……じゃああいつに手加減は不要なわけだ」

永夢との会話も終え、へらへらした笑みを消す貴利矢。

「さて永夢。こっちでは初の」

「はい。チームプレイといきましょう」

二人のドクターを参加者とみなしたのか、頭上に羊皮紙が現れる。

それを確認した彼らは、クラーケンを打倒するべく、ガシヤットを起動させた。

『MIGHTY ACTION X!!』

『BAKUSOU BIKER!!』

「黒ウサギの運命は、俺たちが変わえる！ 変身！」

「もう少しばかり、乗せられてやるか。変身」

掛け声と共に起動したガシヤットをゲームドライバーへと挿入する。

『『ガシヤット』』

二人の周りに展開したパネルのうち、選択すべきパネルが正面に来たとき永夢は右手を突き出し、貴利矢は蹴り抜くことで選択する。

『レッツゲーム！ メッチャゲーム！ ムッチャゲーム！ ワッチャネーム！ アイム ア 仮面ライダー!!』

音声の流れ出し、鳴り止んだときには4頭身の仮面の戦士、エグゼイドとレーザーが姿を表す。

「ノーコンティニューでクリアしてやるぜ！」

目指すはクラークンの打倒。

久々の共闘で熱が高まっていくのを感じながら、永夢は敵へと飛び出していった。

「つておい！ 時間ないから巻きで行くぞ永夢！」

レベルアップするつもり満々だった貴利矢——レーザーはいきなり駆け出した永夢

——エグゼイドに呼びかけながら自分も走り出す。

「そういう貴利矢さんこそ！」

「自分はお守りだつての！」

言い合いながらも息の合った行動をとるエグゼイドとレーザーは、迫り来るクラークンの足を掻い潜りつつ距離を詰める。

四方から押し寄せる何本もの足を各々のガシヤコンウエポンで迎撃していく。

「つたく、バグスターじゃあるまいし」

文句を言いつつも何度目かの刺突を防ぎ、鎌として使用していた両手に握るガシヤコ

ンスパローを合体させ、弓として用いる。
「あらよつと」

クラークンの眼に向けて放たれた攻撃は防がれるものの、僅かな隙を作るには十分だった。

「行くぞ、永夢！」

「おう！」

「大変身！」

「・二速！」

二人同時にゲーマドライブを開く。

『レベルアップ！』

『マイティジャンプ！ マイティキック！ マイティマイティアクション エックス
!!』

『爆走！ 独走！ 激走！ 暴走！ 爆走バイク!!』

エグゼイドとレーザー、それぞれから異なる音声が聞こえてきたかと思えば、そこにはゆるキャラのような姿をした戦士はすでになく、逆立った髪のような頭部が特徴的な8頭身のピンク色のエグゼイドと、黄色のバイクに変形したレーザーの姿があった。

「よっしや乗れ永夢。飛ばすぜ！」

「ああ、速攻で決めてやる！」

バイクと化したレーザーに颯爽と乗り込むエグゼイド。

仮面ライダーでありながらライダーマシンとなるレーザーは、単体でも行動可能だが他の仮面ライダーに操作してもらったことにより真価を発揮する。

エグゼイドの操作により飛び出した二人は、襲いかかってくる足の上を器用に走り、次から次へと繰り出される足へと移動しながら前へと進む。

「ハッ、やつぱおまえが乗ると違うな！」

「当然だろ！」

レーザーに乗るエグゼイドがガシャコンブレイカーを構える。

幾度となく繰り返してきたプレイの先に、クラーケンの本体が見えた。

「決めるぞ、レーザー！」

「よっしや行け永夢！」

ガシャコンブレイカーをソードモードに移行させ、速度を上げる。

座席の前に設置されたゲームマッドライバーに刺さっているレーザーのガシャットを引き抜く。

『ガッシューン』

取り出したガシヤットを、すぐさまゲームドライバーの左側に付随しているキメワザスロットホルダーに挿入する。

『ガシヤット!』

そして上部のボタンを押し、

『キメワザ!』

その間に二人とクラレーケンとの距離はもうすぐそこまで詰まっていた。

「行くぞ。ウイニングランを決めるのは——」

「——俺たちだ!」

『BAKUSOU CRITICAL STRIKE!』

クラレーケンに正面から突っ込んでいく二人は、レーザードリフト走行に合わせてエグゼイドが握るガシヤコンプレイカーで回転斬りを繰り返す。

そのまま駆け抜け、足をつたり岸边へと戻って来る。

「つしやあ!」

振り返れば、海へと沈んでいくクラレーケンの姿。

同時に、エグゼイドたちの前に“ゴーゴンの首”の印がある蒼い宝玉が差し出される。

「どうやらあいつで正解だったみたいだな」

「これでゲームクリアだ」

『ガッシュユーン』

手に入れた物を確認した二人は変身を解き、満足そうにしながら一時の休息に入った。

走る。

走る。

ただひたすらに、周りの景色をあとにして駆け抜ける。

（おい永夢、レーザーにもっと速度を上げさせろ！ 十六夜が待ちくたびれてたらどうするんだー！）

（いやいやいや、これ以上貴利矢さんに無茶させられないよ！ だいたい、パラドがちよつとだけとか言ってギフトゲームに挑んだりするから！）

（でもいいもんは手に入っただろ？）

「ああもう！ 確かにそうだけど！」

クラーケンを倒してすぐ、永夢と遊ぶこともギフトゲームに参加すらしていないパラドが他のゲームに挑みに行ってしまう、それを待っていたら予想以上の時間が経ってい

たのだ。

もちろんパラドにも考えがあったわけで、決して個人的な目的でも、永夢たちを困らせるためにしたわけではない。

「もういいだろ永夢。パラドにだって悪気はなかったんだ。次からしつかり見とけよ。今回は自分が頑張つてやるからよ！」

笑いの混じった声で話す貴利矢に一言お礼を言いながら先を見据える。

「あともう少し……」

現在貴利矢に再びバイク形態へと変身してもらい、その上に乗っている永夢。行きもそうしてきたのだが、帰りは速度が更に速い。

「お、本拠が見えたな」

「良かった、なんとかかなりそうですね」

「だな。さて、そんじや最後の加速だ。しつかり捕まっとけよ」

「はい！——つて、貴利矢さん、これ止まれるんですかあああああつっ?!?」

このとき、ぼそりと貴利矢はつぶやいていた。

あ、やべ……と。

自室にてドアノブを壊され、挙句たつたいまドアそのものを破壊された黒ウサギは、部屋に集まった問題児たちを眺めていた。

飛鳥とは少し前に完全復活した耀も交え話し合ったことで和解し、これからのことを考えていたときにドアをぶち破り入ってきた十六夜によって思考は中断されていた。

当の十六夜は大風呂敷を抱えており、辺りをキョロキョロと見回していた。

「あれ？ お医者さんたちはまだか？」

「先生？」

耀が聞き返し、それに頷いた十六夜は再度部屋を見渡す。

「なんだ、まだ帰ってきてないのか。こりや、一人でやった方が——なわけないか」

どこからともなく、こちらに向かってくる音が聞こえて来る。

「ねえ、十六夜くん。それはなにかしら？」

飛鳥が十六夜の抱える大風呂敷に興味を示すが、

「戦利品さ。中身はまあ、揃ってからでもいいだろ。ほら、来たぜ。最後の役者が、逆転のカードを持ってな」

次の瞬間、盛大な破碎音と共に一台のバイクと白衣を纏った男性が黒ウサギの部屋へと突入してきた。

「なにごとオオオオオオオツツ!!？」

わけもわからず吹っ飛ばされた黒ウサギは、十六夜によって破壊されたドアを突き抜け、廊下へと転がっていった。

『ガツシューーン』

同じように部屋の中で転がっていたバイクからはそんな音声が漏れ、近くで寝転がる永夢は腰を打ったのか摩りながらも起き上がろうとしていた。

「悪い永夢。久々で飛ばしすぎた」

「途中で高速化なんてあったのが悪かったんですよ……だいじょうぶですか、貴利矢さん」

自分をここまで連れてきてくれた貴利矢を非難することなく手を差し伸べる永夢。

その・手を取って起き上がった貴利矢は、部屋の惨状を見て嫌そうな顔をした。

「こいつは酷いな。全員、怪我とかしてねえな?」

見渡した限りにいた十六夜と、その背後に隠れる耀と飛鳥に問いかける。

「おう、俺もこいつらも無事だ」

サムズアップして見せた十六夜に一安心し、ぶち破ってきた壁には申し訳なさそうに合掌しておく。

「レーザー、だっけ? やっぱりあんたも面白いな」

「おう、十六夜くん。確かに好きに呼んでくれていいと言ったけど、まさかそれに定着

するとはな」

「ヤハハ、かつこいいと思うぜ?」

「そう? ならいいか」

とりあえず全員の無事が取れた貴利矢はいい加減な十六夜と楽しく話し出した。

部屋の惨状からは目を背けた永夢は、

「耀ちゃん、飛鳥ちゃん。本当にだいじょうぶ?」

「うん、平気」

「私も問題ないわ。十六夜くんが咄嗟にかばってくれたし」

「そっか。なら良かったよ」

「こちらも少女たちの無事を再確認し笑顔になる。

「先生たちこそ、すごい登場してきたね」

「本当ね。でも、爽快そうでいいじゃない。今度私も乗ってみたいわ」

よほどバイクに乗つての登場がよかったのか、少し興奮気味で話し出す。

「おうおう、永夢にも春が来たか?」

「お医者さんいくつだよ。あれだと危ないんじゃないの?」

「あー……永夢の趣味はよく知らないしなあ。ポップーくらいしか近くにいなかったし。というか、あれ絶対保護者の目だから問題ねえよ」

なんて話していると、「貴利矢さーん！」と永夢から呼ばれたので三人の元に行くと、「貴方が九条先生？」

耀からそう呼ばれた。

「ああ、そういえばもう一人いたんだったな。少し前から“ノーネーム”に力を貸すことになった九条貴利矢だ。永夢の仲間とだけ覚えてくれればいいよ。よろしく」

「春日部耀、よろしく」

互いに自己紹介を終え、認識し合う貴利矢と耀。

永夢の仲間であり、飛鳥たちからも一応の話しを聞いていた耀は警戒することもなく彼の手を握る。

「ニコちゃんとはまるで反応が違うのな」

などと・一人感想を述べていた。

「それで、お医者さんたちはうまくいったのか？」

「もちろん。はい、十六夜くん」

永夢が十六夜に、彼が抱えるのと変わらないサイズの大風呂敷をひとつ渡す。これで大風呂敷に包まれた物がふたつになる。

「見込み通りか。俺と変わらない速度で戻って来れるならお医者さんだとは思ってたけど、中々だったぜ」

風呂敷の中を覗いた十六夜は笑いながらそうこぼす。

これでやつと、現状を覆せる。

「結局なに入っているの、それ」

「そうよ、私達だけのけ者にしてまで取ってきたことは、それなりの物なんでしょう？」

待ちきれないといった様子の二人。

対して、行動を起こしていた永夢、貴利矢、十六夜は顔を合わせて笑みを浮かべた。

「ああ、もちろんだ。逆転のカードを持ってきたぜ」

その頃、黒ウサギは吹き飛ばされた廊下の先で、いまだ放置されていた。

適材適所の players

夜。十六夜の案に乗り、とあるギフトゲームをクリアしてきた永夢と貴利矢。そして十六

彼らがギフトゲームで勝ち取ってきた物は、力のない最下層のコミュニティのために常時開催されている試練で、様式も調った立派なギフトゲームだった。

永夢たちが挑んできたゲームはふたつ。海魔クラークンとグライアイの打倒。

ゲームクリアによって手に入れてきたものは、“ゴーゴンの首”の印がある紅と蒼の宝玉であり、これらは“ペルセウス”への挑戦権を示すギフトである。

十六夜はこれらを用いて、どうあるうともギフトゲームを受けるつもりのない相手をも、これで強制的に舞台に立たせようという魂胆なのだ。

今回の騒動を起こした一人である“ペルセウス”のリーダー・ルイオスⅡペルセウス。

彼は今回の一件に対してまともに取り合うつもりなど毛頭なく、また“名無し”と対等な決闘を受けるなど屈辱なことだとさえ考えている。だが、彼も男だ。金、道楽、そして女のこととなれば積極的になるもの。要するに、黒ウサギは欲しい。だから“ペル

セウス”が握っている過去の“ノーネーム”の仲間と引き換えるといった提案が出されてきた。でもゲームは受けないといった状況なのだ。

放っておけば、献身的な黒ウサギは仲間のためにその身を差し出すかもしれない。

時間が経ってしまえば、そもそも仲間を取り戻す機会を失う。

だからこそその策だ。

突然の乱入によって廊下に吹き飛ばされていた黒ウサギはその報を聞き、これまでの扱いよりも彼らの心遣い——好意の方が何倍も胸に響いていた。

それからしばらくして、彼女は“ペルセウス”に正式に宣戦布告をするのであった。

『ギフトゲーム名 — FAIRYTALE in PERSEUS —

・プレイヤー一覧 逆廻 十六夜

久遠 飛鳥

春日部 耀

宝生 永夢

九条 貴利矢

・“ノーネーム”ゲームマスター ジン||ラツセル

- ・ “ペルセウス”ゲームマスター ルイオスIIペルセウス
 - ・ クリア条件 ホスト側のゲームマスターを打倒
 - ・ 敗北条件 プレイヤー側ゲームマスターによる降伏
 - ・ プレイヤー側のゲームマスターの失格
 - ・ プレイヤー側が上記の勝利条件を満たせなくなった場合
 - ・ 舞台詳細 ルール
 - ・ ホスト側ゲームマスターは本拠・白亜の宮殿の最奥から出てはならない
 - ・ ホスト側の参加者は最奥に入ってはならない
 - ・ プレイヤー達はホスト側の（ゲームマスターを除く）人間に姿を見られてはいけな
- い
- ＊姿を見られたプレイヤーたちは失格となり、ゲームマスターへの挑戦資格を失う
- ＊失格となったプレイヤーは挑戦資格を失うだけでゲームを続行できる
- 宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、“ノーネーム”はギフトゲームに参加し
- す。

『ペルセウス“印”』

数日後。『契約書類』に承諾した直後、七人の視界は間を置かずに光へと呑まれた。

次元の歪みは六人を門前へと追いやり、ギフトゲームへの入口へと誘う。

「姿を見られれば失格か。つまりペルセウスを暗殺しろってことか?」

背後に建つ白亜の宮殿を見上げ、なんとも楽しそうな声音で十六夜が呟く。その呟きにジンが応える。

「それならルイオスも伝説に倣って睡眠中だということになりますよ。流星にそこまで甘くはないと思います」

「YES。そのルイオスは最奥で待ち構えているはずデス。それにまずは宮殿の攻略が先でございます。伝説のペルセウスと違い、黒ウサギたちはハデスのギフトを持っておりません。不可視のギフトを持たない黒ウサギたちには綿密な作戦が必要です」

黒ウサギもジンに賛同し、より詳しく状況を説明してくれる。

今回のギフトゲームは、ギリシャ神話に出てくるペルセウスの伝説を一部倣ったものだ。

『契約書類』に書かれたルールを確認しながら、飛鳥が難しい顔で復唱する。

「見つかった者はゲームマスターへの挑戦資格を失ってしまう。同じく私たちのゲームマスターであるジンくんが最奥にたどり着けずに失格の場合、プレイヤー側の敗北。なら、大きくわけて三つの役割分担が必要になるわ」

飛鳥の隣で耀が頷く。

本来なら、このギフトゲームは決して一桁単位の構成員で挑むものではない。

この場での役割分担は必須だというものだ。

「それにしたって、まさか自分まで参加できるとはな」

“ノーネーム”に途中参加した貴利矢は呑気に感想を述べていた。

本来ならこんな予定ではなかったのだが、乗るしかないのもまた事実。であればどんな形であれ少しでも力になるとういうのが彼なのだ。元の世界においても、自身を顧みず危険をおかし、患者を第一に考えてきた。その在り方は、きつと世界が変わった程度では揺るがない。

「でも、このルールなら僕たちも役に立てそうですよ」

貴利矢と並び立つ永夢は、ルールを把握しながら呟く。

永夢の横顔を盗み見ながら貴利矢は口を開いた。

「いいのか？」

「なにがですか？」

「おまえのやろうとしていることくらいわかるさ。せつかくのボス攻略だぜ？ 参加できなくて悔しいとか思わないわけ？」

「正直、まるつきり未練がないわけじゃないんですけど、十六夜くんたちにごつちをお願

いするのはよくないかと思ひまして」

やりたいことなどわかつている。

彼ら問題児の性格もなんとなくだが把握できた。

ならば、縛るのではなく見守ることを選びたい。

「つたく、しようがねえなあ……なら、俺も一緒に残つてやるよ。俺たちのコンビなら問題ないだろ」

笑顔を見せ、永夢の肩に腕を乗せる貴利矢。

つられて、永夢の顔にも笑みがこぼれる。

（俺はボスの相手もしてみたかったんだが……今回は十六夜に譲つてやるか）

パレードも彼らの案を承諾し、静かに闘志を燃やし始める。どうせ人手は多い方がいいだろうと、多人数を相手取る戦法を浮かべていく。

「十六夜くん、ちよつといいかな？」

現状、コミュニケーションの中心にいる十六夜に話を持ちかける永夢たち。

「おう、どうしたお医者さんたち」

会議を始めようとしていた十六夜が「契約書類」から視線を外し、彼らの話に耳を傾ける。

「このゲームの攻略には、ボスであるゲームマスターを倒す役と、囿となってプレイヤー

をボスの部屋まで運ぶ役の二通りが必要になる」

「だろうな。だからその配分を考えていたんだが」

「うん、キミならそこまで考えていると思つたよ。だから、ひとつ提案したいんだ」

まだ若い、経験の浅い少年少女。

いつ最悪の状況に巻き込まれるかもわからないような世界。必要なのは、経験と覚悟。

(十六夜くんたちならきつとできる。だからこそ、いまは僕が彼らを信じるときだ。)

どうあれ、どんな状態に陥つたとしても、恐らく永夢たちは十六夜たちの戦いには介入できない。これはそういう提案なのだから。

「周りにいるだろう取り巻きは僕と貴利矢さんで相手をする。だから十六夜くんたちは最短距離でボスの元に向かつて欲しい」

「……いいの？ 俺が言うのもなんだが、お医者さんなら誰にも見つからずにルイオスのところにいけるだろ？」

もつともな意見だが、永夢は首を横に振る。

「ゲームの攻略のためには、僕たちが残る方がいい。だから、十六夜くんはボスを」

言葉に偽りがなく、永夢の瞳から感じ取った彼は、心の中にあつた意見を変えた。

「それができるってなら、他の全員で乗り込むだけだ。お嬢様には面白いことを独り占めするなどと怒られたばかりだからな。連れて行けば多少は満足するだろ」
連れて行けば。

十六夜はこのとき、飛鳥を戦わせようなどとは思っていなかった。無論、耀にだって譲ってやる気はない。あくまで自分が打倒するべき相手なのだと考えている。

永夢と貴利矢が残ると言い張るのなら好都合。やりたいようにやるだけだ。

「おい、全員よく聞け」

そこからの十六夜の行動は早かった。

素早く作戦を立て、自分たちをルイオスの元へ運ぶための囮として永夢たちが残るところを話し、残りはルイオスの相手へと移行させる。

問題児たち三人の中でも話が着くが、黒ウサギはやや神妙な顔で不安を口にする。

「せっかく全員でいけるのであれば、皆さんで相手をしてください。油断しているうちに倒さねば、非常に厳しい戦いになると思います」

五人の目が、一斉に黒ウサギに集中する。

「あの外道、それほどまでに強いのか？ 前回会ったときはこう、あまりに残念な」

「はい、ルイオスさんご自身はさほど脅威ではありません」

飛鳥の疑問に、黒ウサギも肯定の色を示す。哀れルイオス……。やはり本人の評価は

あまりよろしくないようだ。

「問題は、彼が所有しているギフトなのです。もし黒ウサギの推測が外れていなければ、彼のギフトは——」

「隷属させた元・魔王さま」

「そう、元・魔王の……え？」

十六夜の突然の補足に、黒ウサギは一瞬言葉を失った。

「もしペルセウスの神話通りなら、ゴーゴンの生首がこの世界にあるはずがない。あれは戦神に献上されているはずだからな。それにもかかわらず、奴らは石化のギフトを使っている。——星座として招かれたのが、箱庭の“ペルセウス”。ならさしずめ、奴の首にぶら下がっているのは、アルゴルの悪魔つてところか？」

「十六夜さん……まさか、箱庭の星々の秘密に……う？」

黒ウサギは信じられないものを見る目で首を振りながら問いかける。

「まあな。このまえ星を観測して、答えを掴めた。まあ、機材は白夜叉が貸してくれたし、調べるのは簡単だったぜ」

「もしかして十六夜さんってば、意外に知能派でございます？」

「なにをいまさら。俺は生粋の知能派だぞ。なんだって、鍵のかかった扉だろうと、ドアノブのない扉だろうと、目の前にあればなんだって開けられるからな」

黒ウサギは本能的に面倒ごとか、それに近い出来事が起きる気配を感じていた。しかし聞かぬわけにもいかず、内心ハラハラしながら問いかける。

「……………参考までに、方法をお聞きしても？」

十六夜は期待に応えるように扉のまえに移動し、後ろにいる全員に呼びかける。

「開けたら仕掛けるぞ！ お医者さんたちは準備を始めておけ」

「もちろんそのつもりだぜ」

（さて、交代だ永夢）

（ああ、パラド。ひとまずは任せるよ）

人知れず瞳を一度赤く光らせた永夢は、楽しそうな笑みを浮かべる。

「やつとまともに遊べるな」

貴利矢は黄色のガシヤットを手に取り、永夢はいつか見せた青を基調としたガシヤットを取り出す。

「さあ、攻略を始めようぜ」

「あんまりはしやぎすぎんなよ」

二人は同時にガシヤットを起動させる。

『PERFECT PUZZLE!』

『What's the next stage?』

『BAKUSOU BIKE!!』

「変身」

「二速。変身」

『デュアルアップ!』『ガシヤット』

永夢はゲームドライバーを使用することはなく。

『Get the glory in the chain. PERFECT PUZZLE!』

貴利矢は起動したガシヤットをゲームドライバーに挿入するとともにゲームドライバーを開く。

そうして、周りに展開したパネルのひとつを、正面から蹴り抜いた。

『ガツチャーン!』『レベルアップ!』

『爆走! 独走! 激走! 暴走! 爆走バイク!!』

永夢の中にいるパラドが表に出ることで変身した仮面ライダーパラドクスと、レベルアップによってバイク形態へと変わった仮面ライダーレーザーが並ぶ。

「あとは任せるぜ、十六夜」

パラドがそう告げながらも両手を操作しいくつかのエナジーアイテムを操作していく。

「よし、こんなもんでいいだろ」

『挑発』

準備は終わったとばかりに十六夜にオツケーを出すパラドだが、頭上にはいまだエナジーアイテムが置かれている。

「なら始めるか」

やはりバイクに変身した貴利矢を不思議そうに眺めていた飛鳥と耀、黒ウサギはその言葉に改めて意識を切り替えた。

「始まったらすぐに走り出せよ」

「おう、こっちは任せませ」

十六夜の近くでルイオス攻略部隊が固まったのを見て、十六夜は扉へと視線を向ける。

「黒ウサギの問いに応えるぞ。こうやって、開けるに決まってるだろッ！」

わずかな溜めが入ったあと、轟音とともに、白亜の宮殿の門を蹴り破った。

あまりにひどい光景を見守ったパラドは、ゲームが開始したことを確認した瞬間、待機させていたひとつのエナジーアイテムを使用する。

『発光』

瞬間、敵の視界は眩い光によって塗りつぶされた。

その隙を突いて、機動力のある十六夜と耀が飛鳥とジンを抱えながら兵士の合間を縫って駆けて行った。

「これで残ったのは俺たちだけか。しかも、ご丁寧に挑発とはね」

「いいだろ、これくらい。さて、ゲームスタートだ。つきあえよ、レーザー」

「つたく本当におまえは自由だな。永夢にはもつとしつかりしてもらわないと困るぜ。ほら、さっさと乗れ」

「一度乗ってみたかったところだ。行くぜ、レーザー。こういうときは確か、こう言うんだよな？　ひとつ走り付き合えよ！」

「丸パクリじゃねえか！　刑事さん怒るぞ!?!」

元の世界でともに戦った戦士。

人の身でありながら無茶をする困った刑事ではあったが、その正義感と勇敢さはCRのドクターだけでなく、協力してくれていたすべての者達を勇気付けた。

その彼のことを思い出しながら、パラドとレーザーの協力プレイによる攻略が始まった。

人命救助のTeam

一台のバイクと、それに乗る男が笑い声を上げながら兵士の集団の間を駆け抜ける。それだけ。

ほんの僅かな接触のみで、バイクが通り抜けた側にいた兵士たちが次々と倒れていく。

力量の差は歴然だと言うのに、兵士は構わずバイクを操縦する男目掛けて向かっていくのだ。まるで、彼のことしか相手として見ていないかのように。力関係も忘れ、ただ目の前の敵を倒すという意識のみが表面化しながらも。

「にしても多いな」

いつそかわいそうになるほどの敵を眺めながら、バイク形態になっているレーザーがつぶやく。

「多いだけだろ。数が多いならいろいろな攻略方法を試していればいつか終わりが来る」

彼を操縦しながら敵をなぎ倒している操縦士であるパラドがレーザーを加速させながらつぶやきを拾う。もちろん攻略の手を止めることなく、自分たちをスピンさせ

ながら兵士の集団を蹂躪する。

「自分が言うのもあれだけど、おまええげつねえことするな」

「いいだろ、これくらい。目指すはフルカウントだぜ」

「へいへい、付き合ってやるよ」

辺り一面、既に倒れた兵士で埋め尽くされているというのに、まだまだ敵は現れる。

いったいどれだけの兵士が配備されていたのかと思わせる大群は、しかし。

やはり誰もがパラドのみを視界に収め迫っていく。他の“ノーネーム”の面々を探すことはせず、ただ一心不乱に。

「レーザーを乗りこなすのもできたからな。もういいだろ」

自分が乗るバイクをひとつ叩いたパラドはレーザーから降りると頭上に出現したエナジーアイテムを弄りだす。

いくつものエナジーアイテムが縦に横にと動き、やがてパズルを完成させるかのようになどまっっていく。

「こんなもんか。よっと」

『高速化』『マッスル化』『ジャンプ強化』

パズルの中から三つのエナジーアイテムを使用し驚異的な速度でその場を飛び出したパラドは、自分たちに近づいてきた敵を素早い体当たりで上空へと打ち上げていく。

中には咄嗟の転機で打ち上げられる前に上空に退避した兵士もいたが、それを嘲笑うかのごとく、再びパラドが動き出す。

「どこに逃げてても無駄だ。おまえたちにこのコンボは止められない」

ジャンプ力を強化されたパラドは、たった一足の跳びで上空に放られた兵士へと接近し、そこを足場にして追撃を逃れた敵へと迫っていく。

当然、足場にした兵士は地面に蹴り落としながら進むのも忘れていない。

「あらら、こりゃ敵が悪かったな」

仮面の下で笑みを浮かべながら、残されたレーザーは暇そうにパラドと兵士たちの戦鬪を眺めていた。既に彼の出番は終わった。元々、十六夜たちをルイオスが待つ部屋まで送り届ければ作戦は終了したも同義。

この蹂躪は、必要のない工程なのだ。

「けどまあ、おまえたちもゲームを運営しているならある程度の覚悟は持たないとな。それこそ、ゲーム開発に命をかけられないなら、自分たちに勝てる見込みないぜ」

一度はゲームに屈した。一度は完全に敗北した。

元の世界でゲームをクリアすることがどれだけ大変だったか。被害は酷いものになったが、どれだけあの男が本気だったか。許されることではない。許していいことではない。

だが、それとは別に、ゲームの運営、制作のために文字通り命をかけた男のゲームと比べることすらおがましい。あの最悪のゲームを戦い抜いた者たちにとっては大群など意味を成さない。運営するつもりも、真面目に制作していないゲームなど元から攻略対象ですらなかったのだ。

それほど、永夢とレーザー、パラドにとってこのゲームはヌル過ぎた。

だからこそ、経験の浅い十六夜たちを送り出すこともすぐに検討できたし、彼らの今後を思えばと思えたわけだ。

「これで終わりか」

「だろうな」

コンボを決め、兵士を全滅させてきたパラドが戻ってくる。

追撃はなく、それどころか周りから聞こえる音は自分たちの話し声だけときた。これは残存勢力はいないと見ていいだろう。

「あとは十六夜待ちか」

「十六夜くんたち、な。彼一人で事足りるって気持ちはわかるけど」

二人して、“ノーネーム”の仲間が向かっただろう白亜の宮殿へと視線を向ける。

先ほどと変わって、宮殿の最上階からは多くの音が響いてくる。ルイオスとの戦闘は始まっているのだろうか、果たしてどこまで拮抗しているのか……。

「なあ、レーザー。あれは？」

「あれ？」

パラドが指差した宮殿の一部分。

よくよく確認してみると、ヒビが入っているようにも見えた。

「おいおい、中でなにやってるんだ？」

レーザーは嫌な予感があったのか、面倒そうな表情を浮かべる。

隣で待機しているパラドも、手にはマイティブラザーズXXガシャットを握り。

まるで二人の警戒を読みとったかのように、次の瞬間にはヒビを起点に亀裂が広がっていき、とうとう宮殿を形作っていた壁が吹き飛ぶ。

そこまでなら特に動くことはなかったのだが、ここで問題がひとつ発生する。壁とは別に、宮殿の中から飛鳥と耀が落下してきているのが見えた。

更に、追撃と言わんばかりに褐色の光が宮殿の奥から放たれる。光は雲に当たると雲を石化させ、あろうことか落下中の飛鳥たちに向かって落ちてくる。

「はあ!？」

「派手にやったな」

パラドは大凡の対局を見越していたのか、冷静にマイティブラザーズXXガシャットを起動させた。

『MIGHTY BROTHERS XX』

「手伝わってもらうぜ、永夢。大変身」

いつの間にか装着していたゲーマードライバーにガシヤットを装填し、ゲーマードライバーを開く。

『ダブルガシヤット!』『ダブルアップ!』

『俺がお前で! お前が俺で! マイティ! マイティ! ブラザーズXX!』

隣り合わせで集まった粒子が人の形を作り、それぞれ青緑とオレンジを基調としたエグゼイドが姿を現わす。

「超キョウリョクプレーでクリアしてやるぜ!!」

永夢とパラド。

二人のエグゼイドはそれぞれにガシヤットを挿むと、各々即座にガシヤットを起動させた。

パラドは再び仮面ライダーパラドクスへ。

永夢は――。

『MIGHTY ACTION X!!』

『GEKITTOTSU ROBOTS!!』

「大・大・大変身!」

両手に持つ二本のガシヤットをゲームドライバーに挿入し、ゲームドライバーを開く。

『ガシヤット』『レベルアップ』

『マイティジャンプ！』 『マイティキック！』 『マイティマイティアクションX！』

『アガツチャ！』 ぶっ飛ばせ！ 突撃！ ゲキトツパンチ！ ゲ・キ・ト・ツロボッツ！』
ゲキトツロボッツガシヤットを使用することによって召喚されたロボットゲームマーと合体し、赤を基調としたロボットののような意匠となり、腕にはゲキトツスマッシュャーが装着されたエグゼイドへとレベルアップを果たす。

「ノーコンティニューで、二人を救うぜ！」

「いくぞ永夢！」

パラドが高速でエナジーアイテムを操作し、

『鋼鉄化』『マツスル化』

二つのアイテムをエグゼイドへと使用する。

「ナイス、パラド！」

「ああ、行って来い！ 頼むぞレーザー！」

『ジャンプ強化』

バイク形態を保っていたレーザーにもアイテムを投げつけ、そのレーザーにエグゼイ

ドが乗り込む。

「仕方ねえ、飛ばすぞ永夢！」

落ちてくる石化した雲に向け、出現しているブロックを頼りに空を駆けていくレーザー。

もちろん、雲をどうにかしなければならぬのは当然なのだが、どうにもそれだけでは終わらない。

先ほど確認された光が再び降り注ぐ。今度はあたり一帯を無造作に、何本も。そのうちのひとつが、宙を漂う飛鳥と耀に迫る。

「まずい……ッ」

「あの光に当たったら……」

少し前に起きた光景を覚えていたのか、二人の少女が目を瞑る。

『ジャンプ強化』

「永夢たちは忙しいからな。そら！」

空中で飛鳥たちの前まで跳んできたパラドは、更にもうひとつのアイテムを使用する。

『反射』

目の前にバリアが展開され、いままきに当たろうとしていた光はそのまま進路を変え

跳ね返っていった。

その様子を確認したパラドは飛鳥と耀を両脇に抱えると、静かに地面に着地し二人を下ろす。

残るは落下中の雲のみ。

迎撃に向かった二人を信頼している彼は、なにひとつ心配などないという風にただ立ち、そのときを待った。

パラドの助力を受け送り出されたエグゼイドとレーザーは、二人の使用しているガシヤットによって展開されているブロックを起用に使い、強化されたジャンプ力を用いながらどンドンと石化した雲——もとい岩塊へと接近していく。

「まったく。追い詰められたのか隠していた駒を使ったのかは知れないけど、宮殿の中でだけでやってほしいもんだな」

移動しながらも、レーザーは愚痴をこぼす。

本来ならもう自分たちの役目は終わっていたのにこの様だ。とはいえ、救うべき人がいるのなら、やはり彼は走り続けるのだが。

「けど、あれを砕けば終わりだ」

「そういうこと。さあ、もうすぐ着くぜ。あとは頼んだぜ、永夢」
「ああー」

移動をレーザーに任せ、エグゼイドはゲーマドライバーに挿入されているゲキトツ口
ボツツガシャットを引き抜きく。

『ガツシユーン』

抜いたガシャットを、今度はキメワザスロットホルダーへと挿入し、上部のボタンを
押す。

『ガシャットー！』『キメワザ！』

とうとう、レーザーが岩塊の目前へと到達する。

エグゼイドはレーザーの上に立つと、腕を前へと向けた。

「みんなの命は、俺が救う！」

『GEKITOTSU CRITICAL STRIKE!』

腕に装着されていたゲキトツスマッシュャーを射出させ、岩塊へと突撃させる。次いで、レーザーの背を蹴り、エグゼイド自身も岩塊へと接近。先に射出させていたゲキトツスマッシュャーが岩塊に衝突して亀裂を入れる中、再度、追撃のパンチをゲキトツスマッシュャーと共に放つ。

亀裂が入っていた岩塊は二度に渡る衝撃に耐え切れず粉々になっていく。

破片はすぐに小さくなり、地上に到達するころには脅威とはなっていないだろう。

「よっしゃ、よくやったぜ永夢」

岩塊を破壊したエグゼイドを回収したレーザーは、安堵の息を吐きつつ地上へと戻っていく。

そこには、エグゼイドとレーザーの帰りを待つようにして立つパラドと、傍にはこちらを不思議そうに見つめている二人の少女の姿があった。

G a m e c l e a r を待つ君たちへ

障害を打ち払ったエグゼイドとレーザーが地上に戻ってくると、そこには仮面ライダーパラドクスと飛鳥、耀の三人がエグゼイドたちを待っていた。

「お疲れさん」

レーザーがエグゼイドとパラドクスに労いの言葉をかける。

彼らが自分たちのチームワークの良さを再度実感しつつ拳を打ち付け、するとパラドクスは途端にその姿を崩してエグゼイドの中へと消えていった。

「ありや、なんだ永夢。パラドはもうお休みか？」

「たぶん、パラドなりの遊び方というか、やり方があるせいかと」

「ふうん？ まあいいか。おまえたちなら間違えたりもしないだろうし、手綱を握り損なうこともないだろう」

どうあれ、パラドが永夢の中に戻ったのであればこの場での彼らの戦闘は本当に終わりだ。

早々に判断を下した仮面ライダーたちはゲーマドライブに挿入されているガシャットを引き抜く。

『ガツシューーン』

変身の解けた二人は、それぞれが念のため辺りを警戒しながらもパラドが助けただろ
う仲間の元へと近づく。

「お疲れ様、飛鳥ちゃん、耀ちゃん」

「そつちも中々盛り上がったみたいだな」

永夢と貴利矢が声をかけると、それまで二人の様子を不思議そうに眺めていた飛鳥た
ちがハツと我に返る。

ルイオスとのボス戦をおこなっていたはずの彼女たちがステージから弾かれたとい
うことは、それほど厄介な状況に持ち込まれたか、そうせざるを得ないところまで来て
いたのだろう。存外に強敵だったことを考えると、二人に大した怪我も見受けられな
かったのは幸いだった。

「先生たちも、終わったんだね」

永夢の元に寄ってきた耀が彼に確認すると、永夢が小さな声でパラドが相手をしてく
れたのだと伝える。

ゲームが大好きなパラドが、元の世界と同じ感覚で戦闘をしていたからこそその戦績と
も言えるのだが。

「そつか、パラドが」

一度ならず二度までも耀を助けた、もう一人の永夢とも言える存在。

パラドとの会話を思い出した耀は、彼の言っていたことを守るように、けれど彼らには聞こえる声で囁く。

「ありがとう、パラド」

微笑を携えながらお礼を述べると永夢から離れ、慣れない空中飛行で立ちづらそうにしている飛鳥の支えに行ってしまった。

（ありがとう、か）

（誰かに言われると、暖かくなる言葉だよな）

（そう、だな……ああ、助けた奴に言われると、こんなにも嬉しいんだな。なあ、永夢。誰かを救うつてのは、こんなにも心が暖かくなるんだな）

（うん、そうだね。パラドのおかげで、僕まで暖かいや）

これまで人々のために戦ってきたパラドだが、明確なお礼を言われることはなかった。そもそもとして戦いの場には仲間か敵しか残らないこと、パラドの存在が公になっていないことなど多くの理由があるが、どうあれ手を差し伸べた人から直接言葉をもらうのは初めての体験だったことに変わりはない。

（仲間以外からの言葉つてのも悪くない）

共に戦った一人の仮面ライダー。彼との会話を思い出しながら、パラドは思う。

(ウイザード……俺にもひとつ理解することができた。あのときおまえが俺の悩みを聞き、一緒に戦ってくれたときのことだが、いまならわかる。そうか、本来敵のはずの俺の話聞いたあるとき笑っていた意味が、いまならよくわかるぜ)

永夢にも伝わらないほど奥底で指輪の魔法使いへと・礼を伝えることを決めたパラドは再び意識を表面へと浮上させる。永夢の中から見えるのは、彼を——いや、彼の中にいるはずのパラドのことを考えながら笑みを浮かべる貴利矢の姿。

(……………)

「貴利矢さん、パラドがなにか用があるのかって」

「ん？ いやいや、用なんかないって。ただほら、なんつーの？ 自分、人の成長を見るのが好きなタイプなんで」

「パラドが絶対ウソだろって言ってますよ。裏で動いて人の葛藤を見ているのは好きそうだけどな、だそうです」

「自分の評価ひどくない!？」

パラドからとはいえ永夢の口から放たれた言葉に地面に膝をつく貴利矢。

人々のためにはあるが色々と手を出してきた彼からすればまっとうな意見ではあるのだが、どうにも共に戦った、特に相棒とも呼べる男の口から出た評価は暴言にも等しかったらしい。

「先生たちは仲がいいね」

「それよりも早く宮殿へ戻りましょう。十六夜くんだけに任せておくわけにはいかないわ。私たちだって、戦えるんだから」

それぞれが思い思いに言葉を述べる。

ただ、飛鳥の発言は耀とはまるで異なり、永夢と貴利矢は彼女からまだ戦わせろといった意思を強く感じ取った。

とはいったものの、一度ステージから落下してきた以上は復帰させるわけにもいかなかった。ギフトゲームのルール上、敵に姿を見られたわけではないのでルイオスに挑む条件は剥奪されていないはずだが、それでも永夢たちが首を縦に振ることはなかった。

「さあ、行くわよ春日部さん。挑戦権を持っている私たちがこんなところで時間を潰していいはずがないわ」

「え？ あ、ちよつと飛鳥……」

耀の手を引いて宮殿に戻ろうとする飛鳥だが、その行き先を貴利矢が塞ぐ。

「はいストップ。悪いけど、二人は自分たちとお留守番だ」

「退きなさい」

「退かない、退かない。簡単に通すと自分が永夢に敗者に相応しいエンディングを見せ

られちゃうでしょうが。人を守るための永夢は容赦ないし怖いんだよなあ。なにより、自分も永夢もキミらを戦わせるつもりないんで」

成長を促すために背中を押した。

危険が迫ったから支えるために助けた。でも、それはもう一度無茶をさせるためにはない。このままでは通用しない、敵わないということを知ってもらうためにも、判断を誤らせないためにも必要なことだ。

二人の後ろから、永夢も声をかける。

「ダメだよ。二人はここで、十六夜さんの勝利を待っていた方がいい」

「どうしてよ！ 私だって戦える！ なら——」

「ダメだ。キミたちをボスのところへは行かせない」

耀に協力してもらおうとする飛鳥に向け優しい笑みを向ける永夢だったが、なお進もうとする飛鳥に厳しい言葉を投げかける。

「いま十六夜くんのところに戻ったところで、彼の足手まといになるだけだ」

「——なんですって？」

プライドの高い彼女にとって効果的な言葉であり、飛鳥は隠すことなく不満気な表情を永夢に向けた。

「ゲームで言えば、二人は場外。もう負けている状態なんだよ。敗者にゲームへの参加

権は残ってない。なにより、二人が宮殿から落ちてきたこと自体、ボスには敵わなかったってことでしょ？　なら、あえて負けに行くくらいなら待つていた方がよっぽど正しい選択だと思うよ」

「…………ツ」

痛いところを突かれたのか、飛鳥が永夢から視線を逸らした。

既に原型を留めないまでに破壊された宮殿だが、ルイオスの切り札に対抗策がないのは事実だ。いや、ルイオス自身にさえいまはまだ届かないことも、飛鳥は理解している。それでも弱いことを認めるのは癪でしかない。自分はその他大勢ではないのだと声を大にして言いたい。弱いままで仲間と足並みを揃えるなどあつてはならない。

「だから私は！」

「どんな理由があつたとしても、僕も貴利矢さんも、キミを通すことはないよ。レベルが足りないのに無理に戦われて死なれたら困るんだ。もうこれ以上、ゲームで人が死ぬなんてダメだ」

確固たる意志を持ち飛鳥を止める永夢と貴利矢。

たかがゲーム。されどゲーム。

彼らにとって、ゲームで勝たなければという個人の意地よりも優先させるべきものがある。戦う前から結果の見えている勝負に出していいはずがない。

箱庭の世界にいたのが永夢であろうと、彼の仲間だろうと、世間を揺るがせたひとつのゲーム。その二の舞を踏むことは絶対に許されないのだから。

「ゲームは自分とみんなで楽しく真剣勝負するためのものだよ。決して、自分の価値を見せつける場所でも意地を張るための舞台でもない。今日ここで悔しい思いをしたなら、次の機会に活躍することを目標に備えることが本当に大事なことなくじゃないかな？」

あくまで優しく、彼は問いかける。

少女が間違えないように。誤った選択の末、後悔の念に囚われないように。そして、いつか彼女がゲームの舞台上で輝くために。

「……………あなただって、なんだか不思議だわ」

やがて、飛鳥が小さな声を漏らす。

途端、これまで張り詰めていた緊張を解き、耀の手を握るのもやめた。

戦いたい。レイオスに勝利して自分を認めさせたい。そういった気持ちは、いまも確かにある。けれど、それがなんだというのだろう。勝ちたいのと勝たなければならぬは違うのだ。

（そうよ……………私が欲しいのはあんな小物からの勝利じゃないわ。もつと大舞台で、私は必ず私がいだからこそその勝利を飾ってみせる。だから今回は貴方に託すわよ、十六夜く

ん！)

強い光を宿した瞳が、崩れ去った宮殿の一角を見上げる。

自分の中にある想いを伝え終えた飛鳥は深く息を吐き出すと、改めて永夢へと視線を移す。

「いいわ、今回は待つていてあげる。私だって、他人が追い詰めた相手を横から搔っさう趣味はないもの」

短く返事をする、彼らから離れて適当な木陰に座り込んだ。

「えっと、つまり……」

「十六夜くんが勝つて信じているから、今回だけは貴方たちの言葉を素直に聞いてあげるわよ！　って言ったんだよ。永夢にはまだ難しかったかー」

アハハ、とからかうように笑いながら、貴利矢が飛鳥の言葉を翻訳してみせたのだが、「そんなこと言つてないわ!？」

永夢をからかう前に飛鳥が釣れた。

「どうだかなあ？　女性の本音を言葉の裏に隠すつて言うし？　もつとも今回はちつとも隠れちゃいないがな。いいんじゃないの、仲間の勝利を祈つて待ったり託したり……最後の最後にそんな相手がいるつてのも、悪かない」

「貴方はいったい……」

反発するはずが、上を見上げて正体不明の懐かしさと共に語る貴利矢を見ていたらそんな気もなくなってしまう。

永夢は貴利矢の言葉を聞きながら、どこか浮かない顔をしつつも悲しみと嬉しさのなймаぜになった笑みを浮かべながらひとつ頷くだけに留めた。

そんな空気を壊すように、立派な宮殿が建てられていた最奥の部屋から轟音が響く。

壁のなくなったむき出しの舞台で、輝く翼と灰色の翼が羽ばたき、両手を広げる金髪の少年へと駆けていく。少年は獰猛な笑みを浮かべ、それらを迎え撃つために拳を握るのだった。

一撃、二撃。

空気が震えるほどの攻防はしかし、三度目には拮抗を保つことなく。

「終わりか」

最後の勝負を見届けていた誰かが呟いた。

直後、輝く翼を羽ばたかせてきた男が地に堕ち、次いで灰色の翼を持つ怪物の姿が霧散していった。

宮殿があつた場所にはただ一人。

逆廻十六夜だけが、どこかつまらなそうにゲームの終わりを眺めていた。

T r i b u l a t i o n 監察医

無事にゲームを乗り切った”ノーネーム”の面々は、大広間に集まった直後。

問題児三人は予想だにしていなことを口走った。

「じゃあこれからよろしく、メイドさん」

「え？」

「え？」

「……え？」

「……へえ？」

黒ウサギ、レティシア、永夢、貴利矢がそれぞれ反応を見せる。

「え？じゃないわよ。だって今回のゲームで活躍したのって十六夜さんと永夢さんたちだけじゃない。私と春日部さんに至っては助けられてばかりだったわけだし？ 黒ウサギは見ていただけだったものね」

「うん。おかげで私なんて痛い思いをした」

「つーか、”ペルセウス”に挑戦できたのは俺と先生たちのおかげだろ。所有権は俺たちで分配、4:4:1:1でもう話をついた！」

「なにを言っちゃってんでございますかこの人たち!? 第一、黒ウサギにはゲームに参加できない理由がございます!」

「そ、そうですよ! いくらなんでも勝手がすぎます!」

慌てまくる黒ウサギとジン。

「ポッピーみたいな感じだと思えばいいんですかね?」

「いやあ……さすがに同じ扱いをするのは悪いんじゃないかねえ」

どちらにとは明言せずに永夢の質問に答える貴利矢。彼らは彼らなりに平常運転を心がけようとしているようだ。

二人としては“ノーネーム”の楽しいな雰囲気壊す気もなく成り行きに任せるつもりらしい。決して問題児たちの行動を止めるのが面倒とかではないのだろう。

なにより、自分たちには被害がないのも大きい。

「んっ……ふ、む。そうだな。今回の件で、私は皆に恩義を感じている。コミユニティに帰れたことに、この上なく感動している。そして、勝手に試させてもらった二人にはそれなりに悪いことをしたと自覚もある。親しき仲にも礼儀あり、コミユニティの同士にもそれを忘れてはならない。キミたちが家政婦をしろと言うのなら、喜んでやろうじゃないか」

「れ、レティシアさま!?!」

まさか尊敬している先輩をメイドとして扱わなければならなくなるとは。

黒ウサギが困惑しているうちに、飛鳥は嬉々として服を用意し始めた。

「私、ずっと金髪の使用人に憧れていたのよ。私の家の使用人つたらみんな華もない可愛げもない人たちばかりだったから。これからよろしく、レティシア」

「フフツ、歓迎されたものだな。こうも笑顔だと、私も嬉しい。よろしく……いや、主従なのだから『よろしくお願いします』の方がいいかな？」

「使い勝手がいいのを使えばいいよ」

「そ、そうか。……いや、そうですか？ んん、そうですございますか？」

耀に言われたように、言いやすいものをいくつか言つていくが、

「黒ウサギの真似はやめとけ」

十六夜から指摘が入った。それも、笑いながら。

同時に、四人の間で笑いが伝染する。

なんだかんだという間に使用人としての位置に収まったレティシアは、文句を連ねる黒ウサギと聞き流している十六夜たち三人の問題児の遣り取りを穏やかな気持ちで眺めていた。

——”ペルセウス”との決闘から三日後の夜。

子供たちを含めた”ノーネーム”一同は水樹の貯水池付近に集まっていた。

「えーそれでは！ 新たな同士を迎えた”ノーネーム”の歓迎会を始めます！」

子供たちから歓声が上がリ、周囲に運ばれた長机の上にささやかながら並ぶ料理に手を伸ばしていく。

本当に子供だらけの歓迎会だが、四人は悪い気がしなかった。

「だけど、どうして屋外の歓迎会なのかしら？」

「うん。私も思った」

「黒ウサギなりに精一杯のサプライズってところじゃねえか？」

「あまり無理しないで欲しいところだけどね」

「そうそう、自分たちに対して気を使わなくていいんだって。自分なんか後から来た完全な部外者なわけだしな」

張り切つて子どもたちに指示を出し、あれこれと進めていく黒ウサギを見ながら、新たな同士たる彼ら彼女らは思い思いの声を上げる。

少年少女たちは声とは裏腹にどこか楽しそうに、大人組は面倒のかかる下の子たちを見守るように。

永夢と貴利矢にとっては実際の歳など関係なく、言動で扱いを決める性質なためか、

それともそうした相手がいたためか。黒ウサギやレティシアのことも、本人から申告されない限りは扱い方を変えるつもりはないらしい。

「僕たち、どうなるんですかね」

「さあな。でも、なんとかするだけだろ。いままでだつてそうしてきたんだ」

二人ともよく理解している。ペルセウスとの一戦はただのチュートリアル。この先に続くコミュニケーション復興への小さな、あまりに小さな一歩であろうことも、元の世界に戻る方法がまるでわかっていないことも。

「それでもだ。だから永夢、お前の運命は、おまえが変わえろ」

「………はい。僕の運命も、パラドや貴利矢さん、みんなの運命も、きつと」

「言うようになったじゃねえの」

二人はお互いに笑顔を見せながら頷きあっていると、黒ウサギが大きな声を上げて注目を促す。

「それでは本日の大イベントが始まります！ みなさん、箱庭の天幕に注目してくださいー！」

永夢も貴利矢も、十六夜たちコミュニケーションの全員が言われた通りに箱庭の天幕へと視線を向ける。

満天の星空。先程から自分たちを照らしてくれている、空に輝く星々。

異変が起きたのは、二人が見上げてから数秒のことだった。

「えっ……っ？」

永夢が声を上げる。

それから、連続して星が夜空を流れた。

「流星群ってやつか」

普段から声を絶やさないタイプの貴利矢もこれには声を失い、一人の観客としてただただ見入っている。問題児たちも同様に、元の世界ではそう目にするこのない光景に
楽しそうだ。

十六夜はなにやら、してやられたと言わんばかりにしていたが、それでもやはり嬉しそうに。

少し離れた位置からはひととき大きな歓声が聞こえ、こどもたちがはしゃいでいるのがわかった。

「この流星群を起こしたのは他でもありません。我々の新たな同士、異世界からやってきた四人がこの流星群のきっかけを作ったのです」

驚く姿に満足がいったのか、笑顔を浮かべた黒ウサギが説明を始める。

「箱庭の世界は天動説のように、すべてのルールが此処、箱庭の都市を中心に回っており
ます。先日、同士が倒した“ペルセウス”のコミュニティは、敗北の為に”サウザンド

「アイズ」を追放されたのです。そして彼らは、あの星々からも旗を降ろすことになりました」

永夢と貴利矢はしばしの驚きを混じえつつも、敗者の至る道かとなんとか受け止めるが、十六夜たち問題児三人は驚愕し完全に絶句していた。

刹那、一際大きな光が星空を満たした。

「今夜の流星群は“サウザンドアイズ”から“ノーネーム”への、コミュニティ再出発に対する祝福も兼ねております。星に願いをかけるもよし、皆で鑑賞するもよし、今日は一杯騒ぎましょう！」

嬉々として杯を掲げる黒ウサギとこどもたち。だが、異世界から来た彼らはそれどころじゃない。

「星座の存在すら思うがままにするなんて……ではあの星々の彼方まで、そのすべてが、箱庭を盛り上げる為の舞台装置ということなの？」

「そういうこと……かな？」

その絶大ともいえる力を見上げ、二人は茫然としている。

だが十六夜は、流星群を見ながら感慨深くため息を吐いていた。

「……アルゴルの星が食変光星じゃないところまでは分かっていたんだがな。まさかこの星空のすべてが箱庭の為だけに作られているとは思わなかったぜ……」

星空を見上げ、先程までペルセウス座が輝いていた場所を見る。

「ふっふーん。驚きました?」

黒ウサギが跳んで十六夜と燈火の元に来る。

「やられた、とは思ってる。世界の果てといい、水平に廻る太陽といい……色々とバカげたものを見たつもりだったが、まだこれだけのショーが残ってたなんてな。おかげさ
ま、いい個人目標もできた」

「おや? なんでございます?」

黒ウサギが興味津々といった様子で迫ってくる。

応えるように、十六夜は消えたペルセウス座の位置を指差しし。

「あそこに、俺たちの旗を飾る。……どうだ? 面白そうだろう?」

今度は黒ウサギが絶句する。しかし、途端に弾けるような笑い声を上げた。

「それは、とてもロマンが御座います」

「だろ?」

十六夜は寝転び、ゆっくりと空を眺める。

隣には黒ウサギが座り込み、なんとなしに共に空を見上げる。

「初々しいねえ」

「え? なにがですか?」

「はあ……永夢、お兄さんはいろいろと心配になってきたんだけど」

彼らの様子を眺めていた貴利矢は、永夢の反応に呆れと疲れを見せながらため息を吐く。なんだかんだと助け合い、ノリ良くいじっている相棒ではあるが、どうにもゲーマーの地が強いのか出会いもあまりないからなのか。

「医療と戦いに身を置いてたことを考慮したとしても鈍すぎるぜ永夢」

「え？　ちよ……なにがですか貴利矢さん!？」

「さーな」

訳がわからないと慌てる永夢を横目に、貴利矢は一人、仲間たちの輪から外れて暗がりへと進んで行く。

（現状は決して悪くない。けれど良くなったかと言われるれば変化は無しと言ってもいい）

ここに来た目的を思い出しながら、貴利矢はなお歩みを止めない。

賑やかな声が聞こえてこなくなるまで進みつつ、周りに人がいないことを確認して、ようやくひとつのガシャットを取り出す。

「つたく、神もふざけたものを渡してくれたな。これが新しく開発されたガシャットだとは思えねーんだけど？」

貴利矢の握る、檀黎斗神より預かった永夢に渡すはずだったガシャット。

「こっちは永夢に返還するにしても、こいつばっかりはなあ……っというか、これどう使えって言うんだよ。自分たちには使いようがないだろうに」

貴利矢と永夢。ふたりにひとつずつ渡されたガシヤット。貴利矢が受け取った方はいい。むしろ使い慣れているとさえ思っているものが返ってきただけなのだから。けれど、もうひとつ。

「どうしたもんか……」

久々に神の扱いに困り果てる。

どの場面、どのような機会にこんなものを渡せというのだ。

「あの超問題児が……」

誰に知られることもなく、一人の監察医の苦難は続く。

l o g i n 超問題児

暗い部屋で一人、一心不乱に画面と向かい合う男性。

「永夢たちは何度もガシャットを起動させている……送り込んだ九条貴利矢のセーブデータをみる限り、彼も無事に合流できたようだな。でなければ困っていたところだ」
ウインドウに表示される波形やグラフ、プログラムなどのいくつもの情報に目を向けながら、彼——檀黎斗神は笑みを浮かべた。

黎斗の元に緊急事態だとポツピーが駆け込んできてから既に一週間が経過している。その間に永夢の仲間たちには原因不明の突如発生した『箱庭』というゲームのことや、永夢、パラド、貴利矢の消息など、把握していることはすべてポツピーが説明済みだ。

「しかし、こうもゲームに対してのプロテクトが強いはな。私の神の才能を持つてしても干渉するのが精一杯……いったい誰が開発したものだ？ 解析が済めばまた一歩、私の理想のゲームに近づくと言うのに！」

キーボードに手を叩きつけた黎斗は、成果が出ないのか苛立ちを募らせていた。

送り込んだ貴利矢は永夢を連れてどころか、自分一人でさえ帰ってくることはない。彼ならば状況を知った上で一度戻って来る選択肢があるにも関わらずだ。

加えてここ一週間、ずっと『箱庭』について調べているが、わかっているのはこのゲームがなんらかの方法を用いてこちらの世界に干渉していること。また、向こうのゲーム世界への参加方法だけだ。この参加方法も、こちらから好きにできるわけではなく、貴利矢を送り込んだゲートが常時開放状態を保っているだけのこと。

「こうしている間にも、永夢たちは未知のゲームをプレイしていると言うのか!?! こうなれば私もゲーム世界へと赴いてゲームそのものを把握してくれる! そうと決まればさっそく外へ出るしかないな」

「くーろーとー?」

両手を広げ、名案とばかりに叫んだ直後。

檻の向こう側。筐体の外である現実世界から、ポツピーが明らかに不機嫌な顔で彼の名を呼んできた。

「ブハハハハッ! 喜べポツピー。私が向こうへ行けばゲームはすぐさま解析、クリアされるだろう。私と永夢、二人の力があれば不可能なことなどない。すべてはこの私、檀黎斗神の才能があつてこそだがなあ!」

ポツピーの声などなんのその。

私欲のため、知識のため、ひいてはゲーム制作のためになるならば、彼はどれだけ愚かしい行為だろうと正当化する。たとえそれが仲間を、他人を、自分さえも賭けなければ

ばいけなかったとしても。

笑い声を上げ続ける黎斗にため息をひとつ吐いたポッピーは、けれど彼との対話を諦めはしなかった。

「黎斗！ 勝手にいなくなったら大問題になるんだからね!! お願いだから話を聞いて。黎斗にも悪い条件ばかりじゃないはずだから」

「なに？ それならそうと早く言ってくればいいものを。それで、話とはなんだい、ポッピー」

自分に利益があるならなんのその。

先ほどの態度が嘘のように静かに聞く体勢を取る黎斗。

貴利矢が残っていたなら小言のひとつやふたつは言っていただろうが、頼りになる男はいまやゲームの中だ。ポッピーも出かかった言葉を飲み込み口を開く。

「黎斗に正式に衛生省から通達があったの。永夢の搜索と、発生している新たなゲームが被害を出す前に対応してほしいって」

「ほう……今回は随分と遅かったようだが、やっとか」

「衛生省だって簡単に動くわけにはいかないの。数日に渡つての永夢の搜索に、新たなゲームに対しての警戒。また、生まれかねない新型ウイルスの脅威。あげていけばキリがないよ」

今回ばかりは、衛生省の方に話を通すだけでも大変だった。

仮面ライダークロニクルは終わりを告げ、未曾有のパンデミックも食い止めた。あとは、残ったバグスターウイルスとどう向き合っていくか、被害に遭った人たちをどのようにして救うかという研究という段階に来ていたのだ。

そこにきて、正体不明のゲームが開始され、挙句CRのドクターが行方不明など怪しいにも程がある。当初は永夢が容疑者だと疑われた程だ。もともと、仮面ライダークロニクルのクリアへの貢献と、普段の彼をよく知っている者達の声もあり、正式に被害者へと立場は変わっていったのだが、この辺りの細かい経緯はいいだろう。

「なるほど。それなりに考えてから判断を下したわけか。それでも遅いが、まあいいだろう」

どうあれ気を遣う必要はなくなった。

彼のことを聞いてか、彼の自由を拘束するための妨害はなくなり、久しぶりに筐体の中から、現実世界へと姿を現す。

思いう存分、自分にもわからない謎のゲームの解明に明け暮れることができる。黎斗は黒い笑みを浮かべる。あわよくば向こうで永夢と貴利矢、自身を実験体としてでもなにかしらの成果を上げてくるに違いない。

「こちらに留まってゲームそのものを解析、経過の確認をしてもよかったが、やはり

私も言ったように向こうに行くのが最もな判断か。手っ取り早いのも事実だ」

ゲームドライバーといくつかのガシヤット。そして、この一週間で修復を終えた、当時永夢のために完成させた黄金のガシヤットを握る。

「ついでだ、これも貰っていい」

貴重だとはわかつている。いまやどれだけ重要な物であるかなど、問われるまでもない。

後々文句を言われるとわかっていてなお、黎斗神はプロトガシヤットと呼ばれる物のうちからひとつを手にとった。

「ちよ、ちよつと黎斗!」

この行動にはさすがのポッピーも驚きを隠せない。

「おそらくあつて悪いものではない。向こうでどうにかできれば、いい戦力になるのは間違いないだろう。幸い、向こうにいるのは永夢とパラド、九条貴利矢の三人だからな。これを持っていったとしても否定はしないはずだ」

淡々と語っているが、ポッピーも箱庭にいる三人のことは理解しているつもりだ。余程のことがない限り彼の言葉通りになる可能性は高い。下手を打てば永夢から敗者にふさわしいエンディングを見せられることは周知の事実なので、こと彼の前ではやりすぎるといったこともない……はずだ。

「で、でも待ってよ黎斗。持って行ったとしても、使い道が……」

「もちろんあるとも。私たちの誰かが使うもよし。そして———するのも自由だ」

既に使うことはなくなっているが、念のためにと回収しておいたバグヴァイザーすらも持ち出す始末。

この短時間で、自分が必要であると判断した機器を次々に持ってくる。

とは言え、さすがにゲーム開発に扱っていたパソコンやその他機械類を持つていくわけにもいかない。残念なことだが、最優先するべきはゲームのクリアと考えるべきだろうか。

「九条貴利矢が一度も戻ってこないのは気になるが、致し方ない。クリアするまでこちらに戻れない可能性も考慮した方がいいな。ポップピー、キミはこちらに残るといい。いざというとき、他の二人を導く者が必要だ」

「でも———」

「永夢なら私が連れて戻って来る。心配はいらない」

これまでの雰囲気とは打って変わり、真面目なものへと変化していく。

「彼は私にとつても貴重な相手だ。まだまだゲーム開発に協力してもらわなければならぬ程度にはね。だからポップピー、その間は残って私の開発データを守ってくれ」

「はあ、わかったよ」

最後の言葉は聞かなかったことにし、とりあえずやる気だけはあるといふ意志だけは受け取ったポッピー。彼女はひとつ笑顔を浮かべると、

「でもね黎斗。もちろん貴利矢のことも気にかけてくれてるんだよね？」

ここまでずつといつもの調子で話していたポッピーの声音が、一段階低くなったのを黎斗は悟った。

同時に、マジなやつだとも。

「も、もちろんだ」

「本当に？ さつき永夢しか名前が上がらなかったのにな？」

「あ、ああ……当然、九条貴利矢のことも確認してくるとも」

「いい？ 黎斗に仲良くしてくれるのなんて本当に貴利矢くらいなんだから、友達のこととはしっかり助けないとダメだからね？ わかった、黎斗！」

彼女の勢いに押され、首を縦に振るしかなかったと、後に彼は語ったとか。

その後もなにか持ち出そうとするたびにポッピーから小言が入り、当初の予定よりも軽装備になったものの、一通りの準備を終えた。

「さて、本当に持つて行つてはいけないのかい、ポッピー」

「あれもこれも持つてるわけないでしょ？ 自分で持つていく物くらいちゃんと選んでよね」

「選んだからあんなったのだが」

机の上に広げられた数々の機器。本当に必要な物だけに絞った結果、机が物で埋まる程の余計が出たのだ。これほどの量を持って行ったところだなに使うのかポッピーには検討もつかないが、黎斗にとってはできれば持って行きたかったのだとか。

「ううむ……仕方ない、惜しいがこれらは置いていくとしよう」

正座させられている黎斗が悔しそうにつぶやく。

「なんのために黎斗を自由にするのか忘れないで！ これでも衛生省にはかなり無理言ってるんだから」

貴利矢をもつてしても超問題児と呼ばれた男を野放しにすることがどれだけ危険なことかは関わった者全員が知っている。そんな相手の自由を手に入れるなど、仮面ライダークロニクルでの実績があったとしても容易なことではない。

ポッピーは約束させられたため伝えるつもりはないのだが、ここにいない永夢の仲間——鏡飛彩、花家大我の両名からの支持もあり勝ち取ったものと言っても過言ではないのだ。

二人からは、

『あいつには黙っておけ。調子に乗らせるとロクなことがない』

『ゲームには伝えるんじゃないやねえぞ。いいように利用してやっただけだ。勘違いするな』

とのことだったが、そんなこと、ポッピーの前で正座している黎斗は考えもしないだろう。

彼は自分に向けられている感情は把握しているつもりだ。飛彩と大我から向けられる視線に込められた思いも、それなりには感じ取っている。であるからこそ、及ばぬ思考もある。

「ほんとはみんな、ちょっと心配しているだけなのかもね」

「ポッピー？　なにか言ったかい？」

「え？　あ、ううん、なんでもない」

真実を知っているにしろ、知らないにしろ関係ない。黎斗が動けることだけが結果であり、彼が重視するのもその一点のみだろうことは理解している。

「時間が惜しい。大部分の荷物は消えたが、行くとしよう」

「黎斗……」

「問題ない。これから行くのは九条貴利矢ではない。この私、檀黎斗神だあ！　一切の心配は無用だ。彼らを連れて帰ってくるよと約束しよう」

開かれているゲートに向かう黎斗は、ポッピーを安心させるように大声で叫ぶ。

待ち受けているのは得体も知れないゲームの世界。

エグゼイド、レーザー、パラドクス。よく知る仮面ライダーたちが幾度となく変身を

繰り返す、戦闘が主なゲームであることは検討がついている。

「気をつけてね、黎斗」

止めてもすぐに行くだろう彼にそう告げると、ゲートの前で立ち止まった黎斗が振り返り、優しい笑みを浮かべる。

瞬間、粒子となってゲートに吸い込まれていき、その姿を最後に現実世界から彼の存在が消失した。

ありえない程の高度から真つ逆さまに落ちていく感覚を、黎斗は味わっていた。

「なんだこれはあつ!? チュートリアルにしてはあまりにも酷いゲーム! ん? あれは——」

地上に落下していく最中、倒れ伏す一人の青年の姿を捉える。間違いない。彼こそは探していた人物。

「宝生永夢ウ!」

上空から確認できる、戦火に包まれた辺り一帯から彼の状況を悟った黎斗は、即座にひとつのガシヤットに手を伸ばす。

いまここに、最悪の超問題児が箱庭にログインした――。

お約束なFalse recognition

それはまだ、日が昇ったばかりの朝早くのことだったと、後の加担者は語ったとか。

一人、〃ノーネーム〃の敷地内を散歩がてら見て回っていた貴利矢は、視界の端に不思議なモノが映り込んだことに気づいた。

「なんだ、あれ……」

奇妙な——いや、違う。

少々よろしくない人物を抱えてはいるが、あれは〃ノーネーム〃の誇る問題児三人衆ではないか。

「こいつは厄介ごとだな。永夢はまだ起きてないだろうし、仕方ない」

本来ならありえない荷物を抱えているのに平然と歩く三人に近づきながら、貴利矢は考える。

問題児3人の同時行動はそのまま面倒なことに発展することと同義だ。これは元の世界での経験が何よりも物語っており、超問題児である神の野望でどれだけの被害が出たことか。

「まあ、その点あの子らはぶっ飛んではいるが素直で純粹だし、やつちやいけないラインは測れてるっばいからいたずら程度で済むっちや済むんだが」

それでも見てしまった以上、放置しておくのもよくない。

一言。たつた一言でも伝えておくことで免罪符は得られるだろう。どうせ問題児は人の言うことを聞かないので巻き込まれたときに止める努力はしたんだという事実さえあればいい。

ようするに、本気で止めようなどとは微塵も考えてはいないのである。それどころか「貴利矢は知っていたが止めなかつた」などと暴露されて黒ウサギの怒りを買わないように立ち回っているまでである。

「仲良くお出かけか？」

考えをまとめながら、貴利矢は十六夜、飛鳥、耀、なぜか簀巻きにされた状態で抱えられているジンに話しかける。

「んー！ んんっ!!」

「あー、悪いなジンくん。なに言ってるかサツパリわかんないんだけど？」

口を塞がれているので呻き声だけあげられても困るのだ。

「ヤハハ、ジンは『これは僕の趣味だから邪魔しないでください』って言ってるのさ。いまだき珍しい、好きなことを人の目なんか気にせずにできる大物ってことだ」

「へえ……確かにそいつは貴重な人材だな」

「んー！ んんー!?!」

十六夜と貴利矢が同時にジンに視線を向けると、否定するようにあらん限りの力で首を横に振る。

しかし誰も彼もがジンから目を逸らし、あたかもなにも反応がなかったかのように扱
う。

「なにかするつもりなら、あまり面倒かけない範囲でやれよ」

「お、なんだレーザー。止めないのか？」

「十六夜くんみたいなたいタイプは止めても無駄だってよく知ってるだけさ。だからあれだ、貴利矢さんは問題児が行動を起こそうとしたのを止めたけど力不足でしたってこと
にしておいてくれればいいよ」

最初にやんわりと止めたでしよ？ とは貴利矢の言葉だ。あまり面倒かけない範囲
で、というのは問題行動は慎め、という意味で言っているので本人的には止めた内に入
るらしい。

だって、どう見ても面倒ごとだ。

それも、ただの面倒ごとではない。問題児三人が結託しての面倒ごとと来た。

首を突っ込むなどバカけている。ここはひとつ、問題児との接触は最低限に留めて

行ってもらうのが最適だろう。

「いいのか？」

「というか、止める・気力がまるでないのだけれど……」

「お疲れ？ お医者さんともよく話してるし、気疲れ？」

そんなことなど知らないであろう十六夜、飛鳥、耀はあまりの素っ気なさに貴利矢の体調を心配しだす。

「疲れてるかどうかで言えば疲れてるな。自分もいろいろと抱えているもんが多くてねえ」

主に神のせいなんだが……と小声で付け加えたが、問題児たちの耳に届いた様子はない。

箱庭に行く際、どう考えても使えないガシャットを寄越してきた相手だ。それも、貴利矢への嫌がらせではなく、永夢の力になるだろうと推測して贈ってきたもののはず……はずなのだが。

いままち続けているガシャットに、ポケットごしに触れる貴利矢。当然、ガシャットが答えを示すことはない。

「なんだかなあ」

空が青い。

(考えることが多いな……ついでに、神もそのうちこつちに来そうな気配があった。ポッピーが止めてくれていればいいが、あまり期待は持てないってところが本音なんだが。あとの三人が神の拘束を解かないよう衛生省に根回ししといてくれるのを期待するしかないな)

ポッピーは甘いところがあるが、元の世界に残っているドクター他三名は神に敵しいところがある。彼らなら恐らく、この非常事態に好き勝手な行動を許すような真似はしないだろう。

そんな希望的観測が貴利矢の中には確固たる自信として存在している。

「間違つても来て欲しいなんて思わない方がいい。あいつは人の嫌がることをする天才だからな。うん、よしそうしよう」

大きく伸びをして、深呼吸をひとつ。

「ねえ、やつぱり疲れているんじゃないかしら?」

「いや待て。独り言つてのは自信のないときに自分を励ますための言葉だつて聞いたことがある。どつちかつつとその傾向が強いように見える」

十六夜の言葉にしばし考え込んでいた耀は、あつ! と小さな声を漏らしながら、あの推測に至る。

「九条先生はスランプ?」

「の可能性が高い」

「人は見かけによらないのね」

「うん。思ったより繊細なのかも。これからは言動に気をつけてようと思いますん」

「そうだな。ああいった大人の扱いは気をつけてやらねえとな」

「あら、そうなの？ なら私も気をつけないといけないわね」

ニヤニヤ、ニヤニヤと。問題児は面白いものを見たと言わんばかりの表情で白々しくも言葉を並べていく。

無論、それに気づかない貴利矢ではない。この場所にいたのが永夢であったなら心配してくれているのかと誤解していたかもしれないが、都合よく解釈できる程純粹ではないのだ。

「おいおい、人がせっかく元気出そうとするとところを邪魔するもんじゃないぞ？」

疲れた表情で貴利矢が咎めるが、ヤハハ、とひとつ笑った十六夜は隣にいる耀に話しかける。

「そうだと春日部。レーザーは疲れてるんだ。弄っちゃかわいそうだよ」

「む……十六夜が始めたこと。飛鳥の方が乗り気だった」

「え？ わ、私!? ちょ、裏切ったわね春日部さん！」

三人仲良く、楽しげな光景。

これでジンさえ担がれていなければ微笑ましいのだが……。

「はあ、わかったわかった。おたくらが自分の話を聞く気がないのはよおくわかった。まったく、問題児は世界共通の厄介者だ。ほら、事情は知らないけど急いでるんだろ？ 早く行きな」

「お、そうか？ 確かに時間との勝負ではあるんだよな。じゃあなレーザー。お医者さんも連れて、またあとで会おうぜ」

サムズアップして見せた十六夜は、そのまま飛鳥、耀を連れて歩いて行ってしまった。唯一、ジンだけが運ばれながらも最後まで助けを求めていたが、貴利矢にはSOSのメッセージは届かなかったとか。

彼らの背中が見えなくなるまで見送った貴利矢は、意識的にひとつ息を吐く。そんな彼の隣から、不意に声が漏れる。

「十六夜たちが動き出したか。あいつ、なにか企んでいたし、面白くなりそうだ」
「うおっ、パラド!？」

突如として姿を見せたパラドに驚き、後方へと下がる貴利矢。

「よお、レーザー。永夢と違って起きるのが早いな」

「あ、ああ。いや、自分たちにとっては睡眠も必要かって聞かれたら微妙なところではあるんだけどな」

「寝ないと永夢がうるさいぞ」

「知ってる。だから遅寝早起きはしてるさ。それよりもだ。おまえ、勝手に出てきていいわけ？」

「ここで暮らす“ノーネーム”の面々に見つかれば、間違はなく不審者扱いで追われることになる。永夢の中から出てくるということは、存在を知らせていない同士からしたら知らない男性が急に増えただけ。警戒心を抱くなどという方が無理だ。」

「まずいだろうな。永夢が起きない間は暇だから窓の外を眺めてたんだが、そこでちようどレーザーと十六夜たちが映ったもんだからな」

「つい来ちゃいましたってか？ 別に自分は構わないけどよ、永夢にも迷惑がかかるから程々にして戻ってやれよ？」

「ああ、任せとけて。差し詰め、いまはかくれんぼの最中みたいなもんだからな。誰にも見つからずに暇をつぶして、永夢の元に戻ってやるよ。それとなレーザー。永夢にも話さないで面白いことやってるなんてズルいぞ。今度ゲームに行くときは俺も混ぜるよ」

楽しそうな笑みを見せながら辺りを見渡すパラド。

箱庭に来てからは四六時中永夢と共にいるから満足気ではあるが、その実、一人になりたい時間もあるのかもしれない。というか、ついでのように告げられたが、貴利矢が

誰にも悟られることなく動いていたのはバレていたらしい。

「つたく、わかりましたよっと。ってか、バグスターでも、人間に近づくことはあるってわけか……ああ、因子はあるんだっけ？ どちらにせよ、些細なことか」

知られたとしても、特に痛い内容なわけではない。いずれわかることではあるので慌てた様子もなく意識を切り替える。

いま見ているものが真実なだけに、どうあろうとその在り方を少し嬉しそうに眺める貴利矢。だが、そうゆっくりしていられるわけでもなさそうさ。

「な、……なにを言っちゃってるんですかあの問題児様方あああ——!!!」
遠くから、黒ウサギの絶叫が届く。

「あーあ、こりや十六夜くんたち絡みかなあ。パラド、永夢も起こしてこいよ。散歩は終わり、鬼ごっここのスタートというこぜ」

「いいぜ。俺と永夢のコンビが一番多く捕まえるに決まってるけどな」

言うが早いか、パラドは粒子状になると永夢の部屋へ行ってしまった。

「相変わらず親離れはできてないのな。そつちはゆっくりすぎてもあれだけど、子離れもできてないし仕方ないか」

誰もいなくなった散歩道。

考えるべきことはまだ多く、的確な判断をしなければならぬこともあると予測して

いる。

「それでも、俺は永夢を帰さないといけなわけ。はあ……黒ウサギもだが、俺も大概苦勞してんのな」

もう一度、深くため息を吐く。

「でも、神が面倒な事件を起こさないだけ、こっちは平和なのかもしれないか」

黒ウサギ、レティシアが貴利矢の方へ駆けてくるのが遠目にだがわかった。その後ろを、いまにも転びそうな足取りでついてくる永夢の姿もだ。

どういうわけか、その光景を見ていると笑みがこぼれる。

「つたく、どうかしてる。しょうがねえから、自分もちゃんと乗ってやるよ」

嫌な予感はあるではない。

元の世界にいた仲間は信頼しているし、自分たちだけでもなんとかなるだろうという気持ちもある。

「さて、永夢たちに協力するとしましようか」

自分の犯したミスに気づくこともなく、貴利矢もその場から駆け出していった。

To approach 大人組

貴利矢の元に、何人もの人が押し寄せてきてから数分。

落ち着きを見せはじめた黒ウサギは、集まった面々を見ながら一枚の紙を取り出す。

「そいつは？」

「十六夜さんたちの書き置きです。まずは読んでください！ それで読んだら協力してください！ 一大事なのですよ!?!」

促されるままに目を通す永夢と貴利矢。

「なにになに？ ……ハハツ、こいつはまずいな。自分もコミユニテイのトップだったら冷静じゃいられないわ」

「ちよつと貴利矢さん!?! 笑ってる場合じゃないですよ！ 早く十六夜くんたちを追いかけないと！」

「あー……だな。流石にこれは真面目に追わないとダメか」

全員の視線が集まる先。

一枚の紙には、祭典に参加することと、彼らも後から必ず来ること。そして、祭りのことを黒ウサギたちが黙っていた罰として今日中に問題児三人を捕まえなければ、永夢

と貴利矢を含めた異世界からやってきた五人全員が脱退する旨が書かれていた。

「これ、僕たちも強制つばいですね」

「あの子らがこういった性質の悪い冗談を言うとは思えねえ。やつぱり本気なんだろうよ」

「祭典のことを隠していた点は失敗でしたね。僕もいま初めて知りましたし」

と、指示を仰ぐように黒ウサギに目を向けるが、当の黒ウサギは純粹な永夢の言葉に地味に傷つけられていた。ついでに現実的な貴利矢の言葉も痛いようで、頭を抱えている。

「誰だつて隠し事をされれば多少なりとも腹は立てるし、下手をすれば信用を失う。当然のことと言えばそれまでだけど、凹んでる間に十六夜くんたちはどんどん遠くに行つちまうぞ」

再び貴利矢から放たれた言葉に、黒ウサギのウサ耳がピクピクと反応を示す。

その様子に、貴利矢が永夢にもなにか言うように動作だけで促す。

「僕たちも十六夜くんたちを捕まえるのに協力しますから、行動を始めましょう?」

更に耳の反応が増え、やつとのもので抱えていた頭が前を向く。

「ほ、本当でございますか!? 十六夜さんたちに賛同して途中で裏切ったりとかは!」

「しませんよ。ね、貴利矢さん」

「そりゃ、自分たちはしてる余裕ないからな。ここを追い出されたら野宿だぜ、野宿」
現状を鑑みて、*「ノーネーム」*以外のコミュニケーションに入る考えはない。

いずれは帰る道を模索しなければならぬし、なにより未知の場所では信用できる者たちの存在がどれほど重要かなどわかりきっている。この場所を自ら手放すなど、愚策も愚策。

「まだまだここでお世話になる気満々だから、さつさと十六夜くんたち全員捕まえて仲直りしようぜ」

「べ、別に喧嘩をしたわけではないのですが……でも、ありがとうございます、貴利矢さん」

しかし、あながち鬼ごっここと称した貴利矢の言葉も間違いではなかったわけで。

「まとまったのなら話は早い。十六夜たちが三人結託して動くというのなら、私たちも四人で協力して彼らを捕まえるでしょう」

話を聞いていたレティシアが他の三人に声をかける。

「で、ですがレティシア様。私たち4人で行くにはコミュニケーションの全財産でも足りるかどうか……こどもたちのことや、今後のことだっておりますので」

「むっ……そうだったな。すまない、忘れてくれ」

元はと言えば、十六夜たちに祭典の話の隠していたのは路銀を捻出できない問題が念

頭にあったからなのだ。そのような経緯もあって、今回の問題を引き起こしている。

そう、貧乏は辛いのだ。

「財産……つまり金ってわけだ」

貴利矢が唐突に走り出し、自分の部屋へと戻っていく。

何事かとしばらく待っていると、小さな袋を手にながら戻ってくる。

「黙っていたおかげで十六夜くんたちにも気づかれてなかったんだが、それが裏目に出るっていうんだからどうしようもないよな」

ちよつといい笑みを見せながら、持ってきた袋を黒ウサギに投げて寄越す。

受け取る際にチャリン、と音が鳴ったが、黒ウサギはそれどころではなく、貴利矢と袋に何度も視線を向ける。

「あー、いいよ、さっさと開けちゃいなって」

「貴利矢さん、あれって？」

「パラドにはバレてみたいだけど、活動資金的な？」

朝の会話を思い出しながら、バツが悪そうに永夢とは視線を合わせずに答える。視線を合わせれば最後、永夢の中で補足説明をしているパラドの言葉も相まって凄いことになっていて彼の目を視界に収めてしまう。

なんて考えていると、ウツキヤー!! と特大の悲鳴が響く。

「どうしたのだ、黒ウサギ」

「見てください、レティシア様！」

二人して袋の中を覗き込んで驚いたような声を発する。

「貴利矢さん、ここ、こここここれはいったいどうしたのでございますか!」

「疑うつもりはないが、まさか汚い手を使ったのではないだろうか?」

言いながら、二人は袋の中身を取り出しながら質問を重ねる。

握られていたのは、何枚もの金貨。永夢と貴利矢は知らないことだが、その枚数はコミュニティの全財産よりも多い。

「ちよいといくつかの店主を煽ってゲームをしてきただけさ。正当な勝利品だ。来たるべきときのための活動資金集めをしたんだが、こうなっちゃったら仕方ねえ。それだけあれば今回の祭典への資金難? も解決するだろ」

「いい、いいのですか? これは貴利矢さんが個人的に勝ち取ったものなのでは?」

不安げな表情のまま、黒ウサギは尋ねる。

無論、いいわけではない。この資金は永夢を元の世界に帰す方法を見つけるための軍資金に成り得るはずのものなのだから。それでも、貴利矢の中では彼女たちを見捨てるという選択はとうに無くなっていった。

「いいから行くうぜ。あんたらがいなくなると自分たちも困るんだよ。だから十六夜く

「んたちも連れ戻すぞ。ついでに、祭典も楽しんでから帰ってくるとしよう。永夢もいいよな？」

「もちろんです。十六夜くんたちも悪気があったというより、多分隠し事をされていたことに拗ねていただけだと思います。仲直りしたら、みんな楽しんでみましょう」

「お、言うねえ。さすが将来の小児科医。こどもの考えることは理解できるってか？」

「貴利矢さん、少しいいですか？」

「……………ああ」

黒ウサギとレティシアに一言断りを入れ、距離を取る二人。

「また一人で動いたんですか？」

「あー……………まあ、そうなるな。って、怒るなよ。だいじょうぶだって、自分の方でも引き際や相手は選んでるから。な？」

ギフトゲーム巡りのためにたまに1日中出かけたりしていたのは怒られても言い訳できないが無茶しすぎかと聞かれれば否である。

「はあ……………今更貴利矢さんの行動を制限できるとは思っていますし、する必要もないとは思っています。僕たちはいつだって、貴方に救われてきましたから。信じてますよ？」

「もちろん。もうおまえを裏切るような真似はしないって。そら、行くぞ」

「はいー」

二人が戻つて来ると、こどもたちにくつつかの約束事を聞かせていた黒ウサギもそれを終えたのか、準備万端とばかりに頷く。

「しかし、十六夜たちも無策ではあるまい？ 私たちが追いついたと知れば本気になって逃げる可能性がある。キミたちがなにやら話し合っているうちにコミユニティ中を探してみたが、金庫の中身に手を出した様子はない。大方、白夜叉に頼み込んでいるだろうことは想像に難くない。さて、どうする？」

聞いた先。話を聞いていた永夢たちに問いかけるが、

「なんだか、自分たちは参謀かなにかと思われている気がするけど、気のせい？」

貴利矢は答えるよりも自分の疑問を優先した。

「ふふつ、どうだろうな？ だが、私たちもキミたち二人を大いに頼りにしているということだけは確かだ」

「ほお。なら、期待には応えないとな、永夢」

「はい。おそらくですが、十六夜くんたちは機動力のある十六夜くん、耀ちゃんの二人のどちらかが飛鳥ちゃんを伴って二手にわかれる可能性が高いような気がします」

パラドと考えを重ねながら、永夢とパラドは二人で作戦を立てていく。

「それに、人の多い場所に逃げられでもしたら、彼らの力だと周りへの迷惑も予想されま

すよね？」

この発言には、聞いている全員が無言で頷くしかなかった。黒ウサギなんかは力強く何度も首を縦に振る始末だ。

「けど、んなこと言っても多分逃げると思うぜ、あの子たち」

「僕もそう思います。なので、遭遇した瞬間に手を打ちます。みなさんには、その一手を打ってからは全力で三人を捕まえてください」

「だいじょうぶでしょうか？」

「捕まえられるかどうかはわかりませんが、周りへの被害だけは保証します。あとは、一度だけなら通用する手がありますから」

走りながら、貴利矢にだけ聞こえる声で作戦の一部を伝える。耳を傾けていた貴利矢は、悪い笑みを浮かべ、永夢も手段を選ばないよなあ、などとつぶやいていた。

「永夢さんがそこまで言うなら、黒ウサギはお任せするのですよ」

「そうと決まれば、急ぐとしようか。この速度では十六夜たちに追いつけないだろうか
らな」

「永夢は自分に乗れ」

・ 歩みを止めず、先を行く二人に追いつくべく貴利矢はガシャットを起動させる。

『BAKUSOU BIKER!!』

「二速。変身」

『ガシヤット』

ゲームドライバーにガシヤットを挿入するやいなや、即座にゲームドライバーを開き、周りに展開していくパネルを蹴り抜く。

『ガツチャーン!』『レベルアップ!』

『爆走! 独走! 激走! 暴走! 爆走バイク!!』

永夢の隣に、レベルアップによってバイク形態となった仮面ライダーレーザーが並ぶ。

「さあ、飛ばすぜ!」

「行きましょう、貴利矢さん、パラド。超キョウリョクプレーで!」

「ああ。十六夜くんたちを捕まえるぜ!」『十六夜たちを捕まえるぞ!』

Intensification! 鬼づつこ

資金はないものの、ジンを伴って白夜叉の元へとやってきていた十六夜たち問題児三人は、白夜叉からの依頼を内容も聞かずに受諾し、彼女の力を利用し祭典の開催地である北側へと到着していた。

遠目からでもわかるほどに色彩鮮やかなカットガラスで飾られた歩廊に瞳を輝かせる飛鳥。

昼間にも関わらず街全体が黄昏時を思わせる色味を放っているのは、街の装飾のせいだけではない。境界壁の影に重なる場所を朱色の暖かな光で照らす巨大なペンダントランプが数多に点在しているためだ。

キャンドルスタンドが二足歩行で街中を闊歩している様を見て、十六夜も喜びの声を上げた。

問題児たちは各々の楽しみを発見したらしく、いまにもそちらへと走り出してしまいうようなほどにはわくわくしていたりする。

途中から白夜叉も混ざり話していたのだが、胸の高まりが鎮まらない飛鳥は、美しい街並みを指差し熱っぽく訴える。

「もう降りましょう！ あのガラスの歩廊に行ってみたいわ！ いいでしょう白夜叉？」

「ああ、構わんよ。話は夜にでもしよう。暇があればこのギフトゲームにも参加していけ」

着物の袖から取り出したゲームのチラシ。十六夜が耀も連れてきて、三人でチラシを覗き込むと、

「見イつけた——のですよおおおおおおおおおおおおおおお！」

ズドオン！ と、ドップラー効果の効いた絶叫と共に、爆撃のような着地。

その衝撃に全員が跳ね上がり、後ろを振り返る。

大声の主は、問題児を追ってきた彼らの同士・黒ウサギ。

「ふ、ふふ、フフフフ……！ ようおおおやく見つけたのですよ、問題児様方……！」

淡い緋色の髪を戦慄かせ、怒りのオーラを振りまく姿は愛嬌ある普段のそれとは似ても似つかない。

瞬時に危険と判断した十六夜は、他の問題児にも逃げるように促そうとしつつも、機動力のない飛鳥を連れて行こうとする。

「逃げるぞッ！」

真っ先に動いた十六夜は飛鳥と共に右へ、一拍遅れて耀は左へと逃亡を図った矢先。

「逃がすか!」

バイクとなったレーザーに乗ったエグゼイドが颯爽と駆けつけ、彼らの行く手を回るようにして阻む。

突然の出来事に数瞬動きが止まったとき、エグゼイドがキメワザスロットホルダーにガシヤットを挿入することなくボタンを押す。

『ステージセレクト!』

直後、電子音が響くと同時にエグゼイドたちの立つ世界は一変した。

「……は……?」

「さあな。大方、お医者さんの仕業だろうぜ」

耀の疑問に答える十六夜も辺りを見渡しながら、どこか納得のいかない顔を見せる。
(まさかお医者さんたちのベルトにこんな力があつたとはな。確認できる範囲内からだと遠くに立ち並ぶビル群からして現実世界の街並みを再現したつてところか?)

だが、十六夜にはどうしても落ち着けない理由があつた。

「おい、気をつけろよお嬢様たち」

「なによ十六夜くん。いま景色を見るのに忙しいのだけれど?」

あちらこちらへと視線を流す飛鳥に、そういえばこの時代の景色は初めてかと思ひ返す十六夜。確かに、彼女にとってはこの空間が楽しみなものに違いない。

「くそつ、うまい具合に戦力を削ってくれたな」

口から出てくる言葉は悔しそうだが、その実、十六夜の顔には超楽しいと書かれてい
る。が、その余裕もそう保てるものではなく。

建物の一角に、緋色の一閃が映る。

「チツ、俺たち以外誰一人姿を見せないと思ったら、やっぱりそういう魂胆か。春日部、
二方向に分かれて逃げるぞ！」

「え、ちよつと!?!」

隣にいた飛鳥を抱きかかえ、この場から離脱せんと駆け出す十六夜。

耀もなにかを察知したのか、旋風を巻き上げて上空へと避難しようとするが、数手遅
かった。

「簡単に逃がすことはできないな」

「わ、わわ……!?!」

上空からは先手を打ったレティシアが耀へと迫っており、急遽飛ぶ方向を転換しよう
としたときには、背後に黒ウサギが控えていた。

「——うそ」

「残念、本当です。耀さん、捕まえたのですよ！ もう逃がしません！」

どこかがぶつ壊れ気味に笑う黒ウサギ。

耀を引き寄せ、胸の中で強く抱きしめ、彼女の耳元で囁く。

「後デタツプリト御説教タイムナノデスヨ。フッフ、御覚悟シテクダサイネ」

「りよ、了解」

反論を許さないカタコトの声に、耀は怯えながら頷く。

「レテイシア様、協力ありがとうございます。黒ウサギはこのまま十六夜さんたちを追います。耀さんのことはくれぐれもお願ひします！」

「ああ。だがな黒ウサギ、十六夜と飛鳥を追っているのは二人、逃げているのも二人。ならばそこに加勢するのはアンフェアではないか？ 耀もこうして捕まえたことだ、十六夜たちは永夢と貴利矢に任せるのもいいだろう」

「しかし！ コミュニティ存続の危機と言っても過言ではないのですよ!! もてる限りの戦力で手早く捕獲するべきです！」

黒ウサギの叫び声が響く中、突如として彼女の彼方後方にあるビル群が倒壊している。

「な、なにごとですか——!!?」

「ふむ……十六夜と永夢の鬼ごっこも苛烈さを増してきているようだな。当初の計画通り、彼らの言うげーむえりあ？ とやらに引き込んだのは正解だったようだな」

「ゲームエリア？」

「ああ、なんでも永夢と貴利矢の持つゲームドライバーに備わっている機能のひとつだそう。こども容易くゲーム盤を出されると少々困りものではあるが、今回に限ってはプラスに働いてくれたな」

ビル群の倒壊。

これがかもし、実際の街で建造物を破壊していたと想定するならば、統治者からどんな言葉を言い渡されていたものか。

それを想像するだけでも溜息が溢れるというものだ。

「本当に、永夢さんたちがいてくれてよかったのですよ………」

遠い目をしながら呟く黒ウサギには、既に喧騒の渦中に首を突っ込む気は微塵もなかった。

時間は少し遡り、貴利矢の資金で十六夜たちの向かう北側へとたどり着いた永夢たちは、彼の思いついた作戦実行のため、各々行動を開始した。

「では作戦通り、レティシアさんは姿を隠しつつ、僕がゲームエリアに十六夜くんたちを押し込んだら黒ウサギと協力して機動力のある十六夜くんか耀ちゃんのをどちらかを押さえてください」

「了解した。では、残った方は？」

「僕と貴利矢さんで捕まえませう」

「任せよう」

言うのが早いか姿を隠すために去っていくレティシアを見送り、永夢もガシヤットを取り出す。

『MIGHTY ACTION X!!』

「大変身」

『ガシヤット』

バイクに乗ったまま、自身のドライバーへとガシヤットを挿入し、ゲーマドライバーを素早く開く。同時にバイクも発進させる。

走りながらも展開するパネルのひとつをバイクでぶち破る勢いで突撃して選択しながら、黒ウサギに追いつくべく速度を上げながらのレベルアップを果たす。

『マイティジャンプ！ マイティキック！ マイティマイティアクションX!!』

変身した勢いそのまま黒ウサギに追いつくと、今まさに分かれて行動しようとしていた問題児三人が視界に映ると、永夢はレーザーを巧みに乗りこなし、十六夜、飛鳥、耀を困うように走行し、動きが硬直した一瞬をついて、鬼ごっこのステージそのものを変更する。

『ステージセレクト!』

「さあ、俺たちのゲーム攻略はここからだ!」

「ノリにのつてるぜ!」

変貌した辺り一面は彼らもよく戦闘をこなしていた現代の街並み。

ステージの切り替わりの時間を利用し、景色を眺めている問題児たちの隙をついて一旦身を隠す。あとは手筈通り、黒ウサギが動き出したら残る一方を追うだけだ。

「できれば、十六夜くん我真つ先に捕まってもらうのが一番なんだろうけど」

「だろうなあ。けど、永夢もパラドもそんなこと望んじやないんだろ?」

永夢の独り言に反応した貴利矢の言葉に苦笑を浮かべながら、永夢は「そうなんですよね」と小声ながら反応を返した。

「これもゲーマーの性ってやつか」

「すいません、貴利矢さん」

「いいのいいの。最後におまえたちが勝利するってなら、過程も楽しんでくれて構わな
うさ」

「そう、ですかね?」

「そうそう。そら、自分たちもいつまでも止まってるわけにはいかないんだからな」

促され、首を縦に振る永夢。

（十六夜との勝負、実現できるのなら心が躍るな！）

視界の端で、黒ウサギが十六夜を取り逃がし、耀へと狙いを定めたのがわかった。

「パラド……ああ、行こうか。すいません、貴利矢さん。僕もパラドも、十六夜くんたちを追います！」

「はあ、だろうな！ それでこそ天才ゲーマーMだぜ！ おまえたちの力、十六夜くんに見せてやりな！」

「はい！」

（おう！）

運転に集中し、十六夜の駆け出したすぐ後を追うようにして追跡。

耀は先の場所で黒ウサギとレティシアに追われてるだろうことを推測するに、あまり音のない空間ではバイクの騒音など既に十六夜の耳には届いているに違いない。

だからこそ、隠れてこそこそ動くより正面切って追った方が十六夜からの反応もいいのだろう。

「お、やっぱり追ってきたなお医者さん！」

楽しそうな笑みを浮かべながら、後方に姿を現した永夢と貴利矢を一瞥する十六夜。

しばらく走行を続けてみるが、バイクと人の身での追いかけてこであるにも関わらず、永夢たちはいまだ十六夜に追いつけずにいる。

「こいつはまずいんじゃないのか?」

「そうですね……十六夜くんの力は僕たちの予想の上を行っているみたいです。それに、彼の通った道を見てください」

「ん? こいつは!」

貴利矢の視線の先には、砕かれた道の端々。

かなり強力な力で踏み抜かれたのだろうそれは、先ほどから十六夜が逃走しているルートにのみ発生している。

「おいおいおい、自分たちはもしかしてやばい相手と鬼ごっこしてるんじゃないのか?」
「どうでしょう? 十六夜くんはあれで、人に力を振るうような真似はしたくないような素振りがありました。同時に、力を十全に使える場所を求めているようにも……貴利矢さん、一度十六夜くんとはぶつかってみようかと思うんですが」

「はあ……患者と向き合うのも医者に求められる一要素、か。自分にも求められることだけど、永夢には最も必要なことかもな。もちろん付き合うぜ」

「ありがとうございます!」

相棒からの了承も受け、永夢はもうひとつのガシャットに手を伸ばす。もう一方の手はバイクに乗りながらも器用にゲーマドライバーを閉じた。

「(こ)からは、真剣勝負だ」

『GEKITOTSU ROBOTTS!!』

「大・大・大変身!」

新たに一本、ガシヤットをゲーマドライブに挿入し、もう一度開く。

『ガシヤット』『レベルアップ』

『マイティジャンプ!』 『マイティキック!』 『マイティマイティアクションX!』

『アガツチャ!』 『ぶっ飛ばせ!』 『突撃!』 『ゲキトツパンチ!』 『ゲ・キ・ト・ツロボッツ!』

召喚されたロボツアーマーと合体しレベルアップを果たした直後。

前方に建てられていたビルが一階から数階上までを残して倒壊した。

「な、なんだ!?!」

その瓦礫の山は永夢たちの行く手を阻むように倒れており、瓦礫の上には十六夜が一人、腕を組んで待ち構えていた。

「よお、お医者さん、レーザー。俺を追ってきてくれて嬉しいぜ」

「飛鳥ちゃんは?」

「お嬢様ならこの先を一人で逃げてると思うぜ」

瓦礫の向こうを差しながら答える十六夜だが、視線は依然として永夢に向いて離れない。
い。

「これならお医者さんはお嬢様を追う前に俺を相手するだろ? ついでにお嬢様も逃げ

られる。さあ、遊ぼうぜ」

(いいぜ、元からそのつもりだ。永夢、レーザー!)

「ああ。天才ゲーマーMの力、しっかりと見せてやるよ!」

「ついでに名監察医の力もな!」

「よし、なら俺が捕まるか、お医者さんたちが俺を捕まえるかで勝負だ」

「のつた!」

言葉を交えてすぐ、双方動きを見せる。

十六夜は倒れていないビルへと向け駆け出し、永夢はゲキトツスマツシャーの装着された腕を十六夜の進路の更に先へと向けた。

次いで、ゲキトツロボツツガシャツを一旦ゲームドライブから取り出し、

『ガツシユーン』

引き抜いたガシヤットをキメワザスロットホルダーへと挿入。上部のボタンを押す。

『ガシヤット!』『キメワザ!』

「先手は譲らない」

『GEKITOTSU CRITICAL STRIKE!』

腕に装着されていたゲキトツスマツシャーを射出させ、その一撃は――。

天才ゲーマーと問題児の初の勝負は、まだ始まったばかり。

P u r s u i t コンビ

装着されていたゲキトツスマツシャーが射出され、その一撃は十六夜が駆けていく先にあるビルへと迫り、容赦なく支柱を破壊していく。

「つと!? ハハッ、いいじゃねえかお医者さんお！ やつぱり派手にいかないと面白くないよな！」

降ってくる瓦礫を余裕の笑みを浮かべながら回避していく十六夜だが、次の瞬間、焦ったような表情を見せながらしやがみ込んだ。

直後、十六夜の頭があつた場所をゲキトツスマツシャーが通り過ぎていく。

「危ねえだろ！」

「悪い、久々で感覚狂つてたみたいだ！」

文句を言う十六夜と、謝る永夢。だが、まるで当たつていたとしてもだいじょうぶだつただろうと思わせる程に彼らの声に怒気はない。

永夢も既にわかつているのだ。十六夜の人からは逸脱した異常なまでの頑丈さ。強力な力。それらは自分たちにも届くレベルであることを。

「まだまだいくぞー！」

放ったままのゲキトツスマツシャーを操作し、近くにあるビルを次々に破壊していく永夢。その行動は、十六夜が逃走を図る先を読み、的確に進路を絶つていく。

「チツ、ゲームメイクではお医者さんの方が上か……なら、やるしかないってわけだな」
一度、ゲキトツスマツシャーを止められないかとやや威力を抑えた拳を真正面から放ったが勢いが弱まっただけに留まり、いまま飛び続けているのだから仕方がない。まさか自分たちの一方的な言い分で始めたゲームで仲間の武器を壊すわけにもいかず、十六夜の選択肢は絞られていく。

「レーザー！」

「おうよー！」

そんな最中、永夢の呼びかけに応え、これまで一切動きを見せなかった貴利矢が永夢から離れ、十六夜へと走り出す。

「ハッ、どうしたんだレーザー。あんた単体で俺を捕まえる気か？」

「さあなつとー！」

繰り出される拳をかわし、十六夜を囲むように走る貴利矢は、とぼけながらも止まらない。
「足止め……にしては緩いな。なにを狙ってたんだ？」

「おらおらおらおら！ さらに飛ばすぜえ？」

好き放題と言った感じで回っている合間に、十六夜の前方に永夢が到達する。

彼は足を止めると、十六夜と向き合うようにして前を向いた。

「流石だな、天才ゲーマー」

「まあな。さて、ひとつ確認したいんだけど、このゲームは俺が十六夜を捕まえるか、十六夜が逃げ切るかってことでいいんだよな？」

「だな。いまのところ、終わりは見えないけど」

「なら、制限時間を設けないか？ それまでに捕まえるか逃げ切るか。この方が単純でいい」

永夢の提案に、十六夜が首を傾げる。

「いいのか？ 言っちゃなんだが、お医者さんたちが不利になるだけだぜ？」

「そうでもないさ。薄々わかっているとと思うが、ここは俺が用意したゲームエリア——ゲーム盤だ。時間的不利がそこまであるとは思えない」

「そうかよ。ならいいぜ、乗った。お医者さんのルールでいこう。時間はどうする？」

「10分。この時間内でおまえを捕まえる」

短い。あまりに短い時間だ。けれど永夢は言い切った。おまえに負けることはない。勝つのは自分だと。

そこまで言われて、はいそうですかと引き下がる十六夜でもなく。寧猛な笑みを浮か

べ、かかってこいと言わんばかりに瞳を輝かせる。

「俺にそこまで言った奴は久しぶりだぜ、お医者さん。あとで泣くなよ！」

「言ってる！ 勝つのは俺たちだ！ レーザー!!」

十六夜は後退し、永夢の隣には貴利矢が戻ってくる。すかさず彼に乗ると、再び下がっていった十六夜を追い出す。

「つたく、滅茶苦茶だぜまったく。で、勝機はあるんだろうな、永夢？」

「もちろん。勝つためには切る必要があるけど」

「やっとか。早い方がいいだろ、それでいいんだって」

永夢の一言で理解できたのか、貴利矢はそれ以上は聞かずに己を走らせる。金髪の少年の背中はずいぶん遠くないが、このまま追いかけても捕まることがないだろう。

もう一手。

勝つためには、もう一手打つ必要がある。

「よっしや永夢！ 俺のドライバーにあれを挿せ！」

「おう！ 行くぜレーザー！」

『GIRI GIRI CHAMBARA!!』

貴利矢の持つガシヤットをひとつ取り出し、彼のドライバーにセットする。

『ガシヤット』

そのままドライバーを開き、即座に貴利矢から離れて十六夜の足止めに向かう永夢。
「勝負だ、十六夜！」

「くそつ、こんなルールじゃなければ相当楽しめそうなんだけどなあつと!? そうか、別に捕まらなきゃ平気だったな!!」

なにか閃いたかと思えば、近くにあつた瓦礫を掴み永夢に投げ出す。

「うおっ!?!」

有り得ない速度で飛来する瓦礫は、永夢のすぐ近くを通り過ぎ、背後の建物を無残に破壊させていった。

「へ? ……ええええええつっ!?!」

まずい、非常にまずい。

瓦礫を投げただけで出るはずのない威力を目の当たりにして、この状態でも当たればタダじゃすまないかと確信する。

焦る永夢とは反対に、攻略の糸口を見つけた十六夜は楽しげだ。

そんな攻防を繰り返す傍、2本目のガシヤットを差し込まれたレーザーに変化が起る。

「三速」

貴利矢の掛け声と共にチャンバラゲーマーが召喚され、貴利矢——仮面ライダーレ

ザーと合体していく。

『レベルアップ』

『爆走！ 独走！ 激走！ 暴走！ 爆走バイク！』

『アガツチャ！ ギリ・ギリ・ギリ・ギリ！ チャンバラ！』

チャンバラゲーマーは彼の腕となり、脚となり。バイク形態から、チャンバラゲーマーを介して人型へとレベルアップを遂げる。

「ようやく人型になれたぜ！ さて、捕まってもらおうか！」

永夢と瓦礫合戦をする十六夜は、響き渡る轟音故に気づかない。自分の背後に、人型となった、自分を捕まえることのできる存在が迫っていることに。

「ハハハッ、どうしたどうした！ お医者さんの力はこんなもんじゃねえだろ！ もっと楽しませてくれよ!!」

もう一発。

永夢はゲキトツスマツシャーでかろうじて進行方向をズラしながら応戦しているものの、なにぶん一発一発が重いせいか体力がみるみる削られていく。

有利を悟ったか、一瞬。瞬間的に意識を緩めたことを、十六夜は後悔した。

上から影が差し、自分を覆う。

「ゲームは終りだ、十六夜くん」

声が聞こえた。

最近知った、胡散臭くもどこか信頼の置ける声。視界の端に、こちらに伸びる手が映る。

「——ッ?!」

咄嗟の判断だったのだろう。

前方に体を倒しこみ、地面を蹴り抜き。

半ば吹き飛ばされるように距離を取った十六夜は、自分がいた場所に佇む影を睨む。

「あんたは……」

予想以上の力で地面を蹴ったせい、土煙がひどく正確な姿はわからない。けれどよくわかる。短い時間であろうと、人の声を覚えるには十分な時間を共にいた。

ロクな着地もできなかったので転がったせいでついた土埃を払いながら、十六夜が立ち上がる。

「まさかだぜ。お医者さんの姿を見ていたから可能性としてはあるかと思っていたけど、本当に人型になるとはな、レーザー」

「ここからは自分も鬼だぜ。精々気をつけるんだなあ」

捕まえられなかったことなど気にした様子も見せず、土煙が晴れる前に行方を晦ます貴利矢。

「判断早いな……」

もう少し引き止められるかと思ったが、あっさりと行ってしまふ。

悪手だな、と溢す十六夜は、それでも笑みを消すことはない。苦戦上等。むしろいい、とさえ思っているような瞳は、先ほど垣間見せた油断や緩みはなくなっていた。

貴利矢が人型になり、自分を捕まえることができるようになった。

つまり鬼は二人。

動くものがあれば即座に反応せんと構えていると、煙が揺らいだのが映った。しかし、揺らいだのは上空。

「上か！」

「思ったよりたかーい！」

情けない声と共に落ちてくるのが一人。

黄色と黒のカラーリングの仮面ライダー。間違いなくレーザーだと判断した十六夜は、なぜ上から？ と疑問を浮かべながら軽々と避ける。

「いまだ！」

『MIGHTY BROTHERS XX』

避けた先には、待ち構える永夢。慣れた手つきで新たなガシャットを装填して十六夜との距離を詰める。

『ダブルガシヤット!』『ダブルアップ!』

『俺がお前で! お前が俺で! マイティ! マイティ! ブラザーズXX!』

青緑とオレンジを基調とした二人のエグゼイドがレベルアップと同時に左右から手を伸ばすが、

「そりゃ、数で来るよな!」

ひとつしやがんでふたつの手を回避すると、スライディングで包囲網を抜け、二人のエグゼイド、貴利矢と向かい合う。

「これでもダメか」

「やんちやすぎんぜ、ったくよお」

並び立った仮面ライダーたちは、油断なく十六夜を見る。

対する十六夜も、なにか細工されていないかと目を凝らす。

「膠着状態に持ち込めばこつちの有利……とりたいところだが、まだなんかあるよな?」

「さあ、どうか」

挑発する十六夜と、首を傾げてみせる永夢。

互いに譲らない状況で、しかし。

『ガッシューン』

「は？」

「ああ？」

貴利矢と十六夜が間拔けな声を上げるのに構わず、永夢はゲーマドライブバーに挿れていたガシヤットを引き抜いた。

「おいおいおいおいおい、どうしちまつたんだよお医者さん！ あんたならまだ戦いようはあつただろ?! 諦めたわけじゃないはずだ！」

「そうだけ永夢！ 自分一人じゃ十六夜くんの相手は厳しいつてのに！」

貴利矢の本気で困った声から、永夢の行動が二人の作戦ではないと結論づけた十六夜は真意を探ろうとするが、

「ごめんね、十六夜くん」

永夢が一瞬、笑みを浮かべたような気がした。永夢だけではない。彼の隣にいる貴利矢も、変身が解けていないから定かではないが、薄っすらと微笑んだような……。

「この勝負——」

永夢が言葉の続きを発せず、十六夜の背後に目をやる。様子がおかしいと振り返ろうとしたときには既に遅く、十六夜の肩を誰かが掴んだ。

「——俺たちの勝ちってわけだな、十六夜」

永夢とよく似た笑顔を浮かべる男性が、問題児筆頭である十六夜を捕まえた瞬間だつ

た。

Found天才ゲーマー

目の前に佇む永夢と、変身したままのレーザー。

そんな彼らと対面している十六夜の肩を掴んで笑顔を浮かべている長身の男性が一人。

「この勝負」

「俺たちの・勝ちってわけだな、十六夜」

永夢とその男性が共に勝ち誇って言うてくるわけだが、当の捕まった十六夜本人は珍しく理解が追いついてない。

「いや、待って待て。そもそもおまえ誰だよ？　なんで俺たちの勝負に割り込んでお医者さんの勝ちにされなきゃいけないんだ？」

「ん？　俺たちはルールを犯してないぜ。ルールに則り、その中で勝ちを拾ったんだからな」

「……つまりどういうことだ？」

「俺はおまえ、おまえは俺ってことさ。なあ、永夢」

明確な答えこそ出さないものの、ヒントは与える。パレードなりの楽しみ方かと納得し

た永夢は「そうだね」とだけ答え、変身を解いた貴利矢と笑みを交わしながら十六夜の
前まで歩いてくる。

「とりあえず、俺の負けってわけか？」

「納得できてないみたいだね」

「当たり前だろ。わけわからねえまま負けたとか認められるか」

永夢はひとつ頷き、理解を示す。

「まあ、そうだよなあ。自分だったら絶対に愚痴るし、ルール違反だろ！　くらいは言う
に決まってるしな」

貴利矢もわかる、わかると呟きながら肯定する。

ルールのには問題ないのだが、永夢の場合は人間としての常識が通じない部分がある
ので理解されるはずもなく。しかし、こうした人外魔境の地では普通に成り立ってしま
う。

「まずは彼の紹介から、かな？」

「ああ。しっかり説明頼むぜ、お医者さん」

「そこは俺にさせろよ、十六夜」

十六夜が永夢に頼むが、パラドが横から割って入り、正面に立つ。

「こうして会うのは初めてだな。でも、俺はおまえのことを永夢の中からずっと見てい

「たんだぜ？ 俺たちにはまだ及ばないけど、将来が楽しみなゲーマーのおまえをな」

「ハッ、思ったよりハッキリと言ってくれるじゃねえか。どこの誰かもわからない奴がよ」

「そう怒るなって。これでも俺は“ノーネーム”にそれなり以上に貢献してるんだからな」

「なに？」

パラドは言うより早いか、ひとつのガシヤットを掲げる。

「そいつは！」

「ああ。すぐに見せてやるよ、俺の力をな」

これまで何度か見た、青を基調としたガシヤット。2種類のゲームを内蔵した大型のガシヤット——ガシヤットギアデュアルに取り付けられたダイヤルを回す。

『PERFECT PUZZLE!』

『What's the next stage?』

「変身」

静かな動作でガシヤットの起動スイッチを押すと、彼の前に出現したゲートが通過していく。

『デュアルアップ!』

『Get the glory in the chain. PERFECT PUZZLE!』

やはりゲーマドライバーを使用することなく変身したパラドは、青い仮面ライダーへと姿を変える。

「お医者さんとレーザーと同じかよ！ しかも、お医者さんと同じ姿になれるときたか！」

「はあ……十六夜、おまえは頭がいいし強いけど、たまにちよつとバカだよな」

「んだと!？」

普段ならありえない指摘にしかめっ面になる十六夜だが、パラドは楽しそうに笑う。

「俺なんだよ」

「は？ なにがだよ」

「だから、俺なんだって。仮面ライダーパラドクスは、俺が永夢に力を貸すことで、俺が変身してんだよ」

十六夜が永夢と貴利矢に目で訴えかけるが、二人は頷くことで肯定する。

二人からの無言の返答にマジかよ……とつぶやきながら眉間のシワを濃くするが、諦めたようにパラドクスに変身したパラドへと視線を戻した。

「あんたが本物なのはわかった。けど、わからないことがもうひとつある」

「なんだ？」

「お医者さんに力を貸していたってのはともかく、あんたいったい、どこから出てきた？ さつきまではもちろん、これまで一度足りとも俺たちとの面識はないはずだ。それどころか、召喚されたときも俺とお嬢様、春日部にお医者さんの四人以外はいなかった。答えてもらうぜ。あんたは誰で、どこから来たのかをな」

聞かれたところで、答える内容なんて決まっている。パラドはずっと、彼らを見てきたのだから。

ひとまず変身を解除し、辺りに散らばる瓦礫のひとつに座り込むパラド。

「俺はおまえで、おまえは俺だ」

「さつきも言ってたやつだな」

「そう。つまり、俺は永夢の側面って奴さ。だから俺は、ずつとおまえたちの側にいたぜ？ ガルドとのギフトゲームのときも、ペルセウスとのときも。この世界に呼ばれたときから、“ノーネーム”の本拠にいたときだってな。俺は最初から、永夢を通してすべてを見てきた。なぜなら、俺が天才ゲーマーMだからな」

天才ゲーマーM。

これが彼らの暮らす地球であれば、大した意味も持たない言葉でしかないだろう。けれど、こと箱庭においては強い意味を持つ言葉であり、十六夜がそれを忘れてはいるはず

もなかった。

「おいおいおい、したらなにか？ あんたはお医者さんの力の一端だとも？」

「ああ、その解釈で問題ないぜ。俺は永夢の力であり、あいつだからな」

人間ではないのか。

そう聞かれたのをわかつたうえで、パラドは笑う。自分にしかできないことがあるから。自分だからこそ、助けられる、握れる手があるから。

「にしてもだ。中々いいお披露目だったんじゃないかねえの？」

・紹介は終わったと判断し、会話に入ってくる貴利矢。

「おう、レーザー。相変わらずいい演技だったな」

「まあな。いやーまさか十六夜くんを騙せるとは思ってたぜ。まだまだ若いな」

十六夜の頭を軽く叩きながら笑う貴利矢の行動から、先ほどのゲームの最後に見せた彼の驚く顔が作り物だったと理解したのか、十六夜は面白くなさそうに顔を背けた。

「ハハッ、思ったより子供で安心したけどな」

聞こえるか聞こえないかの声量で安心したように呟いた貴利矢の言葉に、永夢も頷く。

「そうですね。僕も安心しました」

「おいおいおい……敗者として勝者の言葉は認めるけどよ、その言い方はどうよ？」

至極真つ当。

永夢と貴利矢からの返答に黙る十六夜。

「まあいいじゃないか。ともかく、勝負は俺たちの勝ちだ。おまえたち問題児との勝負全体で見てもな」

パラドの完全勝利宣言と共に、飛鳥を抱えたレイシアが上空から舞い降り、ビルの上を駆けてくる黒ウサギの姿も遠くに映った。

「チツ、全敗か。仕方ねえな」

「ごめんなさい、十六夜くん。私の判断ミスだわ」

「いや、いいさ。どのみち俺も判断ミスはしたわけだし、なにより今回はお医者さんたちが上手だった」

納得している。明らかに戦略性で負けたのだから。

全力を出していなかったなんて幼稚で情けない言い分はしないし、全力でやったとしても果たしてどうだったか。ひとまず、今回の勝負では敗者に甘んじたのは、意外にも十六夜だったのだ。

「そう。貴方がいいなら私も認めるわ。それで——その貴方は誰かしら？」

飛鳥もひとつ頷くと、永夢の隣で待機しているパラドへと話しかける。

彼女が知る限り、箱庭に来てから一度として見たことのない青年が仲間と一緒にいる

のだから、当然気になる。

傍に控えるレティシアも静かに聞く姿勢を取る。

「お、なんだ俺に興味があるのか？」

「興味というより、警戒なんだがな」

レティシアは口ではそう言っているが、永夢と共にいる時点である程度警戒は緩めていた。

そうして黒ウサギも到着するのを見計らって、永夢が一步前に出る。

「えっと、みんな集まったところで紹介します。パラド」

「ああ。やつとのお披露目だな。まあ、十六夜に勝つてのネタばらしだから気分がいいぜ」

永夢の横まで進んできたパラドが、自分を見る十六夜、飛鳥、黒ウサギ、最後にレティシアを見据える。

彼はひとつ頷いてから、口を開く。

「耀と十六夜には話したが、はじめまして。永夢のギフトとして記録されている天才ゲーマーMだ」

名乗ると同時。黒ウサギはハッと何かを思い出したように口を両手で塞いだのを、永夢はもちろん、十六夜が見逃すはずもなかった。